「たつて宜いたらう、何も、あたいは蛇を苛めたり殺したりする爲に蛇を捉まへるんじやないからね」

木の上では申譯のやうな返事です。

「それにしたつてお前、蛇なんぞ……早く下りておいで」

「もう二つはかり捉まへてから下りるから、辨信さん、お前、あたいに拘はずに燈籠を點けに行つておいで」

木の上の惡太郎は下りようともしないから、盲法師は呆れた面で金剛杖をつき直しました。

二

浪切不動の丘の上に立つ高燈籠の下まで來た盲法師は、金剛杖を高燈籠の腰板へ立てかけて、左の手首にかけた合鍵を探ると、潛り戸がガラ〳〵と明きました。杖は外に置いて、釣燈籠だけは大事さうに抱へて中へ入つた盲法師、光明眞言の唱へのみが朗々として外に響きます。

唵阿謨迦毘盧遮那摩訶菩怛羅摩尼鉢曇摩忡婆羅波利波羅多耶吽——

コト〳〵と梯子段を登る音が止んで暫らくすると、六角に連子をはめた高燈籠の心に紅々と燈火が燃え上がりました。光明眞言の唱へは、それと共に一層鮮かで冴えて響き渡ります。

その餘韻が次第々々に下へおりて來た時分に、前の潛り戸の處へ姿を現はした盲法師の手には前と同じやうな靑銅の釣燈籠が大事に抱へられてゐましたけれど、持つて來た時とは違つて其の中には光がありませんでした。その筈です、中にあつた光は、高くあの六角燈籠の上へうつされてゐるのですもの、その光をうつさんが爲に斯うしてトボ〳〵と十町餘りの山道を杖にすがつてやつて來たのですから、今は、その亡骸を提げて再び山へ戻るのが當にその本望でなければなりません。

「え、何ですか、誰方か、わたしをお呼びになりましたか」

前に腰板へ立てかけて置いた金剛杖を、再び手に取らうとして盲法師はまた聞き耳を立てました。これが此の盲法師の癖かも知れません。誰も呼ぶ人はないのに先づ自分の耳を疑はないで、當もない處を咎め立てして見るのは、今に始まつた事ではありませんでした。金剛杖は手に持つたけれども、やはり其の塲は動かないで、怪しげな頭を振り立てゝ前後左右の氣配を覗てゐるやうです。

併し乍らこゝは前と違つて、あたりに大木も無ければ人家もありません。往來の山道よりは少し離れて高く突き出した處ですから、わざ〳〵でなければ、この夕暮に人が上つて來ようとは思はれない處です。

それにもかゝはらず、盲法師はその人を見つけたかのやうに、一旦手に取つた金剛杖をまたもその處へさしかけて、

「如何致しまして、これは、わたしから御前にお願ひして強つてやらせて戴く役目なんでございます、決して云ひつけられてやつてゐるお役目ではございません、わたしですか、今年十七になりました、エ、、このお山へ參つたのが日蓮上人と同じことの十二歳でございました、こんなに眼の不自由になつたのは何時からだと仰有るんですか、それは、つい近頃の事ですよ、尤も小さい時分から眼のたちはあまり宜くはございませんでしたがね、この春あたりからめつきり惡くなりました。櫻の花が咲く時分に、ポーッとわたしの眼の前へ霞がかゝりましたよ、その霞が一時取れましたがね、秋のはじめになると、またかぶさつて參りましたよ、今度は霞でなくて霧なんでせうよ、その霧がだん〳〵に下りて來て、今では、すつかり見えなくなりました。へえ、そりや隨分悲しい思ひをしましたよ、心細い思ひをしましたよ、けれども泣いたつて喚いたつて仕方がありませんね、前世の業といふのが、これなんです、つまり無明長夜の闇に迷う身なんでございますね、その罪ほろぼしの爲に、斯うやつて毎晩此の燈籠を點けさせて戴く役目を、わたしが志願を致しました、自分の眼が暗くなつた罪ほろぼしに、他樣の眼を明るくして上げたいといふわたしの心ばかりの功德のつもりでございますよ、ナニ雨が降つたつて風が吹いたつて、そんな事は苦になりませんよ、毎晩斯うやつてお燈明をつけに行く心持と、高燈籠へ火をうつして油がぽーと燃える音、それから勤めを果して、斯うしてまた歸つて來る心持と、それが何とも云へませんね……雨風といへば近いうちに大暴風雨があるつて、あの茂太郎がさう云ひました、大暴風雨のある前には蛇が澤山樹の上へのぼるんださうですがね、本當でせうか知ら、まあ、お氣をつけなさいまし」

誰も相手が無いのに盲法師は斯う云つてから、金剛杖を取り上げてそろ〳〵歩き出しました。

三

けれども、その夜から翌日へかけては別段雨風の模樣は見えませんでした。三日目になつて朝から曇りはじめたといへば曇りはじめた分の事で、これまた急には雨風を呼ぼうとも思へません。江戸の方面でも無論それと同じ氣壓に支配されてゐるのですからその日の亥の刻に江戸橋を立つ木更津船は、敢て日和を見直す必要もなく、若干の荷物と廿餘人の便乘の客を乘せて、碇を揚げようとする時分に、端舟の船頭が二人の客を乘せて大童で漕ぎつけました。

その二人の客の一人はどうも見たことのあるやうな年増の女です。つとめて眼に立たないやうにはしてゐるけれど、斯うして男ばかりの乘客の中へ、息をはづませて乘り込んで見ると、誰もその脂の乘つた年増盛りに眼を惹かれないわけには行かないやうです。この女は兩國橋の女輕業の親方のお角であります。

「庄さん、それでも宜かつたね、もう一足後れると乘れなかつたんだわ」

「宜い塵梅でございましたよ」

お伴でないらしい若い男は歯切れのよい返事をして、
「皆さん、少々御免下さいまし、おい、小僧さん、こゝへ敷物を二枚呉んな、親方、これへお坐りなさいまし、こゝが荷物の蔭になつて宜しうございます」
船頭の子から敷物を二枚借り受けて酒樽の蔭の程よい處へ、それを敷きました。帆柱の下にある最上の席は、もう先客に占められてゐるのだから、まあ、この若い者が見つくろつたあたりが今では恰好の處であらうと思はれます。
お角は遠慮をせずに其の席へつくと、若い者がその傍へ、兩がけの荷物を下ろして、どつかと坐り込みました。
「何だか天氣がちつとはかりをかしいけれど、明日の朝の巳の半頃には木更津へ着くつて云ひますから、案じるがものはありますまいねえ」
若い者が空を仰ぐとお角も空模樣を見て、
「降りはすまいけれど、何だか、いやに蒸すやうじやないか」
程經てこの船が海へ乘出した時分に、帆柱が押立てられて、帆がキリ〳〵と捲き上げられると、船は遽に勢を得て、さながら尾鰭を添へたやうであります。乘合の人も大海へ出た心持になりました。其處へ船頭が立ちはだかつて、乘合の客の頭數を讀み上げて、
「ちよつとお待ちなさいよ、乘合の衆は皆んなでエート二十三人でござんすね、二十三人、間違

ひはございませんね」
默目を押すと乘合の客は、いづれも面を見合せて默つてゐます。そこで船頭はもう一遍乘合の頭の上を見渡して、
「それで、女のお客さんは……エート、おかみさんお一人ですね、女のお客さんは一人しか無えんでございますかね」
と云つて船頭は、例のお角の面を凝と見つめてゐます。
「えゝ、わたし一人のやうですよ」
お角は惡怯れずに答へました。
「さうですか、それじやあ、如何か此方の方へお出でなすつて下さいまし、その帆柱の下にお出でなさるお年寄のお方、濟みませんが其處んところのお席を、此のおかみさんに讓つて上げてお呉なさいまし」
「え、此處を如何するんだね」
「濟みませんがね、船のオキテですからね、女の方が一人客の時には、その方に上座を張らして上げなくつちやならねえんです、それといふのは船は女ですからね、腹を上にして物を載せるから女にかたごつてあるんでござんさあ、だから船玉様も女の神様でござんさあ、女のお客が餘計お乘りなすつた時は、さうも行かねえが一人つきりの時は、その女のお客様を上座へ据ゑて船玉

様のお側にゐて戴くんでさあ、船に乗つた時たけは野郎の幅が利かねえんだから不祥してお呉んなせえな」

斯う云はれると年寄のお客、それは深川の炭問屋の主人たといふのが納得して、

「成程、さういふ譯でしたか、さういふ譯ならは、さあ、おかみさん此方へお出で下さい、若い衆さんも此處へお出でなさいましよ」

快く席を譲つて呉れました。その因由を聞いて見るとお角も強ひてそれを遠慮するやうな女ではありません。

「まあ、ほんとにお氣の毒に存じます、では、船の縁喜でございますから、あとから參りまして女の癖にお高い處で御免を蒙ります、庄さん、お前もそれでは御免を蒙つて此處へ坐わらせて戴いたらいゝでせう」

こんなわけで座席の入替が無事に濟みました。お角は此の船の中で神様から二番目の人にされてしまひました。

間もなくお角は、其の隣席にゐる例の深川の炭問屋の主人と好い話敵になつて。

「何方へ行らつしやいますね」

炭問屋の主人が先づ斯う言つて尋ねると、お角がそれに答へて、

「はい、木更津から那古の觀音様へ參詣を致し、事によつたら館山まで參らうと思うんでございます」

「御遊散でございますかね」

「左様いふわけでもございません、少しはかり尋ねたい人がありまして」

「はゝあ成程」

炭問屋の主人は腮を撫でゝ、はゝあ成程と云ひましたけれども、それは別に見當をつけて云つたわけではありません。本來此の女が今時分房州あたりまで遊散に出かける筈の女でもないし、また、そちらの方に尋ねる人があつてといふ言分も、何だかお座なりのやうに聞えます。と云つて今日はいつぞや甲州まで、がんりきの百を追ひかけて行つたやうな血眼でもなく、お供をつけて落つき拂つて構へてゐるのは、何か相當のあたりが無ければならない筈です。すでに相當のあたりがあつて出かける以上は、轉んでも只は起きない女だから、何か一やま當てゝ來るつもりなのでせう。炭問屋の主人は、そこまで詮索して見ようといふ氣はありませんから、いつしか自分の案内知つた房州話になつてしまひました。

那古へ行くならは鋸山の日本寺へも參詣をするがよいとか、館山あたりへ行つては何處の旅籠が親切で、土地の人氣は斯うたといふやうな事をお角に向つて細かに案内をして呉れるのであります。お角が、それを有難く聞いてゐると、他の乗合までが、それ〳〵口を出して、炭問屋の主人の案内の足らざるを補ふものもあるし、また突込んで質問をはじめる者も出て來ました。はじめ

はお角と炭問屋の主人だけの房州話であつたのが、今はお角をさし置いて、最寄の人達が炭問屋の主人を中に置いての房州話となりました。

その話のうちで最も多く一座の興味を惹いたのは鋸山の日本寺の千二百羅漢の話でありました。

その千二百羅漢のうちには必ず自分の思ふ人に似た首がある。誰にも知られないやうに其の首を取つて來て密に供養すると願事が叶うといふ迷信から、近頃は頻りにあの羅漢様の首が無くなるといふ話が、誰やらの口から語り出されると一座の興を湧かせます。

羅漢様の首を盗む者のうちには妙齢の乙女もある。血の氣に燃え立つ青年もある。わが子を失うて、其の悲しみに堪へやらぬ母親もある。最愛の妻を失うた夫、夫を失うた妻もある。さうして一旦盗んで來た首を密に供養して更に新しい胴體をつけて、また元へ戻すと生ける人ならば其の思ひが叶ひ、死んだものならば其の魂が浮ぶ……といふ話が興に乘つた時分には、もう日が暮れて風が漸く強く船が著しく搖れ出したやうに思はれるけれど、話の興に乘つた一座の人々は、それをさのみ氣にする容子もなく、

「それからまた、芳濱の茂太郎は、ありや如何しましたらうね」

酒樽の陰から若いのが斯う云ひました。

「芳濱の茂太郎は、今彼處には居りませんよ、あんまり悪戯が過ぎたもんだから、何んでも清澄のお寺へ預けられてしまつたといふことでござんすよ」

と答へるものがありました。

日本寺の千二百羅漢に次で、芳濱の茂太郎なるものが多少でも問題になることは、それが何かの意味で土地の名物でなければなりません。

「エ、芳濱の茂太郎が清澄のお寺へ預けられたんですつて」

それに一番驚かされたらしいのが、芳濱の茂太郎なるものとは縁もゆかりも無かりさうなお角であつたことは意外です。

「どう〳〵清澄のお寺へ預けられてしまつたといふこつてす」

「左様ですか、それは惜しいことをしましたね」

心から力を落したやうなお角の云ひぶりでしたから、

「おかみさん、あなたも彼の子を御承知なんでございますか」

「エ、、些とばかり……」

「左様ですか」

炭問屋の主人が改めてお角の面を見直しました。上總房州あたりへは初めて〻あると云つた人が芳濱の茂太郎なるものを知つてゐるといふ事が、どうやら腑に落ちなかつたもの〻やうです。

「その清澄のお寺とやらまでは、あれからまた餘程の道のりがあるんでございませうか」

「左様ですよ、遠いと云つたところが同じ房州のうちですから、道程にしては知れたものですが

何しろ、内と外になつて居りますからな、道は些とはかりおつくうなんでございますな、上總分で天神山といふのへお出なさると、あれから亀山領の方へかけて間道がありますんで、その間道をお出でになるのが宜しからうと思ひますよ、あの道は、昔し日蓮様なども清澄から鎌倉へお出なさる時は、しよつちうお通りになつた道ださうですから、それをお通りなさるのが芳濱から順でございませうよ、左様里數にしたら六里もありませうかな」

こんな話をしてゐる時に、船が大きな音を立てゝ著しく搖れました。それは東南から爆つた風が波を捲いて、龍卷のやうに走つて來て、この船の横腹にどうと當つて碎けたからです。

「エ、冷てえ」

薄暗い中に坐つてゐたもの〻幾人かゞ、ブルッと身慄ひをして、自分達の肩を撫で下しました。

四

それは今碎け散つた波のしぶきを多少共にかぶつたからの事で、その時に、はじめて海の風が穏かでないのみならず、天候も何となく險惡になつてゐた事を氣のついた者もありました。左へ夥しく搖れた船は、それだけ右へ押し戻されました。立つてゐた人は、よろ〳〵として帆柱の繩に身を支へて危なく轉け出すことを免れたものもありました。

「おい、船頭さん、大丈夫かい、何だか天氣が危なくなつたぜ、風がひどく吹募るじやねえか」

船頭に向つて駄目を押すものがありました。船の中にあつては船頭の一擧一笑も、乘合の人のすべての心を支配することは、いつも變りがありません。

「ナニ太した事はござんせんがね、これが丑寅に變らなけりやあ大丈夫ですよ、そんな事は有りやしませんよ、それでも此の分じや些とはかり荒れますよ」

船頭は斯う云つて乘客の不安を抑へて置いて、一方には水主の方へ向つて、

「やい、つかせて遣れ、開いちや惡いぜ、まきり直して乘落すやうにしねえと凌ぎが宜くねえや、そのつもりで遣つて呉れ、いゝかい」

大きな聲で怒鳴りました。

「おーい」

水主や荷揚げが腕を揃へて帆を卸ろしにかゝらうとする時に、颯弗として一陣の風が吹いて來ました。

「あ、こいつは堪らねえ」

その沫を浴びた者が荷物の蔭へ逃げ込むと、

「上からも落ちて來たやうだぜ」

果して水は横から吹きかけるのみではありません。

真暗になつた天からバラ〳〵と雨が落ちて來たのを覺つた時分に、船は大きな丘に持ち上げられ

るやうな勢で辷り出しました。さうして或處まで持つて行かれるとグルリ一廻りして、どうせ元の處へ押戻されて行く樣です。

「さあ、可けねえ」

乘合はそれ〴〵しつかりと手近なものへ捉まりました。

「下へ降りてお呉んなさい、急いじや駄目だ、この綱へつかまつて靜かに、靜かに」

船頭と親仁は聲を嗄らして乘客を一人々々、船の底へ移します。船の底の眞暗な中へ移された二十三人の乘合は、其處で見えない面をつき合せて、

「どうも、あたしや、この颪風といふ奴が性に合はねえのさ、たから一體、船は嫌ひなんですがね、都合がいゝもんたから、つい、うつかりと乘る氣になつて、此んな事になつちやつたんでさあ、困つたなあ、どうでせう、皆さん、間違ひはありやしますまいねえ」

おど〳〵した聲で不安を訴へるものがあると、また一方から、

「なあに、太した事があるもんですか、何方へ轉んだつて內海じやございませんか、これだけの船が內海で間違ひなんぞうる筈のものじやございませんよ」

存外落着いた聲でそれを和めるものもあります。

「ですけれどもねえ、內海だからといつて風や波は別段にやさしく吹いて呉れる譯じやありますまいからね、昔、日本武尊樣が大風にお遭ひになつたのは此の邊じやございますまいか、あの時

たつた貴君……あの通りの荒れでございませう」

情けない聲をして太古の歷史までを引合に出して來るから、

「ふ、ふ、ふ、あの時はあの通りの荒れたつたと云つたつてお前さん、あの時の荒れを見て來たわけじやございますまい、第一あの時代と今日とは船が違ひまさあ、船が……」

と云つた時に、其の船が前後左右からミシミシミシと揉み立てられる音に、一同が鳴を靜めてしまひました。

暫らくは、うんがの聲を揚げる者がありませんでした。外はどの位の荒れかわからないが、今まで木の葉のやうに弄ばれてゐた船がグル〳〵と廻りはじめたかと思うと、急に一處に停滯して何物かに揉み碎かれてゐるらしい物音です。

そこで、船が……と云つたものから眞先に口を噤んでしまつて眞暗な中に、各々面の色を變へたが、幸ひに、船は揉みほごされて凝を取られたやうに眞一文字に走り出したらしい。何處へ走り出すのか知らないが、兎も角、揉み碎かれるよりは走り出したのがいくらかの氣休めにはなつたと見えて、

「船は違ひませうけれど、風は昔も今も變りませんからね」

今度は誰も返事をする者がありません。船は、やはりミシ〳〵と音を立てながら矢のやうに進んで行くらしい。

「いよ〳〵と云ふ時は、何たつてじやありませんか、皆んな、それ〴〵持つてゐる一番大切なものを一品づゝ海の中へ投げ込むと、それで風が靜まるといふじやありませんか、身につけた大切なものをわたつみの神樣に捧げると、それで難船がのがれるといふじやありませんか、もし、さういふ事になつたら、私共あ、私共あ……」

その時に、甲板の上、こゝから云へば天井の一角から不意に丸燈が一つ、この船室へ釣り下げられて來ました。それは鐵の輪を以て幾重にもからけて、何方へ轉んでも壞れもしなければ油もこぼれないやうに工夫してある、丸燈が天井の一角から下がつて來ると、其の光を眞下に浴びてゐたお角の姿が匿々と浮き出して、廿餘人の他の乘合は影法師のやうに眞黑くうつゞて見えます。

「風が變つた、丑寅が戌亥に變つたぞ、氣を注けろや――い」

船の上では船員が擧けて此の恐ろしい突發的の暴風雨と戰つてゐます。斯う云つて悲痛な叫びを立てた船頭の聲は山のやうな高波の下から聞えました。

水主も梶取もその高波の下を潜つて、こけつ轉びつ、船の上をかけめぐつてゐたのが、此の時分には、もう疲れきつて、帆綱に取りついたり、荷の蔭に突伏したりして、働く氣力が無くなつてゐました。事實、もう、積荷を保護しようの、船の方向を誤るまいのといふ時は過ぎて、飛ぶたけのものは飛はしてしまひ、投げ込むほどのものは投げ込んでしまひ、船の甲板の上は、ほとんど洗ふが如くでありました。

たゞ船の上に元のまゝで殘つてゐるのは帆柱一本たけのやうなものです。けれども、斯うなつて見ると、その帆柱一本が邪魔物です。その帆柱一本あるが爲に、餘計な風を受けて、船全體が帆柱に引ずり廻されてゐるやうな形になります。たゞ引ずり廻されるのみならず、それが爲に、ほとんど船が覆へるか、または引裂けるやうに、帆柱のみが、いきり立つて動いてゐるとしか思はれません。順風の時は帆を張つて船の進路を支配する大黑柱が、斯うなつて見ると、船その物を呪ひつくさねは已むまじきものゝやうに狂ひ出してゐます。

船の底では、多寡が內海だと云つて、氣休めのやうな事を云つてゐたが、上へ出て見れは內も外もあつたものではありません。

風はもとより內と外とを壞して吹くべき筈はないが、海も亦內と外とを區別して怒つてゐるものとも覺えません。一體、何處を如何吹き廻され、或は吹つけられてゐるのだか、たゞ眞暗な天空と、叫え立てる風と、逆搏く波の間に翻弄されてゐるのだから、海に慣れた船人、殊に東西南北どちらへ外れても、大方見當のつくべき海路でありながら、さつはり其の見當がつかないのであります。やゝあつて、

「やい、外へ出ろ、外へ出ろ、只事じやねえぞ、お姫樣の祟りだ、さあ、帆柱を叩き切るんだ、帆柱を、斧を持つて來い、斧を二三挺持つて來い、それから、苫と筵を幾らでも浚つて來い、さうして、左つ手の垣根から船縁をすつかり結ひちまへ、いよ〳〵の最後だ帆柱を切つちまうんだ」

帆柱の下で躍り上がつて、咽喉笛の裂けるほどに再び叫び立てたのは船頭です。一しきり烈しく吹かけた風が、帆柱を弓のやうに、たわゝに曲けて、船は覆へらんばかり左へ傾斜しながら、巴のやうに廻りはじめました。此の聲に應じて、

「おーい、おーい」

むく〳〵と、波風を潛つて、一人、二人、三人　四人、船頭の許まで腹這ながら走せつけて來ます。走せつけて來た彼等は船頭の耳へ口をつけ、船頭は手を振り、聲を嗄らして何事をか差圖をします。やがて、これ等の船人はまた右往左往に船の上で走りました。或者は筵を浚つて左手の垣へ當てゝ結へ、或者は筵をかゝへて船縁へ縋りつく。

この間に帆柱から、やゝ離れて上手へ廻つた脊の高いのが、諸手に斧を振り上げて、帆柱の眼通り一尺のあたり下へ、かつしと打ち込む。

風下に其れを受けた、脊の低いのが、それより五寸ほどの下を目がけて、かつしと打込む。兩々この暴風雨の中で斧を鳴らして、かつし〳〵と帆柱へ打ち込みます。暴風雨は何時か二人の腰を吹き倒して、二人は幾度か轉け、轉けてはまた起き直り、かつし〳〵と打ち込んではまた轉びます。

やがて脊の高いのが、斧を投げ捨てたと見ると、腰に差してゐた脇差を拔いて、發矢々々と帆綱に向つて打ち下ろすと、斧で打ち込んで置いた帆柱の切れ目が、メリ〳〵と音を立てゝ柱は風下へ、さきに苫や筵を卷きつけて置いた船縁へ向つて、やゝ斜に撞と落ちかゝりました。

斯うして船の底へ下りて來た船頭の姿を見ると、眞黑くなつて呻いてゐた廿餘人の乘合は一度に面を上げて、

「おい、船頭さん、一體どうなるんだね、此處はどこいらで、船は何方へ走つてるんだね、大丈夫かね、間違ひはないだらうね」

「皆さん、お氣の毒だがね……」

「エ」

「今日の颶風は只事じやあございませんぜ、永年海で苦勞した俺共にも見當がつかなかつた位だから、こりや海の神樣の祟りに違へねえ」

「エ」

「もう船の上で、やるだけの事はやつちまひましたよ、積荷もすつかり海へ投げ込んでしまつた、わつし共も艣を切つてしまつた。帆柱も叩き切つちまつた、さうして船はもう洲の崎沖を乘落してしまつた。」

「何だつて、洲の崎沖を乘落したんだつて、それじやあ、もう外へ出たんだな」

「うむ、もう些さで外へ出ようとして巴を捲いてゐるんだ」

「南無阿彌陀佛」

中から一人跳り上つて念佛を唱へるものがありました。それを音頭として、つゞいて題目を聲高らかに唱へ出すものがあります。四邊かまはず喚き聲を上げて泣き立てる者もありました。

「まあ〳〵、皆さん、まだ脈はあるんだからお靜かになせえまし、氣を鎭めてお居でなさいよ……こゝで一つ一世一代の御相談が始まるんだ、さいふのはね、今いふ通り、どうも此りやあ人間業じやあござんせんよ、たしかに海の神樣に見込まれたものがあるんだ、それで、海の神樣が、いたづらをなさるんだから、海の神樣をお鎭め申さなけりや、この難を逃れつこなし、海の神樣といふのは、龍神樣の事よ、こりやあ今に始まつた事じやねえのさ、大昔の日本武尊樣でさへ、この神樣につかまつちやあ隨分惱まされたもんだ、だから、その海の神樣に何か差上げなけりやアこの御難は逃れつこなし、どうです、皆さん、氣を揃へて一つその相談に乘つてお呉んなさいまし」

暴風雨に打たれたまゝの赤裸で、腰帶に一挺の斧を挿んで仁王の立ちすくんだやうな船頭が、思ひきつた顏色をして斯う云つて相談をかけると、

「いゝとも、いゝとも、今も其の事で噂をしてゐた處だ、難船の時には、自分の身についてゐる一番大事なものを海へ投げ込むと、龍神樣のお腹立が癒るといふ事だから、私しあもう此の胴卷ぐるみ投げ込むことに、斯うしてちやんと丁見をきめてるんですよ」

「私しやまた此處に持つてゐる此の金ののべの煙管が、親ゆづりで肌身放さずの品でござんすが

これをわたつみの神樣に奉納するつもりで、斯うして出して置きますよ」

「わしやまた……」

「まあ待つて下さい、皆さん、そんな物を纏めて投げ込んで見たつて、此の荒れは靜まらねえよ」

「それじや如何すればいゝんだ」

「此の船で一番大切なものを、たつた一つ投げ込めば其れでいゝでさあ」

「エヽ、この船で一番大切な、たつた一つの物といふのは其りや何だ」

「それがなあ……お氣の毒だがなあ……」

と云つて船頭は丸燈をかざして、凄い眼をしてお角の面を凝と睨みながら、

「人身御供といふことですよ」

「エヽ、人身御供！」

「昔、日本武尊樣が、この海で難儀をなすつた時の話だ、櫛姫樣といふ女の方が、お身代りに立つて海へ飛び込んたことは先刻御承知でござんせう、それが爲に尊樣をはじめ乘合の家來達まで皆んな命が助かつたのだ、つまり橘姫樣のお命一つで船の中の者が殘らず救はれたんだ、だから……」

船頭がお角の面を見つめたまゝで斯う云ひかけた時に、お角は颱風のやうに身を起して、

「だから、如何しようと云ふの、だから、わたしを如何かしようと云ふの」

お角の船頭を睨んだ眼も亦物すごいものでありました。それでも船頭はやつぱりお角を睨み返しながら、

「いや、お前さんを如何しようといふ譯じやあござい
ません、お前さんの量見に聞いて見てえんでございます」

「エ、わたしの量見ですつて、わたしの量見を聞いて如何するの」

「この船の中で、女のお客はお前さんたけなんですね、今まで女一人のお客と云ふのは無かつた此の船に、今日に限つてお前さんが乘り込むと此の通りの暴風だ」

「それが如何したの、それじやあ、わたしが一人で此の暴風を起しでもしたやうに聞えるじやないか」

「お前さんが暴風を越したんじや無いけれど、お前さんがゐる爲に暴風が起つた樣なものだ」

「何ですと、わたしが暴風を起したんじや無いけれど、わたしがゐる爲に暴風が起つたやうなものですつて、同じ事じやないか、それじやあ、やつぱり、わたし一人が此の暴風を起したといふことになるんじやないか、馬鹿々々しいにも程があつたものさ」

外の暴風雨よりも船頭の言分が、お角に取つては決して穩かに聞えませんでしたから、躍起となつて抗辯しました。

「船頭さん、お前、何たかヲカしな事を言ひ出したね」

お角に附添つて來た庄さんといふ若い男も、堪り兼ねて喧嘩腰になりました。

「いゝや、ヲカしい事じやねえのです、今日に限つて此んな事になるのは、こりやあ必定、船の中に見込まれた人があるのだ、その見込まれたといふのは外じや無え、船ん中で、たつた一人の女のお客樣を海の神樣が嫉んでいたづらをなさるに違えねえのだから、お氣の毒だがその人に出て行つて海の神樣にお詫がして貰ひてへのだ、何も、こりや俺が無慈悲で云ふ譯じやありませんよ、船の乘合皆んなの衆の爲ですよ、若し、お前さんが皆んなの衆の命を助けてやりてえといふ思召があるんなら、あの大昔のあの橘姫の命樣の思召のやうに……」

と船頭が此處まで云ひ出すと、お角は怒へられません。

「おつと、待つてお呉れ、待つてお呉れ、人身御供といふのは其の事かね、つまり、わたしに其の大昔の橘姫の命樣とやらの眞似をしろと仰有るんだね」

「それより外には、この難場を逃れる道が無えのだから、お前さんにはお氣の毒だが、乘合の衆の爲だ、ねえ、皆さん、この船頭の云ふ事が不條理かエ」

「……」

「こゝで人身御供が上がらなけりやあ、見すゝ〳〵卅何人の乘合が殘らず鰐の餌食になつてしまふのだ、それで宜うござんすかエ」

船頭は斯う云つて乘合の者の頭の上をずらりと見渡したけれど、誰あつて此れに返答する間もな

く、お角は猛り立ちました。

「巫山戯ちや可けないよ、やい巫山戯やがるない、こんな暴風が起つたのは時の災難だよ、何もわたしが船に乗つたから、それで暴風が起つたんじやないや、船に女が一人乗り合せたのが如何したんだい、はじめの中は船は女の物だの、正座を張れのと、さん〳〵人を煽てゝ置いて、この暴風雨になると、皆んなわたしにかづけて、人身御供に海へ沈んで呉れとはよく出來た、そりや、昔の橘姫といふお方と、わたし達とはお人柄が違はあ、第一、この中に日本武尊樣ほどのお方がゐらつしやるならお目にかゝらうじやないか、皆んな自分達の命が助かりたいから、それで、わたし一人を人身御供に上げようと云うんだらう、蟲のいゝ話さ、馬鹿にしてやがら、雑魚の餌食にならうとも、我利々々亡者の手前達の身代りになつて沈めにかゝるやうな、そんな、お安いお角さんじやないよ、死なば諸共さ、乗合が一人殘らず一緒に行くんで無けりや、冥途の道が淋しくつて堪らないよ」

「おかみさん、もう斯うなりや、ヂタバタしたつて仕方が無え」

船頭は猿臂を伸べてお角の二の腕をムズと掴みます。

「おや、わたしを掴まへて如何しようといふの」

お角は、船頭に掴まつた二の腕を烈しく振りほどいて血相を變へると、

「野郎、おかみさんを如何しようと云うんだ」

附添の若い男が、お角を掩護するつもりで船頭に武者ぶりついたけれど、腰が定まらないのに船頭の一突で、無殘に突飛ばされて起き上る事が出來ません。

船頭に掴まつた二の腕を烈しく振りほどいたお角は、其のまゝ荷物と人の頭とを跳り越えて外へ飛び出しました。

この時分、甲板へ飛び出すことの危險は、人身御供になることの危險と同じやうなものであることは判つてゐるけれど、此の女は其れを危ぶんでゐる程の餘裕がなかつたものらしくあります。

若い男を突き飛ばして置いた船頭は、腰に差してゐた斧を無意識に抜き取つて、右の手に引提げたまゝ透かさずお角の後を追蒐けました。

乗合全體は總立ちになる途端に、大搖れに搖れた船が何かに觸れて轟然たる音がすると、そのはずみで殘らず、揺ぶつ倒されてしまひました。

「わーつ、水、水、水が……」

そこで、名狀すべからざる混亂が起つて、殘らずの人が七顚八倒です。七顚八倒しながら彼の上り口の處へ押しかけて、前にお角と船頭とがしたやうに、先を爭うて甲板の上へ走り出さうとして、押し合ひ、へし合ひ、蹴飛され、踏倒され、泣き喚いて狂ひ廻ります。船の外は眞暗な天地に囂々と吼ゆる風と波とはかりです、船は木の葉のやうに弄ばれて、すでに振り飛ばすべきものの限りは振り飛ばしてしまひました。綱を增した碇も引斷られてしまひ、唯一の帆柱でさへも、

目通りのあたりから切り折られてしまつた坊主船は、眞黑な海の中で、跳ね上げられたり、打ち落されたり、右左にいゝやうに揉み立てられ、散々に醜弄されて、其れでも尙ほ殘忍な波濤の間に殘骸を見せつ隱れつしてゐる有樣です。

尋常では腰の定まるべくもない此の場合の甲板の上を、轉びもせずに、吹き荒れる雨風を旨く調子を取つて、ひらり〳〵と物につかまりながら走つて來るのは、昔取つた杵柄ではなく、昔鍛えた輕業の身のこなしでもあらうけれど、此の女の勝氣が一圖に不人情を極めた手前勝手な船頭の手から逃れて、これに反抗を試みようとして、思慮も分別も不覺にさせてしまつたものと見る外はありません。

片手に斧を引提げて、こけつまろびつ、それを後から追ひかける船頭とても、本來が決して左程に、不人情でも手前勝手でもあるわけではなく、たゞ危險が間髪に迫つた途端に、その日頃持つて居る海の迷信が逆上的に働いて、斯うせねば船のすべてが助からぬ、斯うすれば必ず助かるものだと思ひ込ませた其の魔力がさせる業でありませう。

けれども、つゞいて先を爭うて、甲板の上へハミ出した二人の外の乘合は無殘なものでありました。出ると直ぐに大風に吹き飛ばされて、或者は切り殘された帆繩につかまつて助けを呼び、或者は船の垣根の板に必死に取りすがつて、海へ浚はれることをさけ、辛うじて帆柱の方へ這つて行く者も、雨風に息を塞がれて助けを呼ぶの聲さへ立てる事が出來ません。

眞先に、彼の切り殘された帆柱の切株にすがりついたお角は、

「さあ、斯うしてゐれば、わたしや此の船の船玉樣さ、指でもさして御覽、罰が當るよ、乘合が皆んな死んで、わたし一人が助かるんだらう、忌やなこつた、忌やなこつた、人身御供なんぞは御免だよ」

斯う云つて凄じき喫呵を切つたけれども、憐むべし、この時吹き捲くつた大波は、お角の折角の喫呵を半にして船諸共に呑んでしまひました。

五

その翌日の朝は、風の名殘はまだありましたけれど、雨もやみ空も晴れて、昨夜の氣色は何處へやらといふ天氣であります。

洲の崎の、もと砲臺の下の巖の上に立つて、頻りに遠眼鏡で見てゐる人がありました。

「清吉」

「はい」

「お前の眼で一つ此の沖を見直してもらひたい、拙者の眼で見ては、どうも人の姿のやうに見える」

「お前樣の眼で見て人間ならば、わたしの眼で見ても、やつぱり人間でございませうよ」

と云つて清吉と呼はれた若い男が、巖の上に立つてゐた人から遠眼鏡を受取りました。受取つて危なかしい手つきをしながら、眼のふちへ持つて行つて、

「成程、人間でございますね、人間が一人濱の上へ波で打ち上げられてゐるやうですね」

「若し、さうだとすれは此のまゝには捨てゝ置けない」

と云つて、再び清吉の手から遠眼鏡を受取つた巖の人は駒井甚三郎でありました。前に甲府城の勤番支配であつた駒井能登守、後にバッテーラで石川島から乘り出した駒井甚三郎であります。あの時に、吉田寅次郎の二の舞だといつて、横濱沖の外國船へ向けてバッテーラを漕ぎ出させて行つた筈の駒井甚三郎が、斯うして房州の西端、洲の崎の濱に立つてゐることは意外であります。それで傍にゐる清吉と呼はれた男も、あの時バッテーラの艙を押してゐた男であります。二人はあの時、目的通りに外國船へ乘込むことが出來なかつたものと思はれます。外國船へ乘込むことが出來なかつたものとすれは、何時の間に此處へ來て何をしてゐるのだらう。併し、今はそれ等を調べるよりは、遠眼鏡の眼前に横たはる人の形といふものが問題です。昨夜あれほどの暴風雨であつて見れは、海岸に異常のあるのは當り前で、それを檢分するが爲に、甚三郎は遠見の番所から出て、わざわざ遠眼鏡を以て、此の巖の上に立つてゐるものと思はなければならないのです。

「さうですね、行つて見ませうか」

清吉が鈍重な口調で、甚三郎の面をうかゞふと、甚三郎は遠眼鏡を外して片手に提げ、

「行かう」

「お伴を致しませう」

さうして二人は巖の上から驅け下りました。甚三郎は王子の火藥製造所にゐた時以來の散髪と洋裝で、清吉も亦髷を取り拂つて陣羽織のやうな洋服をつけてゐます。二人共、足につけたのは草鞋でも下駄でもなく、珍らしい洋式の柔かい長靴でありました。

二人共斯うして砲臺下を南へ下りて海岸づたひに走り出しました。

「平沙浦は平常でも浪の荒い處ですから、あんな暴風雨の晩に一つ間違うと大變なことになりますね」

「左樣、平沙浦には暗礁が多いから晴天の日でも、あゝして波のうねりがある、漁師達も恐れて近寄らない處だが、若し、あれが人間であるとすれは、洲の崎沖あたりで船が沈み、それが岸へ吹寄せられたものであらう、恐らく土地の漁師などではあるまい」

「左樣でせうかね、若し、房州通ひの船でも沈んだんぢやないでせうか」

「或はさうかも知れん」

遠見の番所の下から洲の崎の鼻をめぐつて走ること五六町、

「あゝ、やつぱり人だ」

「成程、人間ですね」

二人は、その見誤らなかつた事を喜びもし、また悲しみもし、その濱邊に打ち上げられた人間の處を目がけて、飛ぶやうに走つけました。もこより其れは息が絶えて居りました。着物も磯に打ち上げられてゐる人間は女でありました。けれども、身體その者は極めて無事なのでありま亂れて居りました。肌もあらはでありました。それは波に打ち上げられたといふよりは、そつと波が持つて來て此處へ置いて行つたといふ方が宜しいと思はれる位であります。

若し、昨夜の暴風雨が、此の沖を通ふ船を碎いて、その乘合の一人であつた此の女だけを此處へ持つて來たものとすれは、それは特別念入の波でなければなりません。さうでなければ海とは全然違つたところから、何者かが此の女を荷つて來て寢かして行つたものと思はなければならないほど、安らかに置かれてあるのであります。さりとて一見したゞけでも、これはこの邊にザラに置かれてあるやうな女ではありませんでした。

「女ですね、江戸あたりから來た女のやうですね、こゝいらに住んでゐる女じやありませんね」

鈍重な清吉も亦其れと氣が注きました。

「うむ、昨晩、沖を通つた船の客に相違ないが、併し……それにしては無事で有り過ぎる」

駒井甚三郎は、づか〳〵と立ち寄つて、横はつてゐる女の身體をじつとながめました。髪の毛はもうすつかり亂れてゐましたが、右手はずつと投げ出して、それを手枕のやうにして、左の手は大きく開いてゐるから、眞白な胸から乳が、ほとんど露はです。けれども、帶たけは斯うなる前に心して結んで置いたと見えて、その帶一つが着物を引きとめて、女といふものゝ總てを保護してゐるものゝやうです。

駒井甚三郎は腰を屈めて、女の胸のあたりに手を入れました。

「如何でせう、また生き返る見込があるんでございませうか」

清吉は氣を揉んでゐます。

「絶望といふ程じやない、生き返るとすれは不思議たなあ」

駒井甚三郎は、また女の乳の下に手を置いて小首を傾けてゐます。

「不思議ですねえ」

清吉も同じやうに首を傾けると、

「平沙の浦の海は全くいたづら者だ」

駒井甚三郎は何の意味か、斯う云つ微笑しました。

「エ、いたづら者ですか」

清吉は何の意味たか、わからないなりに、怪訝な面をすると、

「うむ、平沙の浦の波はいたづら者とは聞いてゐたが、これはまた一層皮肉であるらしい」

「皮肉ですかね」

清吉には、まだよく呑込めません。

「さうだとも、あの暴風雨の中で、波の中の一組たけが別仕立になつて、こゝまで特に此の女たけを持つて來て、そーつと置いて歸つてしまつた處などは皮肉でなくて何だらう、見給へ、何處を見てもかすり傷一つもないよ、着物も形たけは引かゝつてゐるし、帶も結んだ通りに結んでゐる、水も大して呑んじやゐない」

駒井甚三郎は、女その者を救はうとか、助けなければならんとかいふ考へよりは、斯うまで無事に持つて來て置いて行かれたことの不思議たか、いたづらたか、波に心あつてゞなければ到底爲し難い仕業のやうに思はれることに好奇心を動かされて、ほと〳〵呆れてゐるやうです。

此の時分になつて清吉も漸く智慧が廻つて來たらしく、

「さうですね、ほんとに故意つとしたやうですね」

と云ひました。

「兎も角、早くこれを番所まで連れて行つて手當をしようではないか」

「エ、、わたしが背負つて參ります」

清吉は女の手を取つて引き起し、それを肩にかけました。

六

それから三日目の夕暮の事でした。駒井甚三郎は鳥銃を肩にして、西岬村の方面から、洲の崎の遠見の番所へ歸つて見ると、また燈火が點いて居りません。こんな事には極めて几帳面である清吉が、今時分になつて、燈火をつけてゐないといふことは異例ですから、甚三郎は家の中へ入ると直ちに言葉をかけました。

「清吉、燈火が點いてゐないね」

けれども返事がありません。甚三郎の面には一種の不安が漂ひました。先づ、自分の部屋へ入つて蠟燭を點けました。この部屋は、甲府の城内にゐた時の西洋間や、瀧の川の火藥製造所にゐた時の研究室とは違つて尋常の日本間、八疊と六疊の二間だけであります。たゞ六疊の方の一間が南に向いて、窓を押しさへすれば海をながめる事の出來るやうになつてゐるだけが違ひます。

部屋の中も、昔と違つて、書籍や模型が雜然と散らかつてゐるやうな事はなく、眼にうつるものは床の間に二三挺の鐵砲と、刀架けにある刀脇差と、柱にかゝつてゐる外套の看替と、一方の隔に振片づけられてゐる測量機械のやうなものと、それと向き合つた側の六疊に、机屏掛が、おとなしく主人の歸りを待つてゐるのと、その位のものです。

それでも、今點けた蠟燭は、さすがに駒井式で、それは白くて光の強い西洋蠟燭であります。蠟燭を點けると燭臺ぐるみ手に取り上げた駒井甚三郎は、さつと窓の戸を押し開きました。窓の戸を開くと眼の下は海です。この洲の崎の鼻から見ると、二つの海を見ることが出來ます。さうし

て時さすると、その二つの海が千變萬化するのを見ることも出來ます。二つの海といふのは、内の海と外の洋とであります。内の海とは、今でいふ東京灣の事で、それは、この洲の崎と相對する相州の三浦三崎とが外門を固めて浪を穏かにして船を安くするのそれであります。外の洋といふのは亞米利加までつゞく太平洋の事であります。こゝの遠見の番所は此の二つの海を二頭立の馬のやうに御して、ながめることの出來る絶好地點を擇んで立てられたものと見えます。

甚三郎が蠟燭を片手に眺めてゐるのは、その外の方の海でありました。内の海は穏かであるが外の海は荒い。殊に外房にかゝる州の崎あたりの浪は、單に荒いのみならず、また頗る皮肉であります。船を捲き込んで沈めようとしないで、弄はうとする癖があります。來らうとするものを誘き込んで、それを活かさず殺さず、宙に迷はせて樂しむといふ癖もあります、試みに風凪ぎたる日、巖の上に佇んで遠く外洋の方をながむる人は、物凄き一條の潮が渦卷き流れて伊豆の方へ向つて走るのを見ることが出來ませう。その潮は伊豆まで行つて消えるものたさうたが、果して何處まで行つて消えるのやら、漁師はその一條の波を「潮の路」と云つて怖れます。

外の洋で非業の最後を遂げた幾多の亡靈が、この世の人に會ひたさに、遙々の波路をたどつて此處まで來ると、右の「潮の路」が行手を遮つて、こゝより内へは一寸も入れないのたさうです。さりとてまた元の大洋へ歸すこともしないのたさうです。その意地惡い抑留を蒙つた亡靈共は、この洲の崎のほとりに集つて、晝は消えつゝ、夜は燃え出して、港へ歸る船でも見つけやうものならは、恨めしい聲を出して、それを呼び留めるから、海に慣れた船頭漁師も怖毛をふるつて、一齊に艫を急がせて逃げて歸ると云ふ事です。

こんな性質の惡い洲の崎下の外洋を見渡して、やゝ左へ廻ると、そこが平沙の浦になります。

「平沙の浦はいたづら者だ」

と、おどゝひ駒井甚三郎がさう云ひました。

平沙の浦も、その皮肉なことに於ては相讓らないが、それは洲の崎の海ほどに荒いことはなく、却つて一種の茶氣を帶びてゐることが愛嬌といへば愛嬌です。

平沙の浦がするいたづらのうち第一は、舟を岸へ持つて來ることです。他の海では、船を捲き込んだり、誘き寄せたり、突放したり押出したりして興がるのに、此の平沙の海は、ずん〳〵と舟を岸へ持つて來てしまひます。岸へ持つて來て巖に打着けるやうな手荒い振舞をせずに、砂の上へ、そつと置いて行つてしまひます。

このお手軟らかないたづらは、幸に船と人命を痛めることはありませんが、船と人をてこずらせる事に於ては、寧そ一思ひに打壞してしまうものより遙に以上であります。

平沙の浦の海へ入つて見ると、下には恐ろしい暗礁が幾つもあつて海面は晴天の日にも、大きなうねりがのだ打ち廻つてゐる。漁師達はそのうねりを「お見舞」と稱へて、怖れてゐます。いゝ天氣だと思つて、安心して舟を遊ばせてゐると、いつの間にか、此のお見舞が、もく〳〵と舟を

打ち上げて來ます。その時はもう遲い、舟は大きなうねりに乘せられて、岸へ岸へと運はれてしまふ。帆はダラリと垂れてしまつて、舵はどう操(あやつ)ても利かない。さうしてゐるうちに舟と人とは砂の上へ持つて來て、そつと置いて行かれてしまひます。

そのいたづらな平沙の浦の海をながめてゐた駒井甚三郎は、ふいと氣が注いて、

「さうた〳〵、あの婦人は如何(どう)したらう、今日はまだ見舞もしなかつたが、清吉がゐないとすれば、誰も看病の仕手は無いならう、燈火もついてはゐないやうだし」

と吃(つぶや)いて窓を締め蠟燭を手に持つたまゝで、壁にかけてあつた提灯を取り下ろしてその蠟燭を入れ、部屋を出て椽側から下駄を穿いて番小屋の方へ歩いて行きました。小屋の戸を難なく開けて見ると、中は眞暗で、また戸も締めてないから、障子だけが薄ら明るく見えます。

「清吉は居らんな」

甚三郎は駄目を押しながら、その提灯を持つて座敷へ上がると其處は六疊の一間です。その六疊一間の燈火もない眞暗な片隅に、一人の病人が寢てゐるのでした。

その病人の枕許へ提灯を突きつけた駒井甚三郎は、

「眠つてお居でかな」

低い聲で呼んで見ました。

「はい」

微(かすか)に結んでゐた夢を破られて、向き直つたのは女です。彼のいたづらな平沙の浦の磯から拾つて來た女であります。

「氣分は宜しいか」

甚三郎は提灯を下へ置いて、蠟燭を丁寧に抜き取つて、それを手近な燭臺の上に立てながら、女の容體をうかがうと、

「えゝ、もう宜しうございます、もう大丈夫でございます」

はつきりした返事をして、女は駒井甚三郎の姿を見上げました。

「成程、その調子なら、もう心配はない」

甚三郎も亦、女の聲と血色とを蠟燭の光で見比べるやうに、燭臺をなほ手近く引き出して來ると、

「もし貴方樣は……」

急に昂奮した女の言葉で驚かされました。

「えゝ、何」

甚三郎が、吃と女の面(おもて)を見直すと、

「まあ勿體ない、あなた樣は、甲府の御勤番支配の殿樣ではゐらつしやいませんか」

女は床の上から起き直らうとしますのを、

「まあ〳〵靜かに、甲府の勤番の支配とやらの其(それ)が如何(どう)したの」

甚三郎は女の昂奮を和めようとします。

駒井甚三郎は、此處で此の女から己の前身を聞かされようとは思ひませんでした。女を和めながら、若しやとその面を熟視しましたけれども、どうも心當りのある女とは受取ることが出來ません。

「わたくしは、あの時から殿様のお姿を決して忘れは致しません」

女は何かに感激してゐるらしい聲で斯う云ひましたから、甚三郎は

「あの時とは」

「それはあの、甲州へ參ります小佛峠の下の駒木野のお關所で……」

「はゝあ成程」

こゝに於て駒井甚三郎はさる事もありけりと思ひ當りました。さう〳〵、初めて甲州入の時、一人の女が血眼になつて手形なしに關所を抜けようとして關所役人に食ひ留められた時、駒井能登守の情ある計らひで、わざと、目的地の方の木戸へ追出させた事がある、それだ、その女だなと思ひましたから、

「拙者はトンとお見忘れをしてゐた、そなたは、あれから無事に、尋ねる人を探し當てましたか」

「はい、お蔭様で……可なり長い間、甲州に居りました、その間もよそながら殿様のお姿をお見かけ申しました、一度、お訪ね申上げて、あの時のお禮を申上げたいと思はないではありません

でしたが、何を云ふにもこの通りの賤しい女、恐れ多い氣が先に立つばかりで、つい〳〵御無沙汰を致してしまひました」

「それを承はつて見ると、緣といふものは不思議なものじや、拙者も、今は、こんな風に髮つてゐるが、そなたはまた如何して、あのやうな目に遭はれた」

「それをお話し申上げると長いのでございますが、この房州の芳濱といふ處まで、人を雇ひに參つたのでございます、その途中、舟が暴風に遭ひまして、わたしが、一番ヒドい目に遭はされる處でしたが、そのヒドい目に遭はされようとしたわたくしだけが助かつて、斯うして殿様のお世話になつてゐるのかと思ふと、ほんとに何かのお引合せのやうに思はれてなりません」

「併し、よく助かつたものじや、拙者も自分ながら不思議に堪へられない」

「今朝になりまして、清吉さんから、わたくしをお助け下された委細のお話をお聞きしまして、わたしは、ほんたうに神様に守られてゐるんじやないかと、勿體なくて、涙がこぼれてしまひました」

「處で、その清吉が見えないが、……何とかいうて出て行きましたか」

「いゝえ、お正午少し前まで此處にお見えになりましたが、それから、わたくしは今まで眠つて居りました故、何も存じませぬ」

「はて」

哲三郎は、いよ〳〵清吉の事が不安になつて來ました。

さうして、次の一本の蠟燭に火をうつして、それをまた提灯に入れ

「淋しからうが、そなたは一人で、暫らく此處に留守してゐる氣で待つてゐて呉れるやうに、搗者はこれから清吉を捜して參る」

「まあ、ほんとにあのお方は何方へお出でになつたのでせう……いえ、もうわたしも起きられます、何卒、お心置きなく、どんな處に居りましても、淋しいなんぞと決して思や致しません、歩けさへ致せは、わたしもお伴を致すのですけれど」

「ちよつと、その邊の容子を見て、事によると碇場まで行つて來る、その間に、若し清吉が歸つたならは、そのやうに申して呉れるやう」

「畏まりました」

哲三郎は病人のお角にあとを頼んで、提灯をつけて外へ立ち出でました。

駒井哲三郎が出て行つたあとのお角には夢のやうに思はれてなりません。

甲州城の勤番支配として隆々たる威勢で乗り込んた駒井能登守その人を、こんな邊鄙な處で、斯うしてお目にかゝらうといふことは夢に夢見る樣なものです。

あの凛々しい、水の垂るやうな若い殿樣ぶりが、今は頭の髮から着物に至るまで、丸で打つて變つた異人のやうな姿になり、その上に昔は假りにも一國一城を預かるほどの格式であつたが、今は、見る處、あの清吉と云ふ男を、たつた一人召使つてゐるだけであるらしい。その一人の男の姿が見えなくなると、御自分が提灯を提げて探しに出て行かねはならないやうな、今の御有樣は思ひやると、おいたしい樣な心持に堪へられない。

此のお住居とても、決して三千石の殿樣の御別莊とは受取れない、ほんの假小屋のやうなものと しかお見受け申すことは出來ない、僅かの間に、如何して斯うも落魄れなさつたのだらう。お角は、その事を考へると、ふいに頭に浮んで來たのは、同じく甲州城内に重き役目をつとめてゐた神尾主膳の事であります。

駒井能登守樣が、甲州城をお引上げになると、間もなく神尾の殿樣も江戸へお引取りになつた。

神尾へは其の前後に亘つてお角は始終出入をしてゐる。それで醉つた時などに甲州話が出ると、神尾主膳は、きつと駒井能登守の惡口をする。その惡口が、如何にも意地惡く、ざまを見ろと云はぬばかりなのでお角は、それを聞くと、何となくイヤになるのでした。

神尾主膳に就ては、お角とても決して善良な人とは信じてゐないけれど、あれで中々話せは話のわかる人たと思つてゐる。あの人を箸にも棒にもかゝらぬやうに云ふのは、夫は、あの人を嚙み締めてゐないからで、その惡い處たけを避けて、良い所を附き合へは、隨分力になる人であると思つてゐる。けれども、その神尾が、一たび駒井能登守の噂になると、醉つてゐるとは云ひながら、口を極めて惡く云ふことが、お角には不服でもあり不快でもあるのであります。

何となれば、駒木野の闕所以來、お角の眼にうつゝてゐる駒井能登守は、男振といひ、その情ある仕方といひ、若くして人に長たるの器量といひ、芝居の中で見る人のやうに見えるのであります。でこと云つて一點でも難を入れる處のない殿樣ぶりに見えるのであります。その學問や見識の事は、お角は丸きり見當がつかないけれども、あんな男らしい男ぶりの殿御を、前にも後にも見た事はないとまで思つてゐるのでありました。

それを神尾主膳が、頭ごなしにするから其の時は不服で、つい抗辯をして見る氣になると、神尾は忌味な笑ひ方をしながら、

「お前も存外人形食ひだ、あんなのが、それほどお氣に召すやうでは甘いものだ」

なんぞと云はれると、お角もムキになつて、

「人形食ひ結構、あんな方に好かれたら、ほんとにわたしは三年連れ添う御亭主を打棄つても行きますわ、けれども、お氣の毒樣、あちら樣で、わたしなんぞは眼中に無いのですからね」

といふやうなことを云つたこともありました。

それは冗談にしても神尾と駒井との間に、何かの蟠りのある事は疾うに見て取らないわけはありません。その後、神尾へは相變らず親しく出入してゐるに拘らず、能登守の方は、ほとんど消息も打ち絶えて、滅多に思ひ出すことさへ無かつたのが、今日、この處で偶然、こんなにお世話になることは、やつぱり何かのお引合せと見ないわけには行かないのであります。

お角は、それを思ふと、何だか嬉しいやうな心持になつて、清吉の見えなくなつた事よりは、早く甚三郎が歸つて來て呉れることのみが待たれるのであります。このまゝでお歸りを迎へては恐れ多いといふやうな心から、床を起き直つて亂れた髪などを撫で上げました。二時間ほどして駒井甚三郎は返つて來ましたから、お角は、

「お判りになりましたか」

「判らん」

甚三郎は安からぬ色を深くしてゐました。

「まあ、如何なすつたのでせう」

「そなたを得たことも不思議だが、清吉を失つたことも不思議だ」

甚三郎が斯う云つた言葉のうちには、多少の絶望が含まれてゐるやうです。

「海の方へでも行つたのでせうか」

「その道、海へ行つたのであらうけれど……」

「お怪我が無ければ宜うございますね、この邊の海は荒いさうですから」

「今宵は、もう締めて明朝、早く探しに行かう、それから、夜中何ぞ急用でも起つた時は其の柱の下にある、小さなボタンを三ツほかり押して見るがよい、それが拙者の枕許まで響いて來る、拙者の方でも、何か用事の起つた時は、同じやうな仕掛で、この丸いものが鳴り出す樣にしてあ

るから」

これはお互の部屋に通ずる電氣仕掛のベルでありました。駒井自身の工夫と設計にかゝるもので あることは申すまでもありますまい。これを押せば彼方のお居間の鈴が鳴るといふことが、お角 には何だか魔術のやうに思はれます。けれども、茜三郎はそれだけの注意を與へたきりで、この 小屋とは棟を別にしてゐる番所の内の己の居間へ歸つて行きました。

若し明朝になつても、明日になつても清吉の行方が、わからなかつたら如何でせう。また若しお 角の身體が本當に回復したのなら宜いけれど、これが一時の元氣であつて、明日からまたぶり返 して枕が上らないやうになつたら如何でせう。

一旦、捨てられた州の崎の遠見の番所は、まるで孤島の中にあるやうなものです。前方は海で陸 續きは近寄る人もありません。

駒井茜三郎と、清吉とは、特に此處を擇んで、たつた二人きりで無人島同樣の生活を好んで此處 に送つてゐたものと見えます。それがその共同生活の唯一人を失つたとすれば、あとに殘るのは 駒井茜三郎一人です。更にまた一人を加へた處で、その一人が枕も上らぬ病人であるなれば、そ の看病人も駒井茜三郎でなければなりません。

三千石の殿樣に自分の看病をさせる事が女冥利に盡きると思したれば、お角は、どうしても明日 から起きて働かねばならないのです。

その翌日、早朝から駒井茜三郎は、またも此の番所を立ち出でました。けれどもお正午少し前に 歸つて來た時には、出て行つた時と同じことに、たつた一人でした。遂に其の尋ぬる人を探し當 てることが出來ないで悄然として、番所の門を潜りました。併し、それと打つて變つたやうに元 氣になつたのはお角です。茜三郎が歸つて來た時には、もう起き上つて、甲斐々々しく働いてゐ ました。

多分、海へ張つて置いた網を引出しに行つて、浪に捲き込まれて行方不明になつたものだらうと 茜三郎は推察して、それをお角に話し一方に浪に打ち上げられた人を扱ひ、一方に浪に捲かれて 人を失ふのは、偶然とは云ひながら、此の邊の海は魔物のやうであるといふことを、つく〴〵と 歎息しました。

お角は、それを聞いて氣の毒がつて泣きました。

その日から、こゝにまた變つた二人の生活が初まりました。二人といふ其の一人の主は變らぬ駒 井茜三郎ですけれども、それを助けるは男でなくて女です。

「といふても、そなたは江戸へ歸らねばならぬ人」

茜三郎に云はれた時、

「いゝえ、もう歸らなくつても宜しうございますよ」

お角は、きつぱりと斯う云ひました。ナゼこんなに、きつぱりと云ひ得るだらうかといふことが

不思議でした。何かの當りがあれはこそ、あゝして房州へ出て來たのだから、その當りは途中の災難で外れたにしても、この女が江戸へ歸らなくて宜いといふ理由は無かりさうです。江戸でなければ此の女の仕事は有りさうにもなし、また兎にも角にも、がんりきの百と云つたやうな男を江戸には殘して來てある筈です。

けれども、駒井甚三郎は、それを宜いとも悪いとも云ひませんでした。

お角の料理して呉れた晝飯を食べてから、また海岸へ出かけて、何處で何をしてゐたのか夕方になつて歸つて來ました。

さうして番小屋の爐の傍で、お角の給仕で夕飯を食べながら話をしました。清吉の事は、もう諦めてしまつてゐるやうです。その話のうちに甲州話がありました。けれども、その甲州話も政治向の事や勤番諸士の噂などは、おくびにも出ないで、甲州では魚を食べられないとか、富士の山がよく見えるとか、甲斐絹が安く買へるとか、そんな他愛のない事はかりでしたからお角は、この殿樣が、どうして彼の立派な御身分から今のやうに、お成り遊はしたかといふことを尋ねて見る隙がありませんでした。

それから、お角の身の上を徐に甚三郎が詮索を始めました。詮索といふと角が立つけれど、實はそれからそれと穏かに尋ねられるので、お角も、つい繕ひ切れなくなつて、女輕業の一座を引連れて甲府の一蓮寺で興行したことから、此の頃再び兩國で旗上げをする爲に、實は此の房州の芳

濱といふ處に珍らしい子供がゐるさうだから其れを買ひに來て、途中此の災難といふことを、すつかりと甚三郎に打ち明けてしまひました。打ち明けねはならぬやうに話しかけられてしまつて、打ち明けてから、つい悔ゆるやうな心持になりましたけれど、甚三郎は一向、そんな事を念頭に置かぬらしく、

「それは面白い仕事であらう、拙者はまた輕業といふものを見た事がない」

「お恥かしうございます」

さすがのお角も何だか赤くなるやうに思ひました。

話が濟むと甚三郎は、さつさと立つて自分の居間へ行つてしまひます。さうして夜おそくまで何かの研究に耽るらしくありましたが、お角は、一人、取り殘されたやうに爐邊に坐つて居りました。

前に云つたやうに、此の洲崎の遠見の番所は離れ島のやうな地位に置かれてあります。前は海で、陸地つゞきは、ほとんど交通を斷たれてゐるのであります。

お角も、可なりおそくまで、爐の傍に、ぼんやりとして燈火を見つめたり、火箸を取つて灰へ文字を書いたりしてゐましたが、

「わたしや、あの殿樣はわからない」

と自棄のやうなことを云つて、帶を解いて男の着物を寢衣にして、蒲團をかぶつて寢てしまひま

した。

けれども、その翌朝は、早く起きて、水を汲んだり御飯を炊いたり掃除をしたり、一はしの女房氣取で氣持のよいほどの働きぶりであります。

朝の食事が終ると、甚三郎はまた海岸へ出て行きました。正午時分に一旦歸つて、居間へ閉籠つたが、しばらくすると、また何處へか出て行きました。さうして夕方になつて戻つて來ました。夕飯の時は、またお角を相手にして輕快に四方山の話を語り出でました。

「さう改まつて給仕には及ばん、そなたも此處で一緒に」

甚三郎は、強ひてお角にすゝめて一緒に夕餐の膳に向ひながら、

「人間の一藝一能は貴い、そなたの仕立てた藝人達の業を、その中一度見せてもらひたいものじや」

眞顏になつて、こんな事を云ひ出しましたから、お角も可笑しくなつて、

「ねえ……殿樣」

思はず膝を進ませると、

「殿樣と云つちや可かん、昔は殿樣の端くれであつたかも知れんが今は船頭だ」

「では何と申上げたら宜しうございませう」

「駒井とでも、甚三郎とでも勝手に」

「駒井樣、駒井の殿樣、何だか定まりが惡うございますね、駒井樣、そんな事を申上げると口が曲りさうですけれど、わたし達には、どうしても、あなた樣の御了見がわかりません」

「判らんことはあるまい、浪人して詮方なく斯うしてゐるまでの事じやわい」

「どうして、あなた樣ほどのお方が、これほどまでに落魄れ遊ばしたのでございませう」

「自分が惡いからだ」

「殿樣……また殿樣と申上げました、あなた樣のやうなお方にお惡いことがお有りなさるのですか」

「無ければ殿樣で居られるのだが、あるから斯樣に落魄れたのだ」

「それは一體、どういふ罪なんでございませう、あんまり不思議で堪まりませんから、それをお聞かせ下さいませ」

「それはな……」

駒井甚三郎はお角の疑ひに何をか嗾られて沈默しましたが、急に打ち解けて、

「隱すほどの事もあるまい、實はな、恥しながら女だ、女で失策つたのだ」

「エ、まあ、女で……」

お角は眼を睜つて呆れました。その眼のうちには幾分かの嫉妬が交つてゐるのを隱すことが出來ません。御身分と云ひ、御器量といひさうしてまた此のお美しい殿樣に思はれた女、思はれたの

みならず此れほどのお方を失敗らせたほどの女、それは何者であらう。憎らしいほどの女である。その女の面を見てやりたい。お角は、さう思つて呆れてゐる時に、自分の寄にしてゐる裏の雨戸にドーンと物の突き當る音がしたので吃驚しました。

七

お角は吃驚しましたけれども、甚三郎は驚きません。

「何でございませう、今の音は」

「左様……」

甚三郎は、なほ暫らく耳を澄ましてから、

「やつはり、いたづら者たらう」

と云ひました。

「え、いたづら者と仰有るのは」

「向ふの松原に、小さな稲荷の社がある、あれの主が三吉狐と云ふて、つい・近頃までも、その三吉狐が此の界隈に出沒して、人に戯れたさうじや、殊に美しい男に化けて出ては若い婦人を惱ますことが好きであつたと申すこと、處が、我々が此處へ來てからは、とんとそれ等の物共が姿を見せぬ、化かしても化かし甲斐がないものと狐にまで見限られたか、それとも、彼等には大の

禁物な飛道具や煙硝の臭で寄りつかぬものか、絶えて今まで惡戯らしい形跡も見えなかつたが、たつた今の物音で成程と感づいたわい」

こんな事を云ひました。お角はさすがに女だから、それを聞いて、襟元が急に寒くなつたやうに思ひ、

「そんなに性の惡いお稲荷様があるんでございますか」

「全く、性質のよくない稲荷じや、殊に其の三吉狐とやらは先祖が男に化けて、村の若い娘と契り、却て娘の情に引かされて、大武岬の鼻といふのから身投げをして心中を遂げてしまつたといふ事からどうも其の子孫の狐が嫉心が強くて、男と女の間に水を注したがると申す事」

「忌ですね」

「だから、此の界隈で、男女寄り合つて話をしてゐると、必ずその三吉狐が邪魔に來る、それは相思の中であらうとも無からうとも、男女がさし向ひで話をすることを、その狐は理由なしに嫉む、さうしてその腹癒せの爲に、何か惡戯をして歸ると事じや、それを思ひ合せて見ると、成程、斯うして、そなたと拙者、罪のない甲州話をしてゐるのも、三吉狐に嫉まるゝには充分の理由がある、怖い事、怖い事」

駒井甚三郎は斯う云つて笑ひました。お角も、それに釣り込まれて笑ひましたけれども、それは自分ながら笑つてゐるのたか、笑ひ事ではないのたか、全く見當がつかなくなりました。

さう云はれて見ると、今夜、この場合のみならず、此の頃中の事がすべて其の三吉狐どやらの悪戯ではあるまいか。三千石の殿様が斯うして落魄れておゐでなさることも夢のやうたし、その殿様と自分が斯うして膝つき合はせて友達氣取でお話をしてゐるのも疑へば際限がないし、美しい男に化けるのが上手たといふ三吉狐が、若しや駒井の殿様に化けて、わたしを引かけてゐるのではなからうか。それにしては、あんまり念が入り過ぎる。そんなにしてまで、わたしを化かさなければならぬ因縁がありやう筈はない……お角はいよ〳〵氣味が悪くなつて來た時に、今度は自分の坐つてゐる椽の下でミシ〳〵と一種異様な物音がしましたから、

「あれ」と云つて甚三郎の傍へ身を寄せました。

それは確かに椽の下を物が這つてゐる音であります。

その時に駒井甚三郎は懐中へ手を入れると、革の袋に納めた六連發の短銃を取り出しました。

お角は駒井甚三郎なる人が、砲術の學問と實際にかけては、世に雙ぶ者のない英才であるといふことを知りません。また、大波の荒れる時にはあれほどに氣象の張つた女でありながら、稲荷様の祟りといふやうな事を、これほどに怖がるのを自分ながら不思議だとも思ひません。

「わたし何たか怖くなりました」

斯う云つて甚三郎の面を流し目に見ると、取り出した短銃を膝の上へ乗せて微笑してゐる其の面が、何とも云はれない男らしさと水の滴るやうな美しさに見えました。

そこで、椽の下がひつそりとしてしまひました。ミシ〳〵と音を立てゝお角の坐つてゐた下あたりに這ひ込んだらしい物の音が、急に靜まり返つて兎の毛のさはる音も聞えなくなりました。

「逃げてしまひましたらうか」

「いや逃げはせん、この下に隠れてゐる」

お角が、おど〳〵してゐるのに、甚三郎は相變らず好奇心を以て見てゐるやうです。

「忌ですね、忌なお稲荷様に見込まれては、ほんとに忌ですね」

お角は、座に堪へられないほど氣味悪がつてゐるのに、

「動けないのだ……」

と云つて、甚三郎は膝の上に乗せた短銃をながめてゐるのであります。

「おや、小さな鐵砲、殿様は、いつの間にこんなものをお持ちになりました」

お角はその時、はじめて甚三郎の膝の上の短銃に氣がついて、さうして其可愛らしい種子が島であることに、驚異の眼を向けました。

「いつでも斯うして……」

甚三郎が、それを手に取り上げて一方に覗ひをつけると、何故かお角はそれを押しとゞめ、

「殿様、お撃ちになつては可けません」

「何故」

「でも、お稲荷様を鐵砲でお撃ちになつては罰が當ります」
「罰」
「えゝ、そんなに、あらたかなお稲荷様を鐵砲でお撃ちになつてはこの上の祟りが思ひやられます」
「馬鹿な事を」
甚三郎はそれを一笑に附して、
「拙者も好んで殺生はしたくはないが、畜生に悪戯されて捨てゝも置けまい」
「いゝえ、どうぞ、わたしに免じて助けて上げて下さいまし、わたしはお稲荷様を信心して居りますから」
「稲荷と狐とは本來別物だ」
「別物でも、おんなじ物でも何でも拘ひませんから、さうして置いて上げて下さいまし、そのお稲荷様が嫉むなら嫉まして上げようじやありませんか、ね、さうして置いてお話を承りませうよ、わたしや化かされるなら化かされても宜うございます」
「きつい信心じや」
駒井甚三郎は苦笑ひして、また短銃を膝の上に置くと、その時椽の下で、うーんと呻る聲が聞えました。

「おや、殿様、人間でございますよ、お稲荷様じやございませんよ」
「不思議だなあ」
最初から心を靜めて觀察するの餘裕を持つてゐた駒井甚三郎が、その物音や氣配を察して、人間と動物と見誤るほどの未熟者ではない筈です。
科學者である此の人は、狐に關する迷信の類は最初から齒牙にかけず、ほんの一座の座興にお角を怖がらせて見たものとしても、人と獸の區別を判斷し損ねたといふことは、己の學問と技倆との自信を傷つくるに甚だ有力なものと云はなければなりません。そこで甚三郎は短銃を片手に、ついと立ち上つて疊の上を荒々しく踏み鳴らしました。
甚三郎が疊の上を踏み鳴らすと丁度、仕掛物でもあるかのやうに、それを幾らも隔つてはゐない處の、圍爐裏の傍の揚げ板が下からむつくりと持ち上がりました。
「御免なさい」
甚三郎もお角も呆氣に取られて其れを見ると、現はれたのは狐でも狸でもなく一箇の人間の子供であります。
「お前は何だ」
餘りの事に甚三郎も拍子抜がして、己れの大人げなき事が恥しい位でした。
「御免なさい、御免なさい」

と云つて子供は揚げ板の中から爐の傍・上つて來ました。
鼠色をした筒袖の袷を着て、兩手を後へ廻し、年は十歳位にしか見えないが、色は白い方で、目鼻立のキリ、とした、口許の締つた、頬の豐な一見して、賢げといふよりは、美少年の部に入るべきほどの縹緻を持つた男の子であります。
「お前さん、如何したの」
最初は怖れてゐたお角も、寧ろ人間並以上の子供であつたものだから落着いて咎め立をする勇氣が出ました。
「助けて下さい」
子供は其處へ跪まつてお角の面を見上げました、その時見れはその眼が白眼勝でちらりとした、やゝ鋭いと云つて宜いほどの光を持つてゐるのを認められます。たゞ、その身體の形を不恰好にして見せるのは、最初から兩手を後ろに廻しつきりにしてゐるからです。
「何處から逃げて來たの」
「清澄山から逃げて來ました」
「清澄山から」
「えゝ、清澄で坊さんに叱られて、縛られました、をはさん、あたいの手を縛つてゐるから解いて下さい」

「縛られてるの、お前さんは」
お角が成程と心得て、そこへ、ちよこなんと跪こまつた子供の背後へ廻つて見ると成程、その小さな兩手を後ろに合せて、麻の細い縄で幾重にもキリ〳〵と縛り上げてありました。
お角は、一生懸命に其の結び目を解いてやらうとして焦つたが容易には解けさうもありません。
「隨分固く結へてあるわね、これじや中々取れやしない」
お角は、もどかしがつて遂に其の縄の結び目へ齒を當てました。
「小柄を貸して上げようか」
甚三郎は見兼ねて好意を與へると、お角は首を振つて、
「いゝえ、結んだものですから解けさうなものですね、解けるものを切つてしまうのは嫌なものですから」
お角は頻りに縄の結び目へ齒を當て、其れを解かうとしましたが、一體どんな結び方をしたものか知らん、ほんとに齒が立ちません、けれども、お角は焦れながらも、いよ〳〵深く食ひついて、面をしかめながら首を左右に振つてゐます。
「をはさん、隨分固く結へてあるでせう、岩入坊が縛つたんですからね、とても駄目でせうよ、口では解けないでせうよ、刄物で切つちまつて下さい」
子供は、やゝませた口ぶりで、お角のする事の効無きかを諷するやうに云ひますから、こんな事

にも意地になつたものと見え、
「今解いて上げるよ、結んだものだから解けなくちやあならないんだから、切つては何だか冥利が盡きるわよ」
お角は頻りに繩に食ひついて放さうともしません。
「岩入坊は縛るのが名人だからね、岩入に縛られちや往生さ」
子供は、こんな事を云ひながらお角のするやうにさせて居りました。
「あ、痛！」
あまり力を入れて、齒を食ひ折つたか、たゞしは唇でも嚙み切つたか、面を引いたお角の口許に、につと血が滲んで居りました。
「解けましたよ」
その時にお角はクル〳〵と繩の一端を持つてほごしてしまひました。
子供の手を自由にしてやつて、お角は元の座に戻り、紙をさがして口のあたりを拭きました。滲み出した血を、すつかり拭き取つて平氣な顏をしてゐるから、大した怪我ではないでせう。
「どうも有難う」
子供は其處でお角と甚三郎の前へ兩手を突いてお辭儀をします。
「清澄から、これまで一人で來たのか」

「エ、、一人で逃げて來ました」
そこで甚三郎は凝と、この子供の顏を見つめました。清澄は安房の國の北の端であつて、洲崎は其の西の涯になります、いくら小さい國だと云つた處で、國と國との兩極端に當るのです、その間を、此の少年が兩手を後ろに縛られたまゝで、こゝまで逃げて來たといふ事が嘘でなければ、兎も角もそこに非凡なものゝ存することを認めないわけには行かなかつたのでせう。けれども甚三郎は、その事は尋ねないで、
「何で、そんなに縛られるやうな事を仕出來したのだ」
「惡戯をしたものですから、それで縛られました」
「惡戯、どんな惡戯を」
「ちよつとした事なんです、ちよつと惡戯をしたんだけれども縛られてしまひました、縛られて、門前の大きな杉の木へつながれてしまひました、それを辨信さんに解いて貰ひました、愚圖々々してゐると、岩入坊にまたヒドい目に遭はされるから早くお逃げつと辨信さんがさう云つたもんだから、後手に結かれたのを解いてもらう暇が無くつて、一生懸命に、人に見つからないやうに恐うして逃げて來ました」
「それは宜くない　ナゼ逃げ出さないで、お師匠さんに謝罪ることをしないのだ」
「駄目、駄目、あたいは、もう、あんな處は早く逃げ出したくつて堪らなかつたのよ、もう歸ら

ないや」
「お前、お寺にゐて坊さんになるのが嫌なのか」
「いゝえ、あたいは清澄のお寺に預けられてゐたけれど、坊さんになるつもりじやなかつたの。お寺の方では、あたいを坊さんにするつもりであつたかも知れないけれど、あたいは坊さんになる氣なんぞは有りやしない」
一通りの白狀ぶりを聞いても、そんなに大した惡戯をする惡少年とも見えません、けれども甚三郎は此の少年を問ひ訊すことに興味を失はないで
「そして、お前、これから何處へ行くつもりなのだ」
「あたいは、これから芳濱へ歸らうと思うんだけれども、芳濱へは歸れないや、だから舟に乘つて何處かへ行つてしまひたいと思つてゐるのよ」
「芳濱にお前の實家があるのか」
「あたいの實家じやない、お孃さんの家があるんですよ」
「お孃さん……主人の娘だな、清澄へ行く前、其處に居候をしてゐたのか」
「あたいは、お孃さんに可愛がられてゐたのよ、お孃さんが、あんまり、あたいを可愛がるもんだから、それで皆んなが、あたいをお孃さんの傍へ寄せないやうにしてしまつたのですね、お孃さん、きつと、あたいに會ひたがるに違ひない」

子供はすゞしい眼をして甚三郎の面を打ち仰ぎました。お孃さんに可愛がられてる、それが何となく甚三郎の心を温かいものにして微笑ませました。
「そのお孃さんといふのは幾つになる」
「今年十八になるでせうね」
と云つて小首を傾ける處を見れば、どう見ても愛くるしい美少年で、決して惡戯をした爲に、これほどまで無慘に縛られ、縛られた上に清澄の山から洲崎の濱まで走つて來るほどの不敵な少年とは思はれません。甚三郎は優しく、
「さうか、近いうち、拙者も舟であちらの方へ出かけるから、その時に、連れて行つてやらう、さうしてお孃さんとやらに會はせてやらう」
「有難う、それでもね、お孃さんにや會へませんよ」
「如何して」
「皆んなが會せないんだもの」
「何故會はせないのだ」
「あたいはお孃さんにだけは可愛がられるけれども、外の者には皆んな憎まれてるから」
「皆なの人が、何故、そんなにお前を憎むのだ」
「何故だふ、あたいには判らないんだ、皆なの人があたいを憎んでお孃樣に會はせないやうに、

清澄の山へ預けちまつたんですからね」
「何かお前が惡いことをしたのだらう」
「いいえ、何も惡いことをしやしません、惡い事といへは、あたいが、あんまりお嬢樣に可愛がられるから其れが惡いんでせうよ、その外にはね……あたいは、蟲を捕ることが好きなんですよ、蟲を捕ることだの、鳥と遊ぶことだの、それから、笛を吹くことだの……」
その時まで默つて聞いてゐたお角が、あわて氣味で口をはさみました。
「ちよつとお待ち、お話の中だが、それではお前さんが、あの芳濱の茂太郎さんというんじやないの」
「えゝ、あたいが其の茂太郎ですよ」
「さう、驚きましたね、わたしは、またお前さんを賴む爲に、斯うしてわざ〳〵房州までやつて來たのですよ」
「をはさん、あたいを賴みに來たの」
少年は、やゝ眼を圓くして、お角の面を見上げましたが、その賴みに來たといふ事情をさのみ立入つて知りたいといふほどでもありません。
「えゝ、お前さんを賴みに來たのよ、それが爲に途中で大難に遭つて、斯うしてお世話になつてゐるの」

「左樣ですか」
「左樣ですかじやない、ほんとに生命がけで江戸から、お前さんを尋ねに來たんじやないか」
お角は撥むけれども少年は、
「江戸から？」
と云つて、前よりは少しく耳を傾けたゞけの事です。それもお角が無暗に大難だとか生命がけだとかいふのに引きつけられたのではなく、江戸からと云つた地名だけに引かゝつたものとしか思はれません。
「左樣よ」
「江戸には、をはさん、山は無いんでせう、だから蛇だつて、そんなにゐやしないでせう、わたしを賴んで行つて如何するの」
「そりやね……」
と云つて、お角が少しはかり口籠りました。少年は、それに頓着せずに、
「今まで、あたいを賴みに來るのは、山方はつかりよ、あたいに鳥を追はせたり、蛇をつかまへさせたり、また蟲を取つて來て天氣を占なはせたりするんだけれど、江戸へ連れて行つて如何するんだらう、それでも、あたい江戸へは行つて見たいよ、お嬢さんとこに、幾枚も江戸の景色の繪があるんだ、それで見て知つてゐるけれどもね、綺麗な處だね、をはさん、本當に連れてつて

呉れるなら、あたい行つてもいゝよ、をばさんとこに居候になつてゐてもいゝよ」

八

「それと云ふのはね、まあ、聞いて下さいまし、此の間の颱風雨の晩の事でした、わたしが毎晩あゝやつて點けてゐる高燈籠の火が消えてしまひました、どんなに風が吹いても雨が降つても消えない筈の火が消えてしまひました、あの火が消えたばつかりに海で船が沈んで多くの人が死にました、誠に申譯のないことでございます」

盲法師の辨信は斯う言つて、其の見えない眼から涙をボロ〳〵と溢して口が利けなくなりました。

「辨信さん、そりや仕方がありませんよ、何もお前さんが消したといふわけじやあるまいし」

「いゝえ、いゝえ、わたしが消したんですよ、決して、あの晩の颱風雨が消したわけじやございません」

「だつて辨信さん、お前がわざ〳〵消しに行つたわけぢやありますまい」

「いゝえ、わたしの業が盡きないから、それで、あの晩に限つて火が消えてしまつたんですね、わたしが、少しでも人樣の眼を明るくして上げようと思つてした事が、却て人樣の命を取るやうになつてしまひました、怖ろしいことでございます」

「けれども、そりや仕方がありませんよ、善い心がけでした事も、惡いめぐり合せになるのは、ですからね、何もあの晩に限つて燈火が消えて、それが爲に助けらるべき船が助けられず、救はるべき人が救はれなかつたと云つて、誰も辨信さんを恨むわけのものじやありません、それでは、あんまり取越苦勞といふものが過ぎますね」

「いゝえ、いゝえ、善い心がけでした事が、惡いめぐり合せになるといふことは決して有るものではございません、それが惡いめぐり合せになるのは德が足りないからでございます、業が盡きないからでございます」

「それや可けませんよ、善いことをすれば善いめぐり合せになると定まつたものぢやなし、却て善い事をして惡いめぐり合せになる例が世間にはザラにあることなんだから辨信さん、そんなに取越苦勞をしないで山へお歸りなさいまし」

「いゝえ、さうぢや無いのです善い人の點けた火は消さうと思つても消えるものぢやございません、御承知でございませうが天竺の阿闍世王が百斛の油を焚いて釋尊を供養致しました時、それを見た貧しい婆さんは二錢だけ油を買つて釋尊に供養を致しました、貧しい婆さんの心は善かつたものでございますから、阿闍世王の供へた百斛の油が燃え盡きてしまつても、貧しい婆さんの二錢の油は決して消えは致しませんでした、消えないのみならずいよ〳〵光を增しました、曉方になつて目蓮尊者が、それを消しにお出でになつて三たび消しましたけれど、消えませんでございました、袈裟を擧げて煽ぐと其の燈明の光が、いよ〳〵明るくなつたと申すことでございます、

それほどの功德も心一つでございますのに、それに、わたしがあゝやつて心願を立てゝ、毎晩毎晩點けに上がる高燈籠が、あの晩に限つて消えてしまつたといふのは因果でございます、業でございます、わたしの德が足りないんでございます、德の足りないものが業の盡きない身を以てお山を汚してゐることは、お山に對しても恐れ多いし……わたし自らの冥利のほども怖ろしうございますから、それで、わたしはお山をお暇乞を致しました、皆樣が、いろ〳〵に仰有つて下さいましたけれども、わたしは自分の罪が怖ろしくて、お山に留まつては居られませんでございます、皆樣お大切に、これでお別れを致します、……これが一生のお別れになるか知れませんでございます」

斯う云つて、盲法師の辨信は泣きながら、草鞋はきで、笠はかぶらないで首にかけ、例の金剛杖をついて清澄の山を下つてしまひました。それは暴風雨があつてから五日目の事で、誰が何と云つても留まらず、山を下つて行く、その後姿が如何にも哀れであります。

九

それと略ぼ時は同じですけれども、處は全然違つた中仙道の碓氷峠の頂上から少しく東へ降つた處の陣場ケ原の上で眞夜中に焚火を圍んでゐる三人の男がありました。

一昨夜の暴風雨で吹倒されたらしい山毛欅の幹へ腰を卸ろしてゐるものは南條力であります。この人は曾て甲府の牢に囚はれてゐて破獄を企てつゝ宇津木兵馬を助け出した奇異なる浪士であります。

その南條力と向き合つて、これは枯草の上に兩脚を投げ出してゐるのは、いつも此の男と影の形に添うやうに離れたことのない五十嵐甲子雄であります。甲府の牢以來、この二人が離れんとして離るゝ能はざる孖の形で終始してゐることは敢て不思議ではありませんがその二人の側に控へて一はしのつもりで同じ焚火を圍んでゐるもう一人が碌でもない者であることは不思議です。碌でもないと云つては當人も納まるまいが、此の慨世憂國の二人の志士を前にしては、甚だ碌でもないざいふより外はない、例のがんりきの百藏であります。

「その屋敷でございますか、そりや此の峠宿から二里ほど奥へ入つた處の美平といふ處が、それなんださうでございます、今は其處には人家はございませんが、そこが、碓氷の貞光の屋敷跡だといつて傳へられてる處でございます」

がんりきの百は一はしの面をして案内ぶりに話しかけると

「成程」

南條力はいゝ氣になつて頷いて其れを聞いてゐる取り合せが奇妙といへば奇妙であります。ナゼならば、南條力は少くとも此のがんりきの百なるものゝ素行を知つてゐなければならない人です。それは甲州街道へ、このがんりきの百が男裝した松女のあとを、つけつ廻しつしてゐた時に、外な

がら守護したり、取つて押へたりしてお松を救ひ出したのは此の人であります。百にしてからが、此の人の怖るべくして、狎るべからざる人であり、兎も角、自分達には齒の立たない種類の人であることを充分こなしてゐなければならないのに、斯うして心安けになつて、一ばしの面をしてゐることが、前後の事情を知つたものには、どうも奇妙に思はれてならない筈です。

處が、このがんりき先生は一向、そんな事には頓着なく、

「さあ、燒けました、もう一つお上がんなさいまし、南條の先生、こいつも、燒けて居ますぜ、五十嵐の先生、もう一つ如何でございます」

と云つて木の枝をうまく渡して焚火に燻べて置いた餅を片手で摘み上げ、

「碓氷峠の名物、碓氷眞光の力餅といふのがこれなんでございます」

得意けに餅を燒いて二人にすゝめ、

「何しろ源頼光の四天王となる位の豪傑ですから、碓氷の眞光といふ人も、こちと等と違つて、子供の時分から親孝行だつたてことでございますよ、親孝行でさうして餅が好きたつたといひますがね、親孝行で餅が好きだから宜うございますよ、間違つて酒が好きであつて御覽じろ、トテも親孝行は勤まりませんや、どうも酒飲みにはあんまり親孝行はありませんね、俺の知つてる野郎に可なりの呑抜があつて、親不孝の方にかけちや隨分退けを取らねえ野郎ですが、或時、食ひ酔つて家へ歸るとつい寢てゐた親爺の藥鑵頭を蹴飛ばしちまひましてね、あこりや勿體ねえ事をしたと云つたもんです、それを親爺が聞いて、まあ伜や、お前も親の頭を蹴つて勿體ないと云つて呉れるやうになつたか、それでわしも安心したと嬉しがつてゐると野郎が云ふ事にや、おや〳〵お爺さんの頭か、俺やまた大事の爛德利かと思つたと、さう吐ずんですから、此んなのは、とても親孝行の方には向きませんよ、酒飲みが皆んな親不孝と限つたわけじやございませんが、餅の方が向きが宜うございます、その碓氷眞光て人は餅が好きで自分で搗いては自分でも食ひ、お袋樣にもすゝめてね、自分はその餅を食ひながら、あの美平の屋敷から信州のお諏訪樣まで日參りをしたと云うんですから足の方も可なり達者でした、私共も足の方にかけちや隨分後れを取らねえつもりたが、こゝから信州の諏訪へ日參りと來ちや怖れ入りますね、そんなわけでこれが此の土地の名物碓氷の眞光の力餅といふことになつてゐるんでございます」

がんりき、時間はどんなものだな」

「がんりき、時間はどんなものだな」

「さうでござんすね、もう彼是いゝ時分でございませう」

三人が同時に頭をめぐらして西の方をながめました、この時分最夜中は過ぎて峠の宿で、たつた今鳴いたのが一番鶏であるらしい。

「一體、横川の關所は何時に開くのじや」

五十嵐が云ひますと、
「やつぱり、明けの六時に開いて、暮の六時に締まるんでございます」
「さうして今は何時だ」
「一番鶏が鳴きました」
がんりきは何か落着かないことがあるらしく、
「間違ひはございませんが、念の爲ですからこれから私が、もう一ぺん峠の宿を輕井澤まで走つて見て參ります」
「御苦勞だな」
斯うして、がんりきの百は得意の早足で、峠の宿の方へ向いて行つてしまひました。そのあとで南條は五十嵐に向ひ
「こんな仕事には誂へ向きに出來てゐる男だ、何か、ちよつとした危ない仕事がやつて見たくて堪らないのだ、小才が利いて男振もマンザラでないから、あれで中々色師でな、女を引かけるに妙を得てゐる處は感心なものだ」
こんな事を云つて笑つてゐると五十嵐は、
「女によつては、あんなのを好くのがあるのか知らん、何處かに口當りの宜い處があるのだらう」
「當人の自慢する處によると、あの片一方の腕を落されたのも、女の遺恨から受けた向ふ創だと

云つてゐる、これと目星をつけた女で物にならぬのは一人も無い、なんぞと云つてゐる處が彼奴の身上だ」
この時分に峠の宿で、まだ鶏が鳴きましたけれども、夜が明けたといふわけではありません。所謂、碓氷峠のお關所といふのは箱根のお關所と違つて、それは山の上にあるのではなく峠の麓にあるのであります。
熊の平で坂本見れば女郎が化粧して客待ちる……といふ其の坂本の宿よりは尙ほ十町も東に當る横川に所謂碓氷峠のお關所があるのであります。
このお關所を預かるものは安中の板倉家で、貧乏板倉と呼ばれた藩中の侍も、此の横川の關所を預かる時は、過分の潤ひがあつたといふことです。それは參勤交代の大名の行列から來る餘澤の潤ひであるとの事です。
けれども、こゝを通る參勤交代の大名のすべてを合せても、その餘澤は一加州侯のそれに及ぶものでは無いとの事であります。

後供は讃引きけり加賀守

といふ百萬石の大名行列は、年に二回は行はれる。その年に二回の加賀樣の行列によつて、一年の活計を支へるほどの實入を得てゐる者が幾人あるか知れないといふ事であります。
それは大抵五月と九月との兩度に行はれ、同勢は約千人もあつたらうといふ事で、金澤の城中か

ら、鐵砲百挺、弓百挺、槍百筋を押立てゝ、こゝまで隷つて來た一行が、鐵砲たけは關所を通す事が許されないから、坂本の宿の陣屋に鐵砲倉を立て、そこに預けて置き、歸る時は、それを持ち出して國へ歸るといふ事になつてゐるのださうです。關所で、やかましいのは、鐵砲ださうして女であることは此處も他と變ることはなく、德川幕府に取つて頭痛の種であつた此の二つの禁物の中の一つは、さうして封じ込められて關所を東へは一寸も動くことを許されないでゐるが、東から來て西へ拔けようとする女は、まさか、倉を立てゝ藏つて置くわけにも行かない代り、可なり嚴しい詮議の下に、辛うじて通過を許されるのであります。それは、たとへ、百萬石の奧方といへども、關所同心の網君の手によつて、一應その乳房をさぐられ、それから髮の毛の中を探された上ではじめて通行の自由を認められる……それが本來の規則であつたさうだけれども、そこにも當然拔け道はあつて、表面たけの繕ひで無事に通行が出來るやうになり、それ等の餘德として關所役人の懶の網ひが增して來るやうになつたとは、さもありさうな事であります。

その加州侯の潤はせぶりが、至つて寬大で豐富であつたから、その行列が宿々のものから喜はれた持て方は非常のものでしたさうです。それで中仙道を離いふとなく加賀樣街道と呼ぶやうになつたのは名實共にさもありぬべき事と思はれます。

これに反して、嫌はれ者は、尾張と薩摩で、これは如何かして三年に一度位、此の關所へかゝる事があるが、金は使はない癖に威張り散らすといふ癖で、關の上下におぞけを振はせたものださうです。それで近頃まであの附近では泣く兒をたまずのにそれ尾張樣が來たといつてオドかしたものださうです。

そんなやうなわけで碓氷峠の關所、實は横川の關所は、毎日、明けの六時から、暮の六時まで人を堰いたり流したりしてゐましたが、これは勿論、その時刻にしては餘りに早過ぎることなのであります。

「さあ、やつて來たぞ」

「來た〳〵」

南條と五十嵐とは、例の陣場ヶ原の焚火から立ち上がつて、ながめたのは關所の方角ではなくてやはり熊野の社の鎭座する峠の宿の方面でありました。

成程、何物かゞやつて來る、耳を傾けると鈴の音が聞えるやうです、蹄の音もするやうです。あちらの方から馬を打たせて來るものがあることは疑ふべくもありません。

間もなく其處へ現はれたのは馬子に曳かれた二頭の馬でありました。

峠を越ゆる馬は一駄に三十六貫以上は附けられないのだから、荷物の重量としては其んなに大したものとは思はれないが、それに附添つてゐる武士が三人あります、さうして馬の脊の上に梅鉢の紋らしいのが見える處によつて見れば、これは、やはり此の街道の神樣である加州家に緣みのある荷馬であることも推し測られます。

それと見た南條力はツカ〳〵と其の馬を目がけて進んで行きました。無論、五十嵐甲子雄もそれに從ひました。

これは馬子も宰領も、すはやと驚かねはならぬ振舞です。この二人だから宜いやうなもの、さうでなければ當に山賊追剝の振舞であります。

「待ち兼ねてゐたわい」

南條力は低い聲で斯う云つて馬の前に立ち塞がると、不思議な事に馬も人も更に竊く風情はなくハタと歩みをとゞめてしまつて、

「まづ、上首尾」

と云つた聲は前なる馬子の口から發せられました。落着いたもので馬子風情の口吻ではありません。

けれど、馬子の口から出たことは間違ひがありません。

その時に、馬に附添つて來た三人の武士は、汝れ狼藉者！と呼ばはつて切つてかゝりでもするかと、思ふと、それも微塵驚がず遽に馬の側から立ち退いて、やゝ遠く三方に別れて立ちました。

この陣場ケ原といふ處は、晝ならば、碓氷峠第一の展望の利く處でありますから、さうして三方にめぐり立てば、何方の方面から來る人の目を防ぐことも出來ます。

處で南條力は、右の一言を發しただけで前にゐた馬子の傍へ立ち寄ると、五十嵐甲子雄は二番目

の馬子に近寄つて

「お役目御苦勞」

と、やはり低い聲で云ひかけると、

「御苦勞々々々」

と第二の馬子も、やはり馬子らしくない口調で一言云つたきり。そこで、馬子は提灯を鞍へかけて、都合四人が、各々己れの衣裳を脱ぎ換へはじめました。

南條と五十嵐とは己れの衣類大小を悉く脱ぎ捨てゝ、馬子は其の簡單な馬子の衣裳を解いてしまうと、この兩者は手早くそれを取換へて一着してしまひました。さうして忽ちの間に南條力は第一の馬の馬子となり五十嵐甲子雄は第二の馬の馬子となり、以前の二人の馬子は、雁首の變つた南條五十嵐になつてしまひました。

この時、三方に離れて、遠見の役をつとめてゐた三人の武士は急に立寄つて來て、また馬の左右に附添ひました。

以前に馬子であつた二人だけはその馬の前にも立たず後にも從はず東へ向いて行く一行を見送つて立つてゐるのであります。さうして馬の足音も全く闇の中に消えてしまつた時分に二人は元の峠の宿の方へ引返してしまつたから、そのあとの陣場ケ原には焚火の燃えさしだけが、物わびしく燻ぶつてゐるだけです。

その翌日、妙義神社の額堂の下で何食はぬ面をして甘酒を飲んでゐるのは、がんりきの百でありました。

椽臺に腰をかけて、風合羽の袖をまくり上げて甘酒を飲みながら、頻りに頭の上の掛額をながめて居りましたが、

「爺さん、こゝに大した額が上がつてるね……」

と甘酒屋の老爺に言葉をかけました。

「へえ〳〵、中々大したものでございます」

老爺は自分のものでも賞められた氣になつて嬉しさうに同じく頭の上の額堂の軒にかゝつた大きな掛額をながめました。

「甲源一刀流祖逸見太四郎義利孫逸見利泰……」

筆太に記された文字をがんりきの百は聲を立てゝ讀むと、

「秩父の逸見先生の御門弟中で御奉納になつたのでございますが、當國では眞庭の樋口先生、隣國では秩父小澤口の逸見先生、こゝらあたりは、劍道の龍虎でございます」

それを聞いて、がんりきの百も何かしら勇み出して、

「知つてるよ、爺さん、わしは一體甲州者なんだがね、その甲源一刀流の秩父の逸見先生といふのは、甲州の逸見冠者十七代の後胤といふ處から甲斐源氏を取つて、それで甲源を名乘つたものなんだ、だから何となく懷しいやうな氣がして斯うして最前からながめてゐるんだ」

「左樣でございますか、お客樣も甲州のお方でございますか、甲州は誠に結構な處ださうでございますね」

「あんまり結構な處でも無えのだが、爺さんよ、斯うして、さつきから此の額面をながめてゐるうちに、どうも氣になつてならねえ事があるんだが……」

「何でございます」

「外でも無えが、初筆から三番目の處に紙が貼つてあるだらう、比留間何とやら櫻井なんとやらいふ人の名前の次にある人の名前は何といふ方だか知らねえが、あゝして頭からべつたり紙を貼つてしまつたのは、ありや一體どうしたわけなんだ」

「あれでございますか、あれはね……」

老爺は心得て何をか說明しようとするのを氣の短かい、がんりきの百は、

「あんまり味の無へやり方をしたもんだね、書き直すんなら書き直すんで、もつと穩やかな仕方が有りさうなもんじやねえか、頭から無茶に白紙を貼りかぶせてしまつたんじや、見た目があんまり良い氣持がしねえ、御當人だつて晴の額面へ持つて行つて、自分の名前だけ貼つぶされたん

じや浮はれねえたらうじやねえか、これたけの御門弟のうちに、そこに氣のつく人は無えのかな
削り直した處で何さかなりさうなもんた、剝り拔いて埋木をして置いたつて知れたもんたらう、
何にしたつてあゝして白紙を貼りかぶせるのは不吉たよ」
躾りに腹を立てゝ、見てゐる額面には成程、初筆から三番目あたりの門弟の人の名の上に無惨に
白紙が貼りつけてあるのであります。老爺は其時、前の言葉をついで、
「あれはお客樣、何でございますよ、誰方も皆んな、あれを御覽になると、さう仰有いますんで
ございますが、皆さん御承知の上でああいふ事になすつたんでございますから仕方がありません
ので」
「エ、皆んな承知の上たつて、承知の上であゝして貼つぶしちやつたのかい」
「えゝ、左樣でございます、あの下に机龍之助相馬宗芳といふお方の名前がちやんと書いてある
んでございます」
「何たつて、机龍之助……」
がんりきの百は面の色を變へました。釜の前に立つてゐた老爺は、わざ〳〵縁臺の方へ歩き出し
て來て、
「劍道の方のお方が、此處へお出でになつてあれを御覽になると、何方も皆んな惜しい〳〵と仰
有らない方はございません、中には涙をこぼすほど惜しがつて、この下を立ち去れないでゐらつ

しやるお方もございます」
「うーん、成程」
がんりきは何に感心したか面の色を變へて唸り出し、改めて其の紙の貼られた額面を穴の明くほ
ど見てます。
「惜しいお方ですけれども、劍が惡劍ださうですから、どうも仕方がございません」
「惡劍といふのはそりや何の事なんたい」
がんりきは投げ出すやうな荒つぽい口調で老爺を驚かせました。
「どういふ譯ですか皆さんがさう仰有います、それが爲に逸見先生の道場から破門を受けて、そ
の見せしめの爲に、あゝしてお名前の上へ、べつたりと紙を貼られておしまひになつてからもう
可なり長いことでございます」
「成程、そりや有りさうな事た」
「けれども亦、其の御門弟衆のうちでも、惜しい〳〵と仰有るお方がございます、他國から此の
お山へ御參詣になつた立派な武藝者のお方で、この額を御覽になり、あゝ、机龍之助は今何處に
ゐるたらう、あの男に會つて見たい……と十人が十人まで、申し合せたやうに、さう仰有つてあ
の額を殘り惜しさうに御覽になるのが不思議でございますから、私が、その仔細を一通りお聞き
申して置きました。

お聞き申して見ると成程と思はれる事がありますんでございますよ」

「ふむ、其りやさうだらう」

「元の起りから其れを申上げると隨分長くなりますんですが……」

それでも老爺は、その長きを厭はずに隨分話し込んで見ようと自分物の椽臺に、がんりきと向き合つて腰を卸さうとした時に、麓の方から賑やかしい笛と太鼓の音が起つたので、その腰を折られました。麓から登つて來るのは、越後國から出た角兵衛獅子の一行であります。その親方がてれんてんつくの太鼓を拍ち、その後ろの若者がヒユー〳〵ヒヤラ〳〵の笛を吹き、それを取り捲いた十歳位になる角兵衛獅子が六人あります。

しちや、かたはち、

小柳でもてこひ

すつてんてれつく庄助さん　なんはん食つても辛くもねえ

此の思ひがけない賑やかな一行の乘込んで折角の話の出鼻を、すつかり折られた老爺は呆氣に取られた面をしてゐる處へ、早くも乘込んだ六人の角兵衛獅子が、

「角兵衛まつたつたあい――」

卍巴と其の前で引繰返ると、てれてんつくと、ヒユー〳〵ヒヤラ〳〵が、一際賑やかな景氣をつけました。

他にお客といふのは無いんだから、この角兵衛獅子の見かけた旦那といふのは、おれの事だらう、そこで、がんりきの百は、どうしても御祝儀を氣張らないわけには行かなくなりました。

「兄貴に負けずにしつかりやんなよ」

と云つて、がんりきは例の左手で懷から財布を引出すと、その中から掴み出した、一握りを鷄の雛に餌を撒くやうな手つきで、バラッと投げ散らしました。

がんりきの百は角兵衛獅子を相手に大盡風を吹かしてゐると、妙義の町の大人も子供も、その騷ぎを聞きつけて出て來ました。この見物の半は最中に、角兵衛獅子の登つて來たのとは反對の方角の側から、同じ處へ登つて來た一行があります。

この一行は角兵衛獅子のやうな鳴物入の一行とは違つて、よく山方に見ゆる強力の類が同勢合せて五人、その五人共に、何れも屈強な壯漢で向ふ鉢卷に太い杖をついて脊中には可なり重味のある荷物を背負つてゐます。

大盡風を吹かしてゐたがんりきの百が、ふと此の五人の同勢の登つて來たのを見ると、

「おい〳〵角兵衛さん、もう其の位でいゝよ、御苦勞々々」

此處へ來た五人の強力の同勢はさあらぬ體に、この額堂下の甘酒屋へ繰込んで來ました。

先に立つた強力の一人を、よく氣をつけて見れば只者ではないやうです。其の筈、この男こそ、碓氷峠の陣場ケ原で一昨夕焚火をして何物をか待つてゐた南條力でありました。すでに此の男が

南條力でありとすれば、その次にゐるのが五十嵐甲子雄であることは申すまでもありますまい。
その他の三人は、あの陣場ヶ原の引次の時に三方に立つて遠見の役をつとめてゐた三人の武士、
夫が都合五人共にいつの間にか申合せた樣に強力姿に身をやつしてゐます。急に、てんてこ舞す
るほど忙しくなつたのは甘酒屋の老爺で、此の五人の馬のやうな新しいお客樣と、それから、た
つた今、一さし舞ひ濟ました小さな角兵衛獅子が改めて此の度のお客樣となつたのと、それにつ
れ添う太鼓の親方と笛の若者とに供給すべく、新しく仕込をするやら茶碗に拭ひをかけるやら、
炭を煽ぎはじめるやら、こゝはお爺さんが車輪になつて八人藝をつとめる幕となりました。
やがて五人の強力は一杯づゝの甘酒に咽喉をうるほすと、卸ろして置いた、各々の荷物を取つて
肩にかけ、南條力が目くはせをするとがんりきの百が心得たもので、
「爺さん、また歸りに寄るよ」
と云つて幾かの鳥目を其處へ投げ出して立ちトります。
額堂を出たがんりきを先登に南條等の一行は白雲山妙義の山路へ分け入つたが下仁田街道の方へ
岐れるあたりから此の一行は急速力で進みはじめました。

十一

がんりきを初め南條の一行が、山へ向けて此處を去つてしまひ、角兵衛獅子の一座も程なく町の

方へ引返してしまひ、それから小一時ほど經つて、同じ額堂下の甘酒屋へ同じやうな風合羽を着
た道中師らしい二人の男が、ついと入つて來て二人向き合つて椽臺に腰をかけて、
「どつこいしよ」
杖について來た金剛杖でもない手頃の棒をわきに置いて脚絆のまゝ右の足を曲げて左の方へ組み
上げたのは、町人風はしてゐるけれども、決して町人ではありません。
それと向き合つた一方のは、前のに比べると年配であります。これはまあ生地が百姓らしい上に
一癖ありさうで、前のほど横柄でない處は、主從とも見えないが、たしかに前のに對して一目は
置いてゐるやうです。
この二人は甘酒に咽喉をうるほしながら、期せずして頭の上の例の大きな額面に眼が留まりま
した。
「はゝあ、甲源一刀流、秩父の遠見だな」
と云つたのは足を曲げてゐた方の道中師です。
「成程、遠見先生の御内で太した額を奉納なさいました」
前のは云ひ方が横柄で後のは幾分か愼ましやかであります。
「うむ、比留間與助知つてる、櫻井なにがし、あれも名前は聞いてゐる、それから三番目……の
は如何したんだ、白紙を頭から貼りかぶせたのは不體裁極まるじやないか」

そのロ調にこそ相異はあれ、たつた今、がんりきの百が頻りに憤慨したのと同じ動機に出でゝゐるので、心ある人ならば、誰もその無下な仕方を不快に思はないものは無い筈です。

「左樣でございますな、何とか仕方がありさうなものでございますな、折角の結構な額があれの爲に題なしになつてしまひますでございますね……おや〳〵お待ち下さいましよ」

年配の方の道中師が、やはり、それをながめてゐるうちに面が曇つて來ました。

「何だ、どうかしたのか」

横柄の方のが、それを聞き咎めると、

「その次に記されてお出でになるのは、ありや何とございます宇津木……宇津木と書いてあるんじやございませんか」

「さう〳〵、宇津木と書いてある、宇津木文之丞……」

「わかりました、わかりました、思ひがけない處で、思ひがけない人に打着かりましたよ、いやどうも何だか怖ろしい因緣がついて廻つてゐるやうでございますよ、驚きました」

斯う云つて例の白紙に貼りつぶされた無名の劍客の名前を呪はれたものゝやうな眼付でながめ入るのが變でしたから、横柄な方の道中師が、

「貴樣、獨り合點で幽靈のやうな事を云つては可かん」

「先生、この白紙をかぶせられてゐるお方の名前を、私はちやんと讀みました、紙の上から、ちやあんと見透しました、千里眼ですよ、失禮ながら先生には其れがお出來になりますまい」

「何を云つてるんだ、其んな事がわかるものか」

こゝに二人の道中師といふ、其年配の方のは七兵衞であります、さうして横柄な方のは、もと新徵組にゐた浪士の一人で香取流の棒を使ふに妙を得た水戸の人、山崎讓であります。

七兵衞と山崎讓とが、斯うして組んで歩くことは、がんりきの百が兩條力の手先になつてゐることよりは寧ろ奇妙な緣と云はなければなりません。

壬生の新選組にあつて山崎は變裝に妙を得てゐました。七兵衞が島原の遊廓附近に彷徨うて、お松を受け出す費用の爲に壬生の新選組の屯所へ忍び入つた時に、山崎はたしか小間物屋の風をして、そのあとを追ひ、さすがの七兵衞の膽を冷させた事があります。

それが何時の間に妥協が出來たのだらう、斯うして主從のやうな同行のやうな心安立てゞ歩いてゐるまでには相當のいきさつが無ければならない事です。

思ふに、七兵衞とがんりきとは甲府の神尾主膳の屋敷の燒跡を見て、その足で木曾街道を一氣に京都までのした筈であります。山崎讓はその以前、同じく甲府の神尾方へ立ち寄つて、それから道を枉げて奈良田の溫泉に入つてゐる時に、計らず机龍之助――それは新選組では吉田龍太郎の變名で知られてゐる其の人に逢ひました、其處で龍之助と別れて後、上方へ馳つけた筈であります。また南條と五十嵐との兩人も何か上方の變事を聞いて大急ぎで東海道を馳せ上つた筈である

から、彼等は期せずして上方の地で一緒になつたものでせう。さうして、がんりきは南條五十嵐等につかまつて其の用を爲すに至り、七兵衛は山崎讓につかまつて、何かの手助けをせねはならぬ因緣が結ばれたものと思はれます。

「先生、あなたも少々お頭を捻つてごらんなさい、すぐに其れとお判りになる事じやございませんか」

「何、貴樣に判つて拙者に判らんことがあるものか」

と云つて、改めて甲源一刀流の開祖逸見太四郎義利の文字から讀み初めて門弟席の第一、比留間櫻井、その次の白紙の主を紙背に徹るといふ眼光で見つめてゐたが、突然

「はゝあ、成程」

小膝を丁と打ちました。

「それ御覽なさいまし」

七兵衛は得意の微笑を浮べると山崎の面には一種の感激が浮びました。

「あれた、あの男た、さうか、成程……いやあの男には、拙者も重なる緣がある、大津から逢坂山の追分で、薩州浪人と果し合ひをやつてゐる最中に飛び込んだのは別人ならぬ此の拙者た、壬生や島原では、かけ違つて、あまり面會をせぬうちに、組の内はあの通りに分裂する、芹澤が殺されて、近藤土方が主權を握るといふことになつたが、その後、あの男の行方がわからぬ、さうしてゐるうちに、思ひがけないにも思ひがけない、甲州の白根山の麓、ちつぽけな温泉の中で、あの男を見出した、可哀相に目が、つぶれてゐたよ、盲になつて、あの温泉に養生してゐるのに打着かつたが、その時は涙がこぼれたなあ、あれは甲府の神尾主膳へ紹介して置いたなりで拙者も忙しいから上方へのぼつて、今まで忘れてゐたやうなものだ、此處であの男に會はうとは意外意外」

山崎讓は顏面の上を仰ぎながら、感慨に堪へないやうな言葉で斯う云ひました。

「おや、さうでございましたか、實はあの時分、私共も、あの方を尋ねて富士川口から甲州入をしてゐたんでございますが……とう〳〵お目にかゝる事が出來ませんでした」

七兵衛は斯う云つて何の氣もなしに椽臺の藤べりへ手を置いた時に何か手先にさはるものがありました。

指の先へ觸つたものを何氣なく眼の前へ抓んで來て七兵衛は

「おや」

物珍らしさうに、それを凝と見込みました。

「先生、先生」

「何だ」

「や、こいつは宜い物が手に入りましたぞ」

「いゝ物とは何だ」

「これでございます、こんな宜い物が、手に入るといふのは天の助けでございますな、お喜び下さい」

「何の事だか揃者には判らん」

と云つて山崎譲が、七兵衛の手に掴み上げたものを見ると、それは徑一寸はかりの眞鍮の輪に透した五箇ほどの小さな合鍵でありました。

「おい〳〵、お爺さん」

七兵衛は山崎譲に、その合鍵の輪を渡して、自分は甘酒屋の親爺を呼びました。

「はい〳〵」

「もう些と先に、これ〳〵のお客が、お前さんの處へ見えなかつたかい、これ〳〵では譯るまいが、ちよつと小いきな男で、片腕が一本無えんだ……身なりは、これ〳〵」

老爺は慌てそれを引取つて、

「えゝ〳〵、間違ひございません、確にお出でになりました、たつた今でございます、小一時ほど前の事でございます、こゝで甘酒を召し上がりになつて、角兵衛獅子に散財をしておやりなすつた親分がそれなんでございます、その通りのお方でございました」

「左様たらう、さう無くつちやならねえのだ……先生、そいつはがんりきの奴の道具でございます、あいつ、何かに狼狽たと見えて、こゝへ此んなポロを出して行つたのが運の盡きですな」

「成程、さうして見ると宜い獲物だ」

「爺さん、それから如何したい、その片腕の男は、角兵衛に散財をして其れから何方の方へ出て行きました」

「エ、、何でございます、多分お山を御見物でございませう、お歸りにお寄りになると仰有つたから、金洞山から中の嶽の方をめぐつて、そのうちには、また私共へお戻りになるでございませうと思ひます」

「さうして其の男は、一人つきりだつたかね、それとも連があつたかね」

「左様でございます、お出でになつた時はお一人でしたが、お出かけになる時は、どうもあれはお連でございませうか、それとも別々なんでございませうか、よくわかりませんが強力が五人ほど一緒に連れ立つて參りました」

「それだ」

山崎譲が、その時に足を踏み鳴らしました。

「さうやら、先生の仰有つた通りの筋書でございますな」

「左様たらう、この道、それより外にはないんだ」

「それでは出掛けようじやございませんか」

七兵衛から促されて山崎譲は、
「まあ〳〵待て」
甲源一刀流の額面を仰いで何をか一思案の體に見えました。
七兵衛が草鞋の紐を結んでゐると、額面を仰いでゐた山崎は
「ちよつ、どう見ても癪に觸るなあ」
と舌打をしました。
「全く、あいつは小癪にさはる奴でございますよ、拘、私共が、あいつと知合になつたのは東海道の薩埵峠の倉澤で鮑を食つた時からでございますがね、その時から、あいつは無暗に、私に楯をついて見たがるんで、私が三里歩けば、あいつは五里歩いて見せようといふ意地つ張りが何處までも附いて廻つて、どう〳〵あの片腕を落すまでになつたんでございます、それでも持つて生れた性根といふ奴は中々癒るもんぢやなく、私が先生について一肌脱がうといふ事になると、あいつが、いゝ氣になつて、浪人達の方へ廻り、あゝやつて意地を見せようと云うんですから、全く始末の悪い奴ですよ、ナニ大した悪黨ぢやございませんが、隨分小癪にさはるいたづら野郎でございます」
七兵衛は草鞋の紐を結び換へながら、こんな事を云うと、額面を仰いでゐた山崎が何か四方を見廻して、額堂の軒に立てかけてあつた二間梯子のあたり　横目を呉れながら、

「その事を云つてゐるのぢや無え……、七兵衛、ちよつと其の手拭を貸して呉れ、爺さん、この手桶を、こつちへ出して呉れねえか」
「へえ〳〵」
甘酒屋の親爺は云はれるまゝに柄杓の入つた手桶を取つて山崎の前へ提げて來ると、山崎譲は杓杓を右の手に取つて、左の手で、七兵衛から借受けた手拭を少し長目に丸めてザブリと水を掛け、最前横目にながめてゐた二間梯子の處へ行つて、それを右の手に抱へ込んで甲源一刀流の掛額の處に立てかけました。梯子を立てかけた山崎譲は左手に濡れ手拭を提げた儘でドシドシと梯子を上つて行くから
「旦那、何をなさるんでございます」
甘酒屋の親爺が仰天すると、梯子を一段たけ踏み殘して上りつめてゐた山崎譲は、脊伸びをしてその甲源一刀流の大額の、門弟席の初筆から三番目の張紙の上へ、グヂヤ〳〵に濡れてゐた手拭を叩きつけたから、
「先生、ナ、ナニをなさるんで」
七兵衛も亦甘酒屋の老爺と同じやうに慌てました。
「この男を斯うして置くのが癪にさはるんだ、開眼導師には、水戸の山崎譲ではちつと不足かも知れねえ」

濡らして置いた張紙をメリ〳〵と引きめくると、その下に隠れてゐたまた新しい木地の上に歴々と現はれたのは成程机龍之助相馬なにがしの文字であります。

十二

その前後の事でありました。碓氷峠の横川の關所から初まつて同心や捕手が四方へ飛びましたのは。

聞いて見ると、それはこんなわけです。昨夜、加州家の宰領の附いた荷駄が二頭、峠を越えて坂本の本陣まで着いたことは判つてゐるが、それから以後の行動が明らかでないといふ事です。馬だけは、確かにつなぎ捨てられてあるが馬の背に乘せた若干の荷物と、それに附添つた侍と馬方との行方が、わからないとの事です。

取調べて見ると、たしかに加州家の荷物で、北國筋から可なり長い旅路を送られて來たことも確かです。たゞ問題になるのは其の乘せられて來た荷物です。或は金箱を可なり多く、何萬といふほどの額を積んで來たものたらうといふ説もあります。また、それは金子ではなく火藥の類たらうといふ説もありました。こゝには例の加州家の鐵砲倉もあることだから或は、それに要する火藥の類を運送して來たのでは無からうかといふ説によつて、鐵砲倉や煙硝藏を調べて見たけれども、そこには何等の異狀もありません。

その評定半の處へ、上方から飛脚が飛んで來てはじめて此の事件の性質が判りました　それは火藥ではなく金。その金額は二萬兩。それは斯ういふわけです。

これより先き、水戸の家老、武田耕雲齋が大將となつて正黨の士千三百人を率ゐて京都に馳せ上り一橋慶喜に就いて意見を述べようとして、奥州路から上京の途につきました。その途中を支へる諸大名の兵と戰ひつゝ、遂に加賀藩まで行つたけれど、そこで力が盡きて降參し、耕雲齋をはじめ重なる者は悉く加州領内で殺されることになり、藤田小四郎も其時に斬られた一人であります。兎も角もこれ等の志士を北國の雪の中に見殺しの悲慘な運命に逢はせた其の責は誰に歸すべきものであるか知れないが……、其の時に行方不明になつた若干の軍用金が、此處の問題になる金なのであります。その以前、筑波騒動の時、武田伊賀守（耕雲齋）が幕府へ向けて騒動を鎮める爲の軍用金として借り受けた三萬兩の金がありました。その借用證は伊賀守一人の印で受取つて三萬兩のうちの一萬兩は小石川の水戸家の藏へ納めました。けれどもあと二萬兩の金の行方が誰にもわからないのであります。或者は既に筑波騒動以來の軍用に費つてしまつたとも云ひ、或者は北國まで上る長の路用に盡きてしまつたともいひ、或者は、また他日に備へる爲に耕雲齋や藤田の手許に最後まで殘してあつたのを、いよ〳〵殺されると定まつた前に、不意に其の金を受け渡して何處へか運んで行つたものがある、今となつて見ると、その二萬兩が、たしかにあの二頭の馬の脊に積まれて五人の人に護られて碓氷峠を越えたのだといふことが有力な觀察であります

した。

さて、此の二萬兩の金と、外に重宴な荷物の多少が此處から何處へ運はれて何に使用されるのかは……問題はそれで同心や捕方が四方に飛んだのもその探索の爲であります。

その晩、夜通しで、信濃と上野の境なる餘地峠の難所を松明を振り照して登つて行く二人の旅人がありました。

前なるは七兵衛で、後のは山崎讓であります。棒を取つては腕に覺えの山崎讓も、足に於ては到底七兵衛の敵ではありません。一夜に五十里の山路を平地のやうに飛ぶ七兵衛が先に立つての案内ぶりは子供のあんよを氣遣つてゐるやうなものです。峠の上で、

「七兵衛、一休みやらん事には、もう歩けぬわい」

山崎が弱い音を吹くと、

「もう少しお降りなさいまし、いゝ處を見つけて焚火を致しませう」

山間へ來て、枯木を集め松明の火をうつして焚火をはじめ、

「先生、また私にはよく解りませんがなあ、その五人の強力といふのは一體何者なんでございます、それほど大事なものを持つて、わざ〳〵此んな道を潜り拔けて甲府へ落着かうといふのは何かよくよくの謀叛でもあるんでございませうな、一つ其の邊の處をお聞かせなすつてお呉んなさいまし」

七兵衛から斯う云つて尋ねかけられた時に、山崎は頷いて

「うむ、尤もな不審だ、お前から尋ねられなくても話さうと思つてゐた處だ、その五人の強力といふのは、素性はまだよく解らないのだが、それは慥に中國から九州邊の浪人だ、中には容易ならん大望を持つた奴がある、容易ならん大望といふのは、隙を見て、甲府城を乘取つてしまはうといふ計畫なのだ、甲府の城は名だゝる要害の城で德川家でも怖れて大名に與へずに天領として置く處だ、それを乘取れば關東の咽喉首を抑へたといふ事になるのだ、その五人の強力に化けた奴は、慥に其の一味の者共だ、さうして彼奴等が、坂本の宿へ馬を置きつ放しにして、姿を晦ましたのは、云はずと知れた妙義の裏山から信州へ出て、山通しを甲府へ乘込む手順に違ひない、それからお前の兄弟分だとかお弟子だとかいふ、そのがんりきとやらが甲州者で道案内だと聞いていよいよそれを確かめてしまつたのだ、彼奴等の携へてゐる荷物といふのは水戸の武田耕雲齋が幕府から借りた三萬兩のうち、二萬兩がそつくり有る筈だ、それが彼奴等の事を擧げる軍用金になるのは知れた事だ、事によると、山通しを、いよ〳〵甲府へ出るまでには、仲間の奴等が何處から出て來るか知れたものじやない、まあ、併し落着く處は甲府と定まつてゐるんだから、追蒐けるにも、さう急ぐことはないや、彼奴等に氣取られると却て事が面倒になるから、氣をつけて案内して呉れよ」

それを聞いて七兵衛が頻りに感心して、

「成程　そりや些と、こちと等のやる仕事より大きいや、甲府の城を乘取つて、お膝元を横目に見ながっ、天下を引くり返さうといふんだから、出來ても出來なくつても、仕掛が小さくはございませんな、宜しうございます、向ふが、その了見なら、此方も其のつもりで、先生の御用をつとめて〳〵ぶちこはし役に廻るのも面白うございますね、隨分やりませう」

十三

相生町の老女の家の一間で行燈の下にお松は兵馬の着物を疊んで居りました。

いつも元氣で快活なお松が此の頃、しをれてゐるのが眼に立つほどで、今も着物を疊みながら眼に一はいの涙をたゝへて居ります。

今日も兵馬の留守中、用ありけに來た二人の客があります。その一人は、甲府からついて來たあの厭らしい金助といふ男で、あれが此の間、兵馬をはじめて吉原へ連れて行つた男であります。

あの男が來る度に兵馬さんは落着かなくなつて、その都度、お金の心配をなさるやうな御容子がありゝ〳〵とわかるのである、夜更けになつてお歸りなさる事もあるし、また、どうかすると一晩泊つてお歸りになることもあるが、そのお歸りになつた後のお面の色は、打ち沈んで、太息を吐いておゐでなさるのが、今までの兵馬さんとは丸つきり違ふ。

もう一人の來客は、たしか刀屋であるといつてゐたが、若しや兵馬さんが御所持の腰の物を、あの刀屋にお拂ひ下げになるつもりではあるまいか、そんならば本當に一大事、

それを思うと、覺えず涙が眼の中に一はいになつて、幾度も着物を疊み直してゐるうちに、ふと其の袂の中から、讀み捨てた一封の手紙が、何か物を云ふやうに綻び出しました。

お松は、はつとして、その手紙を手に取り上げて見ると女文字です。ひろげて見ると、嫉ましいほどに手ぎはよく書いてあつて文言は讀まない先きに、其水莖のあとの艶めかしさと、ときめく香が、お松の眼をさへぐらぐらとさせるやうでありました。お松は、一種の口惜しさがこみ上げて手紙を取る手がワナ〳〵とふるえました。

その時に廊下で人の足音がします。

「お歸りなさいませ」

そこへ歸つて來たのは兵馬であります、お松は慌てゝ、あの艶めかしい手紙を自分の懷へ押入れて兵馬の前へ叮嚀にお辭儀をなしながら、そつと涙を隱しました。

「さうして置いて下さい」

「あの、兵馬樣、今日はお留守中に、お客樣が二人お出でになりました」

「來客が二人、さうして其れは誰と誰」

「一人は、いつもの金助さんでございますが、もう一人は久松町邊の刀屋だとか申して居りました」

「はゝあ、刀屋が來ましたか、それから金助は何と云ひました」
「あの方は何とも申しません、たゞ、わたしに向つて、此の頃は定めてお淋しうございませうと笑ひながら云ひましたゞけでございます」
斯う云つてお松は伏目になりました。
「はゝあ、……何を云ふのか彼奴の云ふ事は取り留まつたものではない」
兵馬はやはり淋しき笑ひに紛らはさうとするらしいが、
「兵馬様」
その時お松は屹と心を取り直したやうに面を上げて兵馬の名を呼びました。
「何でござる」
「あなた様は、この頃、どちらの方へ多くお出かけになりまする」
「何を改まつて、そのやうな事をおたづねなさる」
「いゝえ、わたくしは、それをお伺ひ致さねはならないほど、この頃は、ほんとに氣が弱くなつてしまひました」
「そなたの言ふ事が、わしにはよく判りませぬ、拙者の此の頃の出先と云つて、その目的は、そなた存知の通りなれど、出先はやはり今日は東、明日は西、何處と定まつた事なく江戸の天地を四角八面に潛り歩いてゐるやうなものぢやわい」

「それなら宜しうございますけれど、わたくしの此の頃お見受け申すあなた様は前のあなた様とは別のお方のやうでございます、それが悲しうございます」
「ナニ、拙者が以前とは別な人のやうになつた……はゝあ、そなたの眼に左様に見えますか」
「えゝ〳〵、失禮ながら、これまでの、あなた様は、どんな艱難にお逢ひになつても、お心の底には強い處が確乎としておゐでになりましたけれど、この頃は、それがゆら〳〵と動いておゐで遊ばすやうにばかり、わたくしの眼には見えてなりませんのでございます、お出ましになる時も、歸つてお出でになる時も、あなた様のお面にもお心持にもおやつれが見えるばかりで、昔のやうな落着といふものが一日々々に亡くなつておゐでなさるやうに見えますのがわたくしには悲しくてなりませぬ」
と云つてお松は涙をこぼしました。
その晩は、お松は越方や行末の事を考へて、今更、人の心の頼みないことを、しみ〴〵と思ひわびて眠れませんでした。
懷へ入れて來たあの女文字の手紙を取出して讀み返して見ると舌たるいやうな言葉でぜひぜひ今宵のお出でをお待ち申上げますといふやうな文言であります、女の名は東雲とあつて、宛名は片柳様となつてゐました。片柳の名は兵馬が好んで用ふる變名であり、東雲といふのは吉原の何がし樓かにゐる遊女の源氏名に違ひない、お松はそれが悲しくもなり、腹立たしくもなつて、その

手紙を引き裂いてやらうかと思ひました。

その遊女も憎らしいけれど、兵馬さんほどの人が、どうしてまた其んな狐のやうな女に脆くも溺れるやうになつたのか、あの人の心に天魔が魅入つたと思うより外はなく、それが口惜しくて〳〵なりません。と云つてよく考へて見れば、斯うして自分といふものがお傍に居りながら、そんな仇し女に兵馬さんの心が移るやうにしたのは、やはり自分が足りないからだと思うと、どうも殘念で堪まりません。どうかして、再び兵馬さんの心を其の女から取戻さなければならないが、あちらは人を誑かすことを商賣にしてゐる人、その腕にかけては、とても太刀打の出來ないわたしであるかと思ふと、お松は曾て知らなかつた嫉ましさに、身悶えをさへするのでありました、寢られないから、お君の病氣の容態を見舞に行つて氣を紛らさうと廊下へ出ると、兵馬の部屋の中で、

「へえ、それはもうお買戻しになりまする節は手前共にございまする間は、何時でも仰せに從ひまする、また他の品とお取替になりまする場合にも、精々勉强致しまして、お使を下さいますれは早速お伺ひ申上げまする」

と云つてゐるのは刀屋の番頭らしくあります。

それを耳にした時もお松は胸を打たれました。それでは、大切のお腰の物をお放しなさる氣になつたのか、それほどお入用の金ならはわたしの手で……と思ひましたけれども、實は、この頃の

自分は、もう貯へのお金とても無いし、自分が持つてゐないのみならず、お君さんにも、また御老女樣にも借金までしてある、その借金は皆んな、外ながらあの人の困る容子を見るに見兼ねて融通して上げたお金であるが、今の處、返さなくてはならないといふほどの義理があるのではないけれど、成るべく早く何とかして返してあげたいものだと思つてゐる位だから、この上、あの人達に無心が出來るものではない。

と云つて、あの人が見す〳〵武士の魂といふ腰の物までも手放なさうとなさる今の場合、そのお力にもなれない自分の身の意氣地のないことが思はれてなりません。お松はそこで、もうお君を見舞に行くほどの勇氣も無くなつて、さあ、何とかして、たつた今あの刀屋を歸さないやうにして上げる手段はないものかとまた自分の部屋へ取つて返したけれども、もう所持品にしても、さして金目のあるものはなく、たゞ藏つてあるのは着物だけであるけれど、それとても、今宵の間に合ふのではなし、あゝ、こんな時にあの七兵衛のをぢさんが來て呉れたならと、當のない人を空頼みにして、とう〳〵夜を明かしてしまひました。

翌朝になつて見るとお松は、また兵馬に對して、どうやら濟まない心持ちになりました。

それで廊下を通りがけに兵馬の部屋を訪れて見ると、もう其の時に兵馬は其處に居りませんでした。

お松は、折角、しほらしい心に返つたのが、またむら〳〵と抑へきれない不快の心に襲はれて、

足早に其處を立ち去らうとする處へ何氣ない面をしてやつて來る一人の男にハタと行き當りました。

「お早うございます」

「おや、お前は金助さんではないか」

「はい、その金助でございます」

お松も、小面の憎いイヤな奴と思ひながらも何か尋ねて見たい氣になつて、

「金助さん、宇津木さんは居りませんよ、何か御用なら、わたしが承はつて置きませう」

「左樣でございますね、別に御用つてほどの事も無えでございますがね、それでは此れでお暇を致しませうか知ら」

「あの金助さん、お前さんに御用が無ければ、わたくしの方にお聞き申したいことがあるのですけれど、ちよつと彼方まで來て下さいませんか」

「へえ、お松樣、あなた樣から何か私に御用があると仰有るんですか、宜しうございます、さう仰有られると厭と申上げるわけにも參りませんな、お邪魔を致しませう」

金助は恩に被せるやうな言方をして、お松のあとに從つて長い廊下を奥へ行く途中で、

「成程、結構なお邸でございますな、はゝあ此方の障子が霞でございますな、欄間の蜀紅扇しがまた恐れ入つたものでけす、お床の間は鳥居棚、こちらはまた繻部の正面、間毎々々の結構眼を

驚かすばかりでございます、控燈籠の棗形の手水鉢、あの物さびた處が何とも云はれません、建前に斯うして澁い處を見せ、間取には贅を凝らして置いて、茶室や袖垣のあんばいに物のさびといふ處をたつぷりとあしらつた處などは實際憎うございますよ、おや〳〵大した石燈籠、こりや本格ですよ、橘寺形の石燈籠、これをそのまゝ据ゑた處なんぞは飛ぶ鳥も落すやうなものでけす、十萬石以上のお大名でもなけりや出來ません、全く驚きました、表からお見かけ申したんぢや是れほどのお住居と氣のつくものはございません」

金助は相變らず齒の浮くやうな追從を並べて四邊をキヨロ〳〵見廻しながらお松に導かれて廊下を歩いて行きます。

十四

その時分、お君はムク犬を連れて、奥庭を歩いて居りました。

いつぞやのやうに打掛こそ着てゐないけれども、寢衣姿のまゝで、手には妻紫の扇子を携へてそれで拍子を取つて何か小音に口ずさんで歩いて行くと、それでも例によつてムクは神妙にあとをついて築山の前の芝生まで來ました。

「ムクや、お前と此處で投扇興をして遊びませう、わたしが投げるから、お前取つてお出で」

斯う云つてお君は手にしてゐた扇子を颯と開いて投げました。扇子は流星のやうに飛んで彼方の

芝生の上に落ちると、ムクはユラリと身を躍らして一飛びに飛んで行き、要のあたりを啣へて、開いたなりの扇子を、再びお君の手に渡します。

「おゝ、よく持つて來て呉れました、お前はほんとに宜い犬だ、わたしのムク犬や、もう一度、投げるから取つてお出で、いゝかい、今度は、下へ落ちないうちに受けるのですよ」

開いてあつた其の扇子を、ヒタリと締て、お君は其れを空中高く投上げました。

「さあ、下へ落ちないうちに」

中空高く上がつた扇子がトンボのやうに舞つて落ちて來ると、それは早くもムクの大きな口の中に啣へられました。

「上手、上手、またお前、いろいろの藝當が出來るんたね、間の山にゐた時から、わたしが仕込んた上に、兩國へ來てから、皆んなに仕込まれたのたから、隨分お前は藝の數を知つてるでせう、忘れないでおゐで、一旦覺えたものを忘れるやうなお前ぢやないけれど、それでも、お浚ひをしないと、人間たつて忘れることが多いんたから無理もないわ」

お君はムク犬の口から、扇子を外して頭を撫でゝやりましたが、

「忘れるといへは、わたし三味線の手を忘れてしまやしないか知ら、間の山節は、わたしより外に歌へる人は無いんたから、あれをわたしが忘れて終うと、あとを繼ぐ人がない、それではお母さんに濟まない」

お君は斯う云つて其の扇子を取り直すと、撥のつもりに取りなして左の手で三味線を抱へるこなしをして口三味線でうたひはじめ、

「大丈夫、わたしは決して忘れやしない」

淋しく笑つて池のほとりへ出ました。

「ムクや」

左へ廻つて附いてゐるムク犬を慌しく右の方から尋ねて、

「お前、他見をしちや可けません、可愛い〳〵わたしのムク犬や、お前、何でもわたしの云ふことを聞いて呉れますね、お前は一旦覺えた藝は決して忘れやしませんね、たから、一旦お世話になつた人も決して忘れやしないでせう……ほんとに忘れないならは、お前、殿樣をお探し申して來てお呉れ、わたしを、あの殿樣のゐらつしやる處へ、お前後生たから連れて行つてお呉れ」

お君に、斯う云つて歎願されても、これはかりはムク犬も返答に困るらしくありました。

「可けないかい、これはつかりはお前にも出來ないたらうね、さうでせう、殿樣は此の國にゐらつしやらないのたからね、海を越えて西洋といふ處へお出でになつてしまつたのたから、幾らお前が賢い犬でも、トテモ西洋までは行けやしないからね、これは、頼んたわたしの方が惡いのさわたしの方に無理があるんたから仕方がない」

お君は、こんな事を云ひながら池のまはりを歩いて行きましたが、

「けれどもね、無理のない云ひつけなら、お前聞いて呉れるでせう、わたしの頼みが間違つてゐなければお前は頼んだ通りによくして呉れるでせう、そんならお前、友さんの居所を教へて頂戴、米友さんは何處にゐるか、其處へわたしを連れて行つて頂戴、ね、さうでなければあの人を、此處へ呼んで來てお呉れ、いゝえ、あの人はきつと此近所にゐるのよ、近所にゐるけれども、わたしを悪がつてゐるから、其れで來て呉れないんだね、けれども、わたし決して友さんに悪がられるやうな悪い事をした覺えはないのよ、あの人は氣が短いから、一人で勝手に怒つてゐるんだけれど、よく話をすれば、わたしの事だもの、そんなに判らない米友さんじやないわ、わたし、もう一遍よう〳〵話をして見たいと思ふの、あの人を怒らして置いちや悪いわ、ほんとにあの人はいい人なんだから怒らして置いちや悪いわ、けれども、どうしてあの人はあんなに氣が短いんだらう、甲州で別れる時にも、わたしはかりじやない、あの殿樣を大變に悪く思つて別れたんだから……殿樣を敵のやうに悪口を云つて出て行つてしまつたのは、お前も彼地にゐたから、よく知つてゐるでせう、それがわたしには如何してもわからないの、殿樣は悪いお方じやありません、米友さんも些とも悪い人じやありやしない、それたのに、どうして仇のやうに思ふんでせう、殿樣は、あんなえらいお方でゐらつしやるし、友さんは、わたしと同じことに、とても身分は比べものにはなりやしないけれど、それでも、わたし米友さんに惚れるのは忌、一體わたしや殿樣と米友さんと何方が宜いんだらう、何方が本當に好きなんでせう、わからなくなつてしまつた」

ムク犬は、もとより此の疑問に答ふべくもありません。

今まで忠實に主人を見守つてゐたムク犬が今度は、それと違つて垣根の彼方を見つめてゐます。

前後の模樣を見ると垣根の影から庭のうちを伺つてゐたものがあるらしい、お君は全くそれに氣がつかないが、ムク犬は早くも其れと感づいたらしいのです。

お君はその時に身のうちに寒氣を感じて、何時の間にか、恥しい寢衣姿で、奥庭の池のほとりに立つてゐる自分を見出しました。

「あゝ、悪かつた、わたしは、また氣がゆるんでしまひました、誰も見てゐなかつたかしら、ムクや、お前此方へお出で、わたしは内へ入りますから」

正氣に返つたお君は、匆惶として椽へ上つて障子の中へ身を隠してしまひました。

十五

其れから暫らく經つて、兩國橋を喇へ楊枝で折詰をブラ下げながら歩いて行くのは例の金助です。

「占め〳〵萬事斯う來なくつちやならねへ、駒止橋の獣肉茶屋で一杯飲んで歸りがけにもゝんぢいやへ寄つて、狐を一舟括らせて、これから巣鴨の化物屋敷へ乗込むなんぞは我ながら凄いもんだ」

何か嬉しくて堪まらない事があるらしく、頻りに獨り言を云ひ云ひ歩きます。

「處で、今樣の鈴木主水を一組こしらへ上げてしまつたなんぞは、刷毛ついでとは云ひながらちつと罪のやうだ」

斯う云つてニタリと笑ひました。此の先生こそは、相生町の老女の家の兵馬を訪ねて來て、兵馬が出たあとをお松に見つかつて呼び込まれて、何か兵馬の近頃の身の上に就いて、お松に喋べつてしまつた事があるらしい男です。

併し、この先生の事たから、甲に向つて喋る事と乙に向つて喋る事の間に味をつけないで喋る氣遣ひはありません。さうして其の間に何か旨い汁がありとすれは、其の餘瀝を啜つて皿まで嚙じらうといふ先生たから、お松に尋ねられた事も、素直には云つてしまはない事はわかつてゐます、おべんちやらと、お爲ごかしを混合にして、けたもの茶屋の飲代位は、たしかにお松から、せしめてゐることは疑ふべくもありますまい。

たゞ、その位ならはいゝけれども、今樣の鈴木主水を一組こしらへてといふやうな言葉は、どうも聞き捨てがならない、兵馬と東雲との間が、果してどんな譯になつてゐるのか知れないがそれをお松に向つて輪をかけて吹聽し、お松を嗾しかけるやうな事にしては、これは慥に罪です。お松はうつかり其れに乘せられるほどの女ではないけれど、こんな男の細工と口前がつひつひ大事を惹き起さないとも限らないから、實際はお松も兵馬も惡い奴に見込まれたと思はねはなりますまい。

それよりも尙ほ危險なのは、この男が此れから染井の化物屋敷へ行くと云つたことであります。染井の化物屋敷とは、つまり神尾主膳等の隱れ家を云ふものです。神尾の許へ行へからには、どうせ碌なことでないのはわかつてゐます。さうして此の男が老女の家を辭して歸る時に、垣根の蔭から何か、そつと隙見をして其の途端に、

「占めた」

と云つて嬉しがり初めたのは、やつはり其の邊に何か寶り込むことが出來て、それを土產に神尾へ乘込まうといふ氣になつたのは前後の擧動で明かにわかります。

さうであるとすれは、その隙見は何を見たのた、刻限から云つても、ムク犬が奧庭で急にお君の傍を離れたことから云つても我に返つたお君が、あわてゝ家の中へ隱れたのから見ても、此の男は、圖らずあの際お君の姿を認めたものに違ひない。そんならは確かに一大事です。甲府にゐる時に、お君は慥かに神尾が一旦は思ひかけた女である、それを此の男が神尾へ寶込むとすれは今でも神尾の好奇心を嗾るに充分であることはわかつてゐるのであります。

それを知つてゐるから金助は、また儲けの種に有りついたやうに、前祝かた〴〵獸物茶屋で一杯飲んで、上機嫌で兩國の河風に吹かれながら橋を渡つて行くものと見える。

斯うして有頂天になつて橋の半まで來た金助が急に何かにおどかされたやうに、よろ〳〵とよろけると、踏み留まることが出來ず、脆くもバツタリ前に倒れて、暫し起き上がることが出來ませ

ん。

「御免よ、御免よ」

金助が、はつたりと倒れて暫らく起き上れないでゐる時、それを左を避けて頬りにお詫をしてゐる者があります。それは竹の笠を被つた小柄な男でありましたが、首つ玉へ風呂敷包を結び素足に草鞋をはいて手に杖を持つて居りました。

「此の野郎、御免で濟むと思うか」

漸く起き上つた金助は、目を怒らして小男を睨つけて、言葉を荒つぽくして叱りつけました。

「御免、おいらは草鞋の紐を結んでゐた處なんだ、そこへお前が來て、よろ〳〵とよろけたから、危ねえ！と思つて左へ避けたんだ、左へ避けた途端にお前が前へのめつたんだから、おいらに罪は無えやうなものなんだが其れでも、時と場合だから、おいらの方からあやまつてやらあ」

斯う云つて竹の笠を傾けて金助の面をヂロリと見上げたのは珍らしや宇治山田の米友でありました。併し乍ら、金助は酔つてゐたせいか、どうか米友の米友たることを知りません。たから其の返答がグツと癪にさはつたものと見え、

「おや〳〵、時と場合だから、貴様の方からあやまつてやるんだつて、馬鹿にするな是のちんちくりん」

金助は打つてかゝらうとして拳を固めると、宇治山田の米友は一足後へさがつて、其の丸い眼をクル〳〵とさせ、

「時と場合だらうじやねえか、おいらは斯うして俯向いて草鞋の紐を結んで笠を斯うやつて前に被つてゐるから、向ふは見えねえんだ、お前の方は、笠も何も被らねえで前から、やつて來るんだから、本當なら、おいらが突き倒されてしまふ處なんだ、それを危ねえ！と思つたから左へ避けて、おいらの身體は無事だつたが、お前は、そのハズミを食つて、おいらの代りに前へ倒れたんだ、まあ怪我をしなかつたのが仕合せだあな、勘辨しろ勘辨しろ」

斯う云つて感心にも宇治山田の米友は、相手にしないで行き過ぎようとします。これは米友としては出來過ぎですけれども、金助は血迷つてゐて、この米友の出來榮えを買つてやる餘裕がありません。

「おい〳〵、待て〳〵此の野郎、脊はちんちくりんだが何處まで人を食つた野郎だか知れねえ、いよ〳〵癪にさはる言草だ、待て」

金助は米友の筒袖を引張つて引留めました。

「そんなに引張らなくつてもいいや、逃げも隠れもしやしねえよ、何か言草があるなら、うんとこさと言ひねえな」

斯かる場合に決して惡怯れる米友ではありません。

「云はなくつて如何する、今の言草をもう一遍云つて見ろ、本來なら貴様が突き倒されてしまう

處を、危ねえ！と思つてから左へ避けて貴樣の身體は無事だつたが、此方が其のハズミを食つて身代りに倒れたとは何の言ひ草だ、左へ避けて身體の無事であつた方は無事で宜からうけれど、身代りに倒された方こそ宜い面の皮だ、この面の皮を一體どうして呉れるんだ」

金助は斯う云ひながらグイ〳〵と米友の着物を引張りました。

「おい、あんまり引張るなよ、質の値が下がらあな、着物を引張らなくつても文句は云へさうなもんだ」

米友は仕方が無しに引き寄せられてゐると金助は、いよ〳〵怒り出して、

「この野郎、いやに落着いてゐやがら、一體、人を轉がしといて、身代りに倒れたで濟むか、この野郎」

「たつて仕方が無えじやねえか、おいらが倒れなけりやあお前が倒れるんだ、お前が倒れたからおいらは倒れないで濟んだんだ、幾度云つたつて同じ窟じやねえか、いゝ加減にしといた方がお前の爲になるよ」

この時に金助は火のやうになつて、

「此の野郎、もう承知が出來ねえ」

拳を上げてポカリと食はせようとしたが相手が宇治山田の米友であります。

「おや〳〵、お前、おいらを打つ氣かい」

金助の打ち下ろした拳を米友はしつかりと受け止めました。

「此んな獸物は痛え思ひをさせなくつちや判らねえ、物の道理を云つて聞かせてもわからねえ野郎だ」

拳を取られながら金助は、齒噛みをしていきり立つてゐます。

「ジョ、ジョーダンを云つちや可けねえ、理窟はおいらの方にあるんだ」

米友は金助の拳を、倘ほしつかりと握つて、口の利き方が少し吃ります。

「放せ、野郎、放せといふに」

金助は頻りに悶搔くけれども、米友に摑まれた手を自分の力では放すことが出來ません。

「放さねえ」

米友も漸く蟲の居處が惡くなつて來たやうです。

「放さなけりや、此うして呉れるぞ」

金助は左の手に持ち替へてゐた折を自襟に振上げて米友の面へ叩きつけようとしたのを素早く面をそむけた米友が、

「野郎」

額の皺が緊張し、面の色が赤くなつて、口から泡を吹きはじめました。併乍ら、こゝまで上げたのをグッと怺えて、たゞ金助の面を睨めたゞけで、その握つた拳を突き放しもしなければ打ち返

しもしない、凝と泡を吹いたなりで我慢してゐる處はさすがに米友も幾らかの修行を積んだものと見なければなりません。

それを、どう見て取つたのか、いゝ氣になつた金助はかさにかゝつて、

「何だい、貴樣の面は其りや、兩國の見世物にたつて近頃貴樣のやうな面は流行られねえや、ちよつと見れば餓鬼のやうで、よく見れば親爺のやうで、鼻から上は、丸きり猿で鼻から下だけが、どうやら人間になつてらあ、西遊記の悟空を三日も行燈部屋へ漬けて置くとそんな面になるだらう、よくまあ、晝日中、その面を下げて大江戸の眞中が歩けたもんだ、口惜しいと思つたら、親許へ持ち込むんだね、親許へ持ち込んで、雜作をし直して貰つて出直すんだ」

此の時分、あたりへ漸く人集りがしました。人集りがしたから、金助は、いよ〳〵得意げに毒舌を弄して、米友を恥しめようとするらしい、

「野郎」

米友は齒をギリ〳〵と嚙み鳴らしました。けれども、また、自分からは打つてかゝらない米友は何か思ふ仔細があるのか、たゞしは誰人かに新しく勘忍の德を敎へられてそれを思ひ出したからこゝが我慢の仕處と觀念してゐるのかも知れません。それをそれと知らずして、かさにかゝつてゐる金助は噴火口上に舞踏してゐると云はうか、劍刀の刃を渡つてゐると云はうか、危險極まる仕事であります。

「何とか云へよ、此のちんちくりん」

右の利腕を取られてゐる金助は此の時ガーツと咽喉を鳴らして米友の面上目がけて吐きかけようとしたから、

「野郎」

こゝに至つて米友の勘忍袋の緒はブツリと切れました。片手に携へてゐた杖を橋の上にさし置くと、のしかゝつて來た金助を頭の上に引かぶりました。米友の頭の上で泳ぐ金助を意地も我慢も一時に破裂した米友は、そのまゝ橋の欄干近くへ持つて行くと見る間に、眼よりも高く差上げてドブンと大川の眞中へ抛り込んでしまひました。

金助を川へ抛り込んだ米友は物凄い面をして橋の上に置いた杖を拾ひ取ると、あつと驚く見物を見向きもせず、跛足の足を飛ぶが如くに向ふ兩國を指して走せ行つてしまひました。

十六

神尾主膳の隱れてゐる例の染井の化物屋敷は依然として化物屋敷であります。

眞中の母屋には神尾主膳が住み、そこへ出入するのは、旗本のくづれであつたり、御家人のやくざ者であつたり、どうかすると、角力や藝人上りのやうなものであつたりするけれども、此處では餘り騷ぐことはなく、三日に一度位、主膳はその家を忍び出でゝ夜更けて歸ることが多い。

それから離れの方には、例のお絹が別に一廓を構へて若い女中を一人使つて、ほとんど母屋とは往來をしないで立て籠つてゐるかと思へは、土藏の中には、お銀樣が怨むが如く泣くが如く憤るが如くほとんど日の目を見ることなしに籠つてゐるのであります。お銀樣と神尾の臺所の世話をしてゐるのは、練馬あたりから雇ひ入れた女中ではあるが、この女中は少しく痴呆性の女で、それに輩と來てゐるから化物屋敷にゐて、化物の物凄いことを感得することが出來ません。

今日は神尾主膳が、朝から酒につかりながら、座敷の壁へ大きな一枚板を立てかけて、醉眼を開いて、それを見据ゑてゐると、傍に、よく肥つた奴風の若いのが片肌ぬぎで頻りに墨を摺つてゐます。

「殿樣、旨く一つ書いてやつてお呉んなさいましよ、最賣分にね」

「ふーん」

神尾は鼻であしらひながら筆洗の中から木軸の大筆を取つて、ツブリと大硯の海の中へ打ち込みました。

「無駄を云うな」

「たつて、後見が旨くなけりや太夫が引き立たねえや、さあ〳〵、殿樣の曲藝、米芾樣の筆を以て勘亭流の看板をお書きにならうとする小手先の鮮かな處にお目をとめられて御覽じろ」

「馬鹿」

神尾は大奴の無駄を輕く叱つて、板の面を目分量して字配りを計りながら、硯の海で筆をなやして居りましたが、やがて板へぶつゝけに

「江」

といふ字を一息に書いてしまひました、

「旨い！」

大奴が半疊を入れると神尾は苦笑ひして、

「氣が散るから無言つてろ」

と云つて今度は息を拔かずに筆を振つて縱横に書き上げた縱看板の文字は、

江戸の花　女輕業

の七文字であります。

「太夫御苦勞」

大奴は硯の下にあつた團扇を取つて神尾を煽ぎ立てました。

書いてしまつた七文字を神尾は、また右見左見してながめてゐます。文字は決して惡い出來ではありません。文字の示す通り女輕業の看板としては勿體ない書風であります。神尾さても看板書きになつたわけではなく、頼まれたれはこそ、斯うして筆を揮うのでありませう。そこへ廊下を歩いて來る人の音、

「殿様、殿様、ドチラにゐらつしやるんでございます」
それは聞いた事のある女の聲。
「おや福兄さんもお出でなんですか」
入つて來たのは女輕業の親方のお角でありました。
「いよう、これは〳〵兩國橋の太夫さん」
福兄と云はれた大奴は、細い目をしてお角を迎へました。
「殿様御機嫌宜しう」
お角は神尾の前へ手を突いて頭を下げました。
「頼まれ物が出來上つたぞ」
神尾も御機嫌がよく、お角の面と、今書き上げた看板とを見比べて居ますと、
「まあ、お書き下さいましたか、これは〳〵、何といふお見事なお筆でございませう、生きてゐるやうでございますね」
お角も看板の文字を見て心から嬉しさうであります。
「生きてゐるとも」
神尾も亦自分ながら書き上げた看板の文字に得意でゐます。
「太夫元、案らなくちやあ可けやせんぜ」

福兄は斯う云つてお角を嗾しかけました。
「案りますとも、何なりとお望みに任せて」
「宜しい、所望がある」
福兄が改まつて向きになると、
「福、貴様が出しやばる處じやないぞ、貴様は墨の摺賃に二百も貰つて引込めば可いんだ」
神尾が福兄を嗜めると、福兄は納まらず、
「可けやせん」
胡座を組み直して強面にかゝらうとするのをお角は笑ひながら、
「福兄さんには殿様に内密で、わたしが、澤山お禮を致しますから、もう少し待つて下さいね今が大事の時なんですからその代り今度のが當りさへすれば、ほんたうに福兄さんを福々にして上げますからね」
「旨く云つてやがらあ、けれども、さう話が判りや其れでも宜いんだ」
福兄は其れで、どうやら納まりかけた時に、神尾主膳が、
「お角、今に始まつた事ではないが、お前の腕の凄いのには恐れ入つた」
改まつたやうな云ひがゝりだからお角も用心して、
「殿様、改まつて何を仰有るのでございます」

「白を切つちや可かん、お前が今度の房州行なんぞは運も宜かつたが、腕の凄さは、いよ〳〵格別なものだ」

「神尾の殿樣、そんな氣味の惡いことを仰有つておどかしちや可けません、かう見ても氣が小さいんですからね」

「あんまり氣が小さいから、少しはオドかして大きくしてやらぬ事には仕末がつかん」

「何を仰有るんですか、わたしには一向わかりません」

「お前にはわかるまいが、此方には、すつかり種が上つてゐるんだ、房州へ行つて命拾ひをして來た上に、金箱を脊負込んで來て其れで何食はん面をして口を拭つてゐる處なんぞは不埒千萬たなあ、福」

主膳が福兄を顧みると福兄は一も二もなく頷いて、

「さうですとも〳〵、ありや實際不埒千萬ですよ、あれは只じや置けませんよ」

「福兄さんまでが殿樣に御加勢なんですか、金箱と仰有つたつてまた分らないじやありませんか、また乘るか反るか打つて見なけりやわからないじやありませんか」

お角は外らしてしまはうとすると神尾は其れを取つて抑へて、

「其の手は食はん、金箱といふのは、茂太とやらいふ小伜の事ではない、その外に確かに見屆けたものがあるのじや、若い綺麗な金の澤山ある男と、お前が仲睦まじく飲んでゐたとやら、それをちやあーんと見屆けた者が我々の仲間にある、お角あんまり凄い腕を振ひ過ぎると祟りが怖からうぜ、がんりきの百とやらも無言つちやゐなからうぜ」

「エ」

神尾から斯う云はれて、さすがのお角もギヨッとしたやうです。

「それは違ひます、それは違ひます」

お角は、あわてゝ其れを打ち消すと、神尾が意地惡く、

「福、お角は違うと云つてるが、お前は如何思ふ」

「違ひませんな」

福兄は得たりと引取つて空嘯く。

「では、福兄さん、お前さん、何を御覽なすつたの」

「さあ、拙者が、ぢかに見たといふ譯じや無えのだが、兩國の、とある船宿の二階で、さし向ひの影法師を、ちらりと睨んだ者がこちと等の仲間にあつたのだ、さうして其の一人が兩國橋の女輕業の太夫元のお角さんとやらに似てゐたとかゐなかつたとか岡燒めらが騷いでゐるんだから始末におへねえ」

「え、そりやお安くないんですね、兩國橋の女輕業の何とやらのお角さんと云へば、多分この邊にゐるお婆さんの事でせうけれど、今時こんなお婆さんを相手にする茶人があるといふのは賴も

しいことですね」
「實際、頼もしいんだから驚きまさあね、併し、お婆さんは可哀さうですよ、年増盛りのハチ切れさうなのを捉まへてお婆さんは可哀相だね」
「まあ、宜うござんす、どの道浮名を立てられるうちが人間の花ですからね」
「そりや花ですともさ、ですけれども、花もあんまり、こつてりと咲かれると外の花ながら嫉ましくなるよ、ねえ大將」
「うむ」
「殿様も福兄さんも、何だか奥齒にはさまるやうな言ひ方をなさるから、わたしや、どうも痛くない腹を探られてゐるやうで小焦つたくつて堪りません、わたしの身に後ろ暗い事があるやうでしたら、ハツキリと仰有つて下さいな」
「處が、どうもハツキリとは云へねえんだ、兎も角、船から上ると飛びつくやうに嬉しがつてお手を取つて御案内申し上げ、それから後が船宿のさし向ひといふ御寸法になつたまでは篤と見屆けたんだが、それから先きが惜しいことに雲隱れで……」
「人違ひも其の邊になると御愛嬌ですよ、その色男の面が見てやりたいものでしたね」
「それ〳〵、それが判れば動きは取らせねえのだが、夕方の事ではあつたし、嚴重に覆面はしてゐたし、さつぱり當りがつかなかつたといふのが、此方の弱身だ、それでも、年の頃は三十前後

の品格のある武士で、微行ではあるが旗本とすれば身分の重い方、事によつたら大名の若殿でもありやしねえかと、斯う睨んで來た奴がある」
「おや〳〵、それは大變なことになりましたね、さうして其の御身分のあるお方のお相手といふのが、やつぱり兩國の女輕業の古狸なんですか」
「大地を打つ槌は外るゝとも、それはつかりは疑ひなし」
「ほんたうに有難い仕合せですね、さうして何ですか神尾の殿様、あなた様は、一體その身分のある御武家様が誰方でゐらつしやるか見當をつけておゐで遊ばすでございませうね」
と云つてお角は、そつと神尾主膳の面をうかゞひました。
「そりや拙者にもわからん、その若いのを生捕つて、旗揚の軍費を調達させた當人に聞いて見るより外は無からうよ」
「では全く、殿様は御存知ないんでございますね」
「知つてゐれば只は置かんよ」
「御存知ないのが、當り前ですよ、そんな事が有らう筈がございませんもの、若し、有りましたら、大びらに御披露して隨分皆様を羨ましがらせて上げるんですけれども」
お角は斯う云つて笑ひましたけれども、なほ神尾の腹の底を讀まうとするらしい。併し、神尾はそれ以上は何も知つて居らぬやうです。その時にまた廊下で慌しい人の聲。

「殿様、殿様、神尾の殿様、金助でございます」
金助といふのは多分、兩國橋の上で、宇治山田の米友の爲に大川の眞中へ抛り込まれた其の人に相違ありますまい。でも、無事に這上がつて、此の屋敷へたどり着いたものと思はれます。
お角は金助と入れ違ひに此の部屋を外して土産物らしい風呂敷包を抱えて、廊下を歩いて縁側から庭下駄を穿いてカラ〳〵と庭を廻つて井戸側から土藏の方へと行きます。
「御免下さいまし」
と小聲に云つて、土藏の戸前に手をかけました。重い扉をヅシズシと押し開いて、薄暗い土藏の中へ足を踏み入れ、
「居らつしやいますか」
これも小聲で言なうて見ましたけれど返事がありません。氣味惡さうにお角は藏の中へ二足三足と足を入れて、二階へのぼる梯子段の下まで來て、
「お銀様」
はじめて人の名を呼んで二階を見上げました。けれどもやはり返事はありません。
「御免下さいまし」
再び案内の言葉を述べて、その梯子段を徐かに上つて行きました。梯子段を上りつめると頭の上に開き戸があるのを、下からガラ〳〵と押開いて、

「居らつしやいますか」
はじめて二階の一間を覗いて見ました。それは暗澹たる一室であるけれども、南の方に向いて鐵の格子に金網を張つた窓が開いて居ましたから、下のやうに暗くはありません。で、疊もしつくりと敷き詰めてあつて、四隅には古簞笥や長持や葛籠や明荷の類が壘のやうに積まれてあるけれども、それとても室を狹くするといふほどではありません。
六枚折の古色を帶びた金屏風が立てめぐらされた其の外れから夜具の裾が見える處は、多分、尋ねる人は其處に眠つてゐるのだらうと思はれるのであります。
そこで、お角はまた遠慮をしい〳〵。疊を踏んで六枚折の中を覗きました。成程、そこに夜具蒲團は敷かれてあり、枕もちやんと置いてありましたけれど、主は藻脱のからであります。
「おや、何處へお出かけになつたのでせう」
お角は審かしさうに四邊を見廻しました。それは朝起きたまゝで、床を敷きはなしにして置いたのではなく、何處かへ出かけて、歸りが遲くなる見込から、斯うして用心して出たものとしか思はれません。
お銀様は、一體、何處へ出て行つたのだらう、それがお角には疑問でした。この人は決して外へは出ない人であつた。自分が知れる限りに於ては、この土藏の中を天地として、あの言ひたる不思議な劍術の先生に侍づいて、一歩も此の土藏から出ることを好まない人であつた。それが此の

頃は斯うして夜へかけてまで外出して歸るといふのは、一體何の目的があつて何處へ行くのたらうと、以前を知るお角は其れが不思議でなりません。

それで、四邊を見廻してゐると、少し離れた處の机の上にも夥しい書物が散亂してゐるのであります。この土藏に藏はれた本箱の中から有りたけの本を取り出して、お銀樣が、それを片つはしから讀んでゐるものとしか思はれません。さすがに大家に育つた人、お角なんぞから見ると、たつた一人で牢屋住居のやうな中に居りながら、別の天地があつて讀書三昧に耽つて居られることが羨ましいやうに思はれます。

お角は、机の傍へ寄つて見ましたけれど、ドチラを見ても、四角な文字や、優しい文字、とてもお角の眼にも齒にも合はないものばかりです。氣象の勝つたお角は何だか自分が嘗つけられるやうに感じて、書物を二三册あちら此方に引くり返すと、ふと思ひがけない繪の本が一つ現れました。

それは極彩色の繪の本で、樣々の男や女が遊び戯れてゐる今樣源氏の繪卷のやうなものでありました。

お角はそれを見ると莞爾と笑つて、

「それ御覽、お銀樣たつて只の女ぢやありませんか」

子曰くや、こそ侍れのうちに、こんな浮世繪草紙を見出したことがお角には、却て味方を得たや

うに頼もしがられて、皮肉な笑ひを浮べながら、窓の光に近い處へ持ち出して、その繪卷を繰ひろけて見ると、

「おや」

と云つて、さすがのお角がゾツとするほど驚かされました。

それは繪卷のうちの美しい奥方の一人の面が、蜂の巣のやうに針か錐かのやうなもので突き破られてゐたからです。惡戯にしても餘りに無慘な惡戯でありましたから、お角は身ぶるひしました。急いで其の次を展けて見ると、それは花のやうな姫君の面が、やはり無慘にも同じやうに針で無數の穴が明けられてゐました。

「おゝ怖い」

その次を展けると、水々しい町家の女房ぶりした女の面が、今度は細い筆の先で、無數の點を打ちつけて、盆の中に黑豆を蒔いたやうになつてゐます。

餘りの事に呆れ果てゝお角は、それからそれと見て行くうちに、一卷の繪本のうち、女といふ女の面は、どれも此れも、突かれたり汚されたり、完膚のあるのは一つも無いといふ有樣でした。

「あんまり、これでは惡戯が强過ぎる、何ぼ何でも僻みが强過ぎる」

お角は、此の惡戯がお銀樣の仕業であることは、よくわかつてゐます。さうして、この繪本のうち、美しい男も、好い男も、强さうな男も、いくらも男の數はあるけれども、それには一指も加

へないで女だけをこんなに傷け散らし、汚し散らして、ひとり心を慰めようとするお銀様の心持も大概はわかつてゐるが、それにしてもあんまり僻みが強過ぎて空怖しいと思はずには居られなくなりました。

一體、お角は可なり人を食つた女で、男も女も、あんまり眼中には置いてゐない方だが、どうもお銀様といふ人にはかりは一目も二目も置かなければ近寄れないやうな心持で、これまでゐるのが不思議でした。

あの呪はれた、お銀様の顔が怖ろしいといふわけではなく、どうもお銀様の傍へ寄ると、お角は何かに壓へつけられるやうで、外の男や女のやうに容易くこなすことが出來ません。何を云ふにも大家の娘で、持つて生れた品格といふものがお角と段違ひなせいであるならば、お角は駒井能登守にも神尾主膳にも、あんなに心安立てには出來ない筈だが、お銀様にヂロリとあの眼で睨められると、口から出ようとした言葉さへ咽喉へ押詰まつてしまふのが、自分ながら腑甲斐のないことに思はれて、あとで焦つたがるが其の前へ出ると、どうしても段違ひで相撲にならないことが、自分でわかるだけに口惜しくてならないでゐるのです。

お銀様の應待は、いつも懷中に匕首を蓄へてゐて、いざと云へば、自分の咽喉元へブツツリと其れが飛んで來るやうで危なくて堪らない。お銀様は、たしかに武術の心得もあつて、何物でも身近く寄せつけないだけの用意は、いつでもしてゐる。神尾主膳ほどの亂暴者でも浮かり傍へ近寄れないのは其のせいもあるが、お角の近寄れないのは其れだけではない、何處がどう強くつて、どんなに怖いのだかわからないなりに、お角に取つてはお銀様が苦手です。

お角は其の繪本を見ると、お銀様の生靈が一々其れに乘りうつつてこの薄暗い土藏の二階の一間には、すべて陰深たる何かの呪ひの氣が立てこめてゐるやうで、怖ろしくて堪らないから急いで繪の本を伏せて、梯子段の降り口にかゝりました。

離れにゐるお絹は、此の頃では、ずつと以前のやうに切髪に被布の姿で行ひ澄まして居りました。母屋の方へは滅多に出入しないけれども、どうしたものか、お角が來た時だけはお絹の神經が過敏になります。今日もお角が訪ねて來た事を知つて、

「また、あの女が來たやうだから、お前御苦勞だが容子を見て來てお呉れ」

と召使への女中に云ひつけて出してやりました。そのあとへ、

「御新造、御ゐでか」

庭先から入り込んで來たのは、前に福兄と云つた大奴であります。いつの間にか着物を着替へて若黨の姿になり、脇差を差して刀を提げ、心安立に縁から上つて來ました。

「おや、福村さん」

と云つて、お絹は愛想よく迎へました。お角に云はせれば此の人は福兄で、こゝへ來ては福村さんになる、前の時は奴風で、こゝではもう若黨に早變りしてゐるのが、化物屋敷の化物屋敷たる

所以でありませう。

若黨の福村は座敷へ入つて頻りにお絹と話をしてゐたが、暫くして

「これから大將のお伴と化けて番町まで出向かにやならん、今日はこれで失禮」

と云つて慌しく辭して行きました。

お絹は、それを見送つてゐましたが、やがてハタと障子を締めきつて、

「面白くもない」

つんと机に向き直つて頰杖をつき、頗る不機嫌の體であります、それは實際　お絹に取つては面白くない事でせう、今の福村の話といふのは要するに、お角を賞めに來たやうなものなのです。お角が房州まで出かけて行つて危く命拾ひをして歸つた上に、掘出物を買込んで來るし　それに大名だか旗本だか知らないが兎も角も身分あるらしい立派な金主をつかまへて、近日花々しく兩國橋で二度の旗揚をしようといふ運びになつてゐることを福村が、お絹の前で話して相變らずあの女の腕の凄いといふことを吹聽して行きました。

お絹の前で、お角の腕の凄いことを吹聽するのは、つまりお絹の腕の無いことをあてこすりに來たとひがまれても仕方がないイキとハリとになつてゐるのを福兄が知らない筈は無からうと思はれます。女輕業にしろ、見世物にしろ、女の腕一つで一旗揚けようといふのは兎も角エライ事でないことはない。さうして切つて廻して屋敷へまで吹聽に來られるのを指を啣へて見せつけられるのはお絹として納まらないことであるのは申すまでもない事です。

「忘れた〳〵、印傳の煙草入を忘れてしまつた」

一旦出て行つた福村が後戻りして來たから、何かと思ふと煙草入を忘れてゐるのです。成程、火鉢の下に轉がつてゐるのは本物の擬ひか知らないが兎に角印傳革の煙草入であります。

福村は無情に椽側から手を突き出して、

「濟みませんが突き出してお呉んなさい、でも其の印傳は本物だから安く無えんだ、本物だと云ふことで兩國橋の大夫元が、おれに呉れたんだ、だから、おいらに取つてお安くねえ代物だ」

「持つてお出で」

お絹はゲジ〳〵でも摘むやうにその印傳の煙草入を取り上げると、ポンと椽側へ抛り出しました。

「おや御新造、いやに荒つぽいんですね」

福村は抛り出された煙草入をわざと叮嚀に拾ひ上げて押し戴く眞似をして腰へさし、トツトと行つてしまひました。

十七

その晩の事でありました。吉原の大門を出た宇津木兵馬は摺れ違ひに妙な人と行き逢つてそれを見過ごす事が出來なかつたのは。

それは羽織袴に大小を帶びた立派な武家の姿をしてゐたが、供人は一人もつれず、面は嚴重に覆面で包んでゐます。

兵馬は此の廓へ出入する毎に、往來の人の姿に注意を拂つてゐないことはない、殊に覆面した武家姿のものに向つては、尾行までして見ることが一度や二度ではなかつたが、此の時摺れ違つた覆面の人も亦、その例に洩るゝ事が出來ませんでした。

兵馬はワザとやり過ごして容子をうかゞうと此の覆面の武家の後ろ姿に合點の行かぬ節々が幾つも現はれて來ます。第一、此の武家の歩きぶりがつとめて勢よく闊歩してゐるやうなものだが、何處やらに無理があります。第二には差してゐる大小が釣り合はないといふことはないが、何となく重さうに見えて差し方がこなれてゐないことです。この二つを以て見ると、去るべき者が、わざと武士の姿をして來たものかさうでなければ、病氣上りの人でゝもありさうです。

兵馬は、あまり不思議だから非常中の非常手段ではあつたが、ワザと近寄つて其の武家にカチツと自分から鞘當を試みました。

武士さして鞘當を受けたのは果し狀をつけられたやうなものであるにかゝはらず、その武家は知らぬ顏に人混みに紛れて逃げ去らうとするのは齒痒い。

到底此のまゝには見過ごし難いから、あとをつけると件の覆面は人混に紛れて、見返り柳をくゞり土手へ出て暫らく行くと辻駕籠を呼びました。

それを見ると兵馬も同じやうに駕籠を傭はうと思つたけれど生憎それはなし、刀と脇差を搖りけて、何處までも此の駕籠と競爭する氣になりました。

この駕籠は龍泉寺方面から下谷を經て本郷臺へ上ります。

本郷も江戸のうちと云はれた、かねやすの店ごころではなく、加州家も追分も駒込も一向頓着なしに進んで行く此の駕籠は、果して何處まで行つて何處へ留まるのだか、ほと〳〵兵馬にも見當がつかなくなりました。

併し乍ら、駕籠は、なほずん〴〵と進んで行くうちに、左右は物淋しい田舍の畑道のやうな處になつてゐるやうです。大よその方向と歩いて來た道程で察すれば、駒込の外れか、傳中あたりか、或は巢鴨まで足を踏み入れてゐるかも知れないと思はれます。

とあるお寺の門の前へ來て、はじめて駕籠がハタと留まりました。兵馬も足をとゞめて物陰から遠見にしてゐると、駕籠賃も酒料も無事に交渉が濟んで駕籠屋は引返す、駕籠を出た覆面はおぢの門の中へは入らずに垣に沿うて横路へ廻る。左がなにがし大名の下屋敷とも思はれる大きな塀、右は松並木で、その間に、まばらに見える茅葺の家が、もう一軒も起きてゐるのはありません。

茶畑があつて右へ切れる畑道の辻に庚申塚があります。その時兵馬は、もう宜からうと思つて、後から

「お待ち下さい」

「エ」

兵馬に呼びかけられて覆面の武家は悸つとして立ち留まりました。追ひついた兵馬は、

「お待ち下さい」

と云つてわざと覆面の刀の鐺を取りました。

「誰方でございますな」

覆面の武家は、非常なる驚怖に打たれたやうですけれども、その言葉は叮嚀で、さうして物優しくありましたから、兵馬は却て自分の擧動の餘りになめけであることを恥しく思ふやうになりました。その筈です、兵馬に他の目的があればこそ、我から進んで此んな無禮な振舞をして見ようとはするものゝ、これ等の仕打は一種の不良少年か、追剝類似の隨分たちの良くない擧動と見られても仕方がないのであります、先方が、いよ〳〵恭謙であり、禮儀正しくあることによつて、兵馬は自分で淺ましいと思ひながらも、此處まで來ては退引のならぬ事ですから、

「お見忘れでござるか、先刻、大門にて御意得申した、あの御挨拶が承はりたい爲に、お後を慕うて、これまで參りました、あれは一體、拙者に恨みあつてなされたか、たゞしは、お人違ひでもござつたか、武士の一分そのまゝにはなり難き故、是非御返答が承はりたい」

兵馬は心苦しくも、斯うして性質の惡い强面を試みると、件の覆面はいよ〳〵神妙に、

「あれは人違ひでござりまする、平に御容捨を願ひまする」

斯う云はれて、兵馬は又も取つく島がありません、此方から無禮を加へた上に此處までついて來て、なほ執念深く喧嘩を賣りかけようといふのだから、もう勘忍袋が切れて宜かりさうなものを、こゝでも平身低頭の體で詫び入るのだから、この武士の勘忍力の强さと云はうか、意氣地なしの底無しと云はうか、それに兵馬は呆れながら、

「お人違ひとあらは是非もござらぬが、御姓名が承はりたい、いづれの御家中でおゐでなさるか、それも承はりたい」

斯う云つて突込むと、

「それはお許し下されたい、このまゝにてお見逃し下されたい」

「いゝや、それは相成らぬ」

餘りに兵馬が執念い爲に、さすが勘忍無類の覆面も最早堪り兼ねたか兵馬の隙を見すまして自分の脇差に手をかけて、スラリと拔打を試みようとするらしいから、それを心得た兵馬は逸早く其の武家の利腕を抑へると意外にも其れは女のやうに軟らかな手先であります。

利腕を取つた時に兵馬もこれはと驚きました。手先を押へられた覆面は、それを振り放さうとしましたけれども、その力がありません。

「何卒、お許し下さいませ、このまゝお見のがし下さいませ」

その聲は生地になつた女の聲であります。

「そなたは御婦人でござるな」
「はい」
もう爭うても無益と觀念したらしく、覆面の武家は女としての神妙な白狀ぶりであります。
「御婦人の身で、何故に斯樣に男裝して眞夜中の道を歩かれまする」
兵馬から尋常に尋ねられて、女はさして惡怯れずに、
「これには深い仔細がござりまする、夫が放蕩者故に斯うして姿を變へて吉原へ入り込み、他ながら夫の身持を見守る爲でござりまする」
「あゝ、左樣でござるか」
兵馬は其れで一應納得しました。
「して、お屋敷は」
と次に念を押した時に女は、
「それは……」
と云つて口籠りました。
「强ひてお尋ねは致さぬが、夜更の事故、そこらあたりまでお送り申しませう」
「御親切に有難うございますが、屋敷には、ちと憚ることがござりまする故　どうぞ、このまゝでお見逃し下さいませ」

その時に、向ふの屋敷道に小さく提灯の火影が現れ、話をしながら二三の人が此方へ向いて歩いて來るやうです。その提灯を見ると、男裝した女があわてゝ、
「御免下さいませ、あの提灯は、あれは」
と云つて、四邊を見廻したが、背後にあつたのが丁度、庚申塚です。兵馬に氣兼ねをしながら女は庚申塚の後へ身を隱しました。兵馬もそこに靜止としては居られない氣になつて、男裝した女の武家と同じやうに其の庚申塚の背後へ身を隱しました。
さうしてゐるうちに提灯が庚申塚の前へ通りかゝります。
お供が提灯を持つて先に立ち、眞中に立派な羽織袴の武士、それにつゞいて若黨と見ゆる大兵な男の三人づれが、此の庚申塚の前を通りかゝつて、
「あ、惡いな提灯が消えちまつた」
丁度、時も時、その庚申塚の前まで來た時に提灯が消えてしまひました。これは別段に風があつたといふわけでもなく、また物につまづいたといふわけでもなく、長い時間とぼされてゐた蠟燭の命數がこゝへ來て自然に盡きてしまつたのだから是非もありません。
「立つは蠟燭、立たぬは年期、同じ流れの身だけれど……カネ」
「もう、提灯は要らんよ」
それは主人の聲であるらしい。

「それでも、無提灯で歸るのは景氣が惡いですからね、景氣を附けて參りませうよ」

提灯持は火打道具をさぐつてゐるものらしい。

「よせ／＼、提灯で足許を見られるやうな兄さんとは兄さんが違うんだぞ」

力味返つてゐるのは若黨の肥つた男であるらしい。

それを、やり過ごした兵馬と男裝の女とは庚申塚の蔭から出て來ました。

「どうも不思議だ、今のあの武家は、たしかにあれは神尾主膳に違ひない」

兵馬は斯う云つて闇に消えて行く三人の後影を見つめて追ひかけました。

十八

それから幾らも經たない後、兩國の見世物小屋の屋根から高く釣り下げられた大幟に赤地に白く抜いて、

山神奇童　清澄の茂太郎

とあります。

その見世物小屋といふのは過ぐる時代に、珍らしい印度人の槍藝のかゝつた女輕業の小屋で、その後一時は振はなかつたのを今度、再びこの山神奇童が評判になつて見る／＼人氣を回復しました。

安房國、清澄の茂太郎は、幼い時に父母に別れ、土地の庄屋に引取られ、いろ／＼と憂き艱難、朝は山、夕べは磯、木を運んだり汐を汲んだり、まめ／＼しく働くうちに、庄屋のお嬢さんに可愛がられ、お嬢さんの頼みで、鋸山は保田山日本寺の、千二百羅漢樣の、御首を盗んだはつかりで、お嬢さんと引分けられ、清澄山へと預けられ、其處で修行をする中に、空を飛ぶ鳥や地に這蟲、山に棲獸と仲良になり、茂太郎が西といへば西、東と云へば東、前へと云へば前、後へと云へば後、泣といへば泣もする、笑といへば笑もする、芳濱の小島に、生えてゐる美竹を、笛にこしらへ吹鳴す、その笛の音を聞時は、往く鳥は翼を納め、鳴蟲は音をしのび、荒い獸も首を低て、茂太郎の側へと慕寄、眞紅島田の十八娘、茂太郎の爲に願かけて、可愛の／＼此美竹。

誰いふとなく、こんな文句が流行り出したのは其れから暫らくの後でありました。

看板に山神奇童とあるから、それは山男の出來損ひのやうなものであらうと誰も最初はさう思つて居りましたが、見に來たものは、先づ誰でも其の意外なのに驚かされないわけには行きません。

清澄の茂太郎なるものは實に珠のやうな美少年でありました。天成の美少年である上に、その藝を代へる度毎に、裝を換へました。或時は薄化粧して鐵漿つけた公達の姿となり、或時は野性そのまゝの牧童の姿して舞臺の上に立つけれども、其の天成の美少年であることは、裝を換へる事によつても裝を變へることによつても變ることはありません。

「まあ、綺麗な子、可愛いのね」
先づ此の美少年の美を愛するものは婦人の客でありました。
「物は磨いて見なけりや判りません、あの子が、あんなに綺麗にならうとは、わたしも思つてはゐなかつた」
お角も斯う云つて、茂太郎の美しくなつたことに眼を見開きました。たから、仲間の女藝人達が茂太郎を可愛がることは尋常ではありません。美少年の茂太郎は樂屋でも可愛がられるが、婦人のお客からも可愛がられます。物好きな婦人客はわざ〳〵此の美少年を、近所の茶屋に招いて親しく面を見ようとする者がありました。その時はお角が、ちやんと、おはさん氣取で附いて行くものたから、お客は浮つかり手出しも出來ないで、うつとりと見惚れて、
「まあ、綺麗な子、可愛いのね」
さうして盃と、御祝儀を與へて歸されることも度々ありました。茂太郎は、こんな意味に於て、日に〳〵婦人の最貧客を引つけてゐました。ある種類の婦人客のうちには何かの好奇から、茂太郎を競爭する者さへ現はれようといふ有樣です。お角も、その人氣を得意には思ひながら、また心配にもなつて來ました。
兩國附近のある酒問屋の後家さんが、殊に茂太郎を執心で、お角もそれが爲には思案に亂れてゐることの事でしたが、本人の茂太郎は、一向平氣で、自分の周圍に群る肉の香の高い女達には眼も

呉れず、清澄の山奥から連れて來たといふ唯一の友達と仲睦まじく遊んでゐました。
茂太郎が唯一の友といふのは、長さ一丈五尺ばかりある一頭の蛇です。
順番になると茂太郎は、この蛇を連れて、舞臺へ現れて芳濱の小島の美竹で作つたといふ笛を吹いて蛇を踊らせます。舞臺から歸ると自分の樂屋に蛇を連れ込んで、食物を與へたり、藝を仕込んたりしてゐます。夜になると枕許の箱へ入れて、藁をかぶせてやり、
「お休みなさい」
蛇の持ち上げた鎌首を撫でると、蛇は咽喉を鳴らして眠に就くといふ有樣であります。
茂太郎は在り來りの蛇使ひではありません。この子は、子供の時分から蛇に好かれる子でありました。人の忌がる蛇を集めて大切に育てゝ居りました。
ある日の事、表通りは押返されないほど賑やかたが、人通りもない濕つぽい路次の處からこの輕業小屋の樂屋へ首を出した一人の盲法師がありました。
「今日は」
舞臺では盛んに三味線、太鼓の音や、お客の拍手がパチ〳〵と聞えてゐるのに、こゝでは案内を頼んでも出て來る人がありません。
「今日は」
二度目に云つても、また返事が無いから盲法師は氣兼ねをしながら中へ入つて來ました。薄汚な

い法衣を着て、脊には袋へ入れた琵琶を頭高に脊負つてゐるから琵琶法師でありませう。蹇張りの中へ杖を突き入れると、

「おい〳〵、此處へ入つて來ちや可けねえ、按摩さん、勸進へしちや可けねえよ」

通りかゝつた樂屋番が注意を與へると盲法師は、

「はい〳〵、あの此方樣に、清澄の茂太郎が居りますんでございませうか、居りますんならは逢ひたくつて、やつて參つたものでございますから、お會はせなすつて下ゐるわけには參りますまいか」

「何ですつて、茂太郎さんに會ひたいんたつて、お前さん、何の御用でお出でなすつたんだい」

「へえ、別に用といふわけでもございませんが、人さんの仰有るには、兩國のこれ〳〵の處で、清澄の茂太郎が今大變な評判になつてゐるといふことでございますから、斯うやつて會ひに參りました」

盲法師は竹の杖に兩手を置いて斯ういふと、樂屋番は不機嫌な面をして、

「そりや、茂太郎さんは此方にゐるにはゐるんですが、忙がしいから、さうお目にかゝれますまいよ」

「さうでございますか、そんなに忙がしいんでは無理にと申すわけには參りませんね、わたくしもね、此方へ來ては、また一度も會はないものでございますからね、評判を聞くと、どうも會つて

見たくて堪まらなくなりましたんで、それで斯うやつて尋ねて參りました、ちよつとでも宜いから會つて行きたいんですが、さうも參りませんでせうかね」

「折角だが、今日は駄目だよ、また出直してお出でなさいまし」

「それでは、また出直して來ることに致しませう、茂ちやんに、さう仰有つて下さい、弁信が尋ねて來たと仰有つて下されは直わかります、私もね、あの子が山を逃げると間もなく、山を出て斯うやつて此の土地へ參りました、只今の處では法恩寺の長屋に厄介になつて居りますんですが、事によると近いうち下總の小金ケ原の一月寺といふのへ行くことになるかも知れません、それはまだ定つたわけじやあございませんから、當分は法恩寺に御厄介になつてゐるつもりでございます、また、わたくしも訪ねて參りますが、茂ちやんにも、どうか遊びに來るやうに仰有つて下さいまし、それでは今日は此れで失禮を致します」

脊に負つてゐる琵琶を重さうに樂屋番の前に頭を下げたのは、例の清澄寺にゐた盲弁信でありました。

「宜うございます、さう云ひませう、おつと危ない〳〵、突き當ると溝ですぜ、板圍ひについて直にお出でなさいまし、廣い通りへ出ますから」

樂屋番は出て行く弁信を後から氣をつけてやりましたけれど、そのあとで、

「いやに薄汚ねえ坊主だ、どうして此んな處へ入つて來やがつたらう、一人で入つて來たにして

はあんまり勘が良過ぎらあ」
ぶつ〳〵云つて、中へ引込んでしまつたが、辨信から言傳られたこと　切忘れてしまつて、その趣を茂太郎に取次がうともしない。辨信は濕つぽい路次を辿つて廣い通の方へ歩いて行きました。清澄の茂太郎が兩國へ現れるのと前後して、盲法師の辨信も江戸へ現れました。
處もあまり遠からぬ法恩寺の長屋に居候をすることになつた辨信は毎夜、琵琶を搔き鳴らして江戸の市中をめぐります。清澄にゐる時分上方から來た老僧から、辨信は平家琵琶を敎へてもらひました。
祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅桑樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす……
もとより其れは本格の平家でありましたけれど、門付をして歩いてさのみ人の耳を喜ばすべき種類のものではありません。たからこの盲法師をつかまへて、錢を與へようとする人は極めて乏しいものです。たゞでも耳を傾けようとする人すら極めて少いものでありました。
どうかすると、然るべき身分の人が、
「珍らしいな、今平家を語るものは江戸に十人と有るか無いかだがその平家を語つて、門付をして歩くのは珍らしい」
と云つて珍らしがり、わざ〳〵自分の屋敷へまで招んで呉れる人がありました。そんな人の與へる祝儀が、唯一の實入で、市中で錢を與へる人は、前に云ふ通り極めて少いものでありました

けれども、辨信は怠らずに、それを語つて歩きます。
この頃、兩國で茂太郎の評判が高いのを聞き、若しやと思つて今日は出がけに此の輕業小屋を訪ねて見ましたけれど、樂屋番はすげなく斷つてしまひました。すげなく斷られても、太して悄けもせずに路次を立ち出でました。
で、何處を如何歩いて來たか、その夜になつて、もう琵琶を袋へ納めて胥中へ廻し、家路に歸らうとする氣配で通りかゝつたのは例の柳原河岸です。
「もし、ちよいと」
河岸の柳の蔭から呼ぶものがありました。呼はれる前に立つてしまつた辨信は、
「はい、誰方か私をお呼びになりましたか」
さう云つて例の法然頭を左右に振り立てました。
「ちよいと」
柳の蔭で、聲はかりが聞えます。その聲は若い女の聲であります。
「お呼びになつたのは私の事でございますか、何ぞ私に御用でございますか」
「そんなに四角張らなくつてもいゝじやありませんか、遊んでゐらつしやいな」
「エ、私に遊んで行けと云うんでございますか、あなた樣のお宅はドチラでございますか」
「何を云つてるんです、こちらへゐらつしやいよ」

「あの、琵琶を御所望でございませうな」
「琵琶、そんなものは知りませんよ、そんな事は如何たつていゝじやありませんか」
「いゝえ、宜くはございません、わたくしは琵琶彈きなんでございますよ、眼が不自由なもんでございますからね、それで琵琶を彈いて人樣からお惠みを受けてゐるやうな身の上でございます、琵琶も私のは平家でございますから、薩摩や荒神のやうに陽氣には參りませんでございます、それに、私も未熟者でございましてね、あんまり上手とは申上られないんでございますから、藝人を呼ぶと思召さずに、哀れな盲を助けると思召してお聞き下さいまし、さうでないとお腹も立ちませうと思ひます」
辨信は斯う云つて、あらかじめ申譯をすると柳の蔭にゐた女は笑ひこけるやうに、
「滅多に、こんな正直なお方には打着からないのよ、お前さん、もうお歸りのやうだが、ドチラへお歸りになるの」
「エ、、私でございますか、私はこれから本所へ歸るんでございますよ、本所の法恩寺の長屋に住んでゐる辨信といふものでござんすからね」
「まあ、本所へ歸るの、それじや、わたしも少し早いけれど、一緒に歸りませう」
ずつと前に、宇治山田の米友が、此の通りで同じやうな女の聲で呼び留められた事を御存知の方もございませう。

柳の蔭から出て來たのは、お蝶と云つたその時の女でございます。
お蝶は、決して醜い女ではありません。もう廿二三になるでせうか、脊がスラリとして色も白く面に愛嬌があります。こんな處には珍らしい位の女で、明かるい世間へ出しても十人並で通る女でありました。手拭を頭から被つて出て來たお蝶は、辨信の傍へ寄つて來て、
「わたしも、本所の鐘撞堂まで歸るんですから、送つて上げませうか」
「はい、有難うございます」
お蝶は辨信の案内者になりました。辨信は異議なく其の好意を受けて、二人は打ち連れて淋しい河岸を歩いて行きます。
「辨信さん、あなたは法恩寺樣の長屋に、一人でゐらつしやるんですか」
「エ、、たつた一人で居ります、一人ぼつちでございます」
「御飯の世話なんぞは誰がして呉れるんです」
「皆んな自分でやるんでございます、これから歸つてお茶漬を食べて、それから床を展べて、ゆつくりと足を踏み伸ばすのが、私の一日中の樂みなんでございます」
「眼が不自由で、よくそんな事が出來ますね」
「でも、近所の人樣が可愛がつて下さる上に、私は御方便に勘が宜うございますから、世間並の盲目のやうに不自由な思ひは致しません」

「それでも、病氣の時だとか、洗ひ洗濯だとかいふ事はお困りでせう、惡くなければ、わたしが時々行つてお世話をして上るけれども」

「惡いどころじやあございません、どうか何時でもお出でなすつて下さいまし、お正午前のうちは家に居るんでございますから、法恩寺の長屋へお出でになつて、琵琶の宣伝とお聞きになれば直にわかりますから」

「それでは明日の朝參りませう」

「どうぞお出で下さいまし、失禮でございますが、あなたのお家は本所の何方でございましたかね」

「わたしの處は本所の鐘撞堂新道なのです、鐘撞堂新道の相撲屋といふ家にゐてお蝶といふのが、わたしの名前ですからよく覺えてゐて下さい、さうして、わたしも晝間は大抵遊んでゐますから、お暇の時は、話しにお出でなさいな」

「さうでしたか、鐘撞堂新道といふのは、わたしの處から其んなに遠い所ではございませんね」

「エ、近いんですよ」

「わたしは、房州の者でございましてね、ほんのツイ近頃この江戸へ參つたものですから、よく案内がわかりませんでございます、それに友達といつても一人も無いんでございますよ、でもね、人様が大へん私を親切にして下さるものですから、そんなに淋しいとは思ひませんよ、それに、私は誰方でも人様が好きなんです、何でもいゝから人様の爲になるやうな事ばかりして一生を送つて行きたいと思つてるんですよ、そりや出來やしませんよ、何しろ人間がこの通りでございますし、その上に不具と來てゐませう、人様の爲になるどころじやなく、人様の御厄介にならないのが目つけものです、でもね、斯うして拙い琵琶を彈いて歩きますと、人様が御贔負をして下すつて、自分の暮らしには餘るほどのお金が手に入るもんですから、それを皆んな善い事に使つてしまひたいと斯う思つて居りますんでございます」

「まあ、お前さんは何といふ感心な人でせうね、わたしなんぞも、早く其んな心がけになればいいんですけれど」

「世間の事はなか〳〵思ふやうにはならないものでございますよ、さうして、あなたは鐘撞堂で何を御商賣になすつておゐでなさいますね」

辨信は斯う云つてお蝶にたづねました。

女は、その返答には困りました。

「そんな事は何だつて宜いじやありませんか、それでもね、わたしはお前さんのやうな人は大好きなのよ」

兎も角も、ちよつと道はたで行逢つた人にしては、餘りに慣々しい物の言ひ方でありました。併し、辨信は少しもその相手方を疑うやうなことはありません。

「あ、鐘が鳴りましたね、あれは上野の鐘ですね」
辨信が立ち留まつて鐘の音に耳を傾けるやうでしたが、お蝶には其れが聞えません」
「あなた、何を云つてるんです、鐘も何も聞えやしないじやありませんか、上野の鐘が此處まで聞えるものですか」
「いゝえ、あれは上野の鐘です、他の鐘とは音の色が違ひます」
辨信は取り合はないで鐘の音を數へてゐたが
「あゝ、九ツです、もう九ツになりましたね」
「さうでせう、もう彼是、そんな時分でせうよ」
それで二人はまた歩き出しました。左は土手、右は籾倉の淋しい所を通つて行くと、和泉橋の土手には一箇所の辻番があります。
「どうも御苦勞樣でございます、私は本所の法恩寺前の長屋に住んで居りまして辨信と申します る琵琶彈でございます、おそくなりまして誠に相濟みませんでございます」
斯う云つて先方から何も云はれない先に、辨信は叮嚀に名乘つてお辭儀をして其の前を通り過ぎました。お蝶はその馬鹿叮嚀を可笑しいと思ひながらも、盲目だといふのに、どうして此處に辻番のあることだの、辻番に人がゐるかゐないかだの、それが判るのだらうかと不思議に思ひます。それのみならず、さきに鐘の音に耳を傾けた時も、自分には何處で、どんな鐘が鳴つたのだか、

さつぱり判らないうちに、此の琵琶彈はそれを聞き取つた上に、確かにこれは上野の鐘だと極めをつけてしまつたのも不思議です。盲は目が見えない代りに、勘がいゝものだといふが、それにしても此の琵琶彈はあんまりに勘が好過ぎると思ひましたから、
「辨信さん、お前さんは、何だつてあんなに馬鹿叮嚀に辻番へ挨拶をするんです、第一、番人がゐやしないじやありませんか」
わざと斯う云つて試して見ると、
「いゝえ、そんな事はございません、二人おゐでになりましたよ、一人の方は番所の中に一人の方は、たしか棒を持つて、私達を咎めようとして、此方へお出でなさるやうだから、私は、その前にあゝいつて、ちやんと申譯を致してしまひました」
辨信に圖星を指されて、
「まあ、何て、お前さんは勘がいゝでせう」
お蝶は舌を卷いて、暗い處から辨信の面を見直しました。それは、若しや、この按摩が僞盲で密と目を開いてゐるからではないかと思つたからです、併し、盲目であることに正銘僞りのないのは、その面つきでも足ざりでもまた杖のつきぶりでも充分に信用が出來るのであります。斯うして二人は郡代屋敷の處まで來てしまひました。その時に、盲法師の辨信が凝然として郡代屋敷の塀際に突立つてしまひました。

「あ、あ、あ、あぶない」
杖を以て、前へ出ようとするお蝶を辨信はあわてゝ支へました。
「どうしたの」
「可けません、可けません」
辨信は必死に杖を以てお蝶を支へて一歩も進ませないやうにしながら、己れは身を戦かしつゝ立つてゐたのであります。
「如何したんですよ」
「誰かゐます、行つては可けません、行くと殺されます」
「エ」
お蝶は辨信の傍へ固くなつて立ちすくみました。
土手の陰に蛇がからみ合つてゐるやうに二つの人影が一つになつて撚れつもつれてゐるのを辨信は無論見ることが出來ません、お蝶もそれを知るにはまた餘りに遠い距離でありました。
併し乍ら、土手の陰の二つの人影は、からみ合つてさうして、各々炎のやうな息を吐いてゐることはたしかです。
「お前の歳は幾つだ」
炎のやうな息を吐きながら、一つの影が上から押しかぶせるやうに云ひました。

「何卒御免下さい」
抱きすくめられてゐるのは、やつぱり女の聲でありました。
「うむ、歳は幾つだ、それを云へ」
大蛇が羊を抱き締めたやうに、ぐるぐゝと卷いた、その炎の舌のあるじは正に男です、
「十九でございます」
女は息も絶々になつてゐる。
「十九、名は何といふのだ」
「藤と申します」
「何で、この夜更けに獨り歩きをする」
「御信心に參りました」
「何處へ行つた」
「杉の森の稲荷樣へ願がけに參りました」
「何の願がけに」
「それは、兄が病氣でございますから」
「その兄は幾つになる」
「あの……廿歳でございます」

「この夜更けに丑の刻参りをするほど、その兄が憎しいのか」
「エ……」
「この頃のやうな物騒な夜道にしかも此の淋しい柳原の土手を若い女、たつた一人で出かけたのを、お前の親達は承知か」
「いゝえ、誰にも内密でございます」
「さうして、お前は死ぬほどに其の男が憎しいのか」
「何を仰有るんでございます、どうぞ、お助け下さいまし、こゝをお放し下さいまし」
「本當の事を云へ」
「それが本當でございます、決して嘘を申上げるやうな者ではございません」
「嘘だ、お前は淫奔者だ」
「いゝえ、左様なものではございません」
「淫奔者に違ひない」
「あ、何をなさるんでございます、あなたは本當に、わたしを殺して——」
女は身悶えして、からみついてゐる蛇の口から逃れようとするが、いよ〳〵それは、しつかりと巻き締めて骨身に食ひ入るやうです。
「苦しいか」

「、、、苦しうございます」
「さあ、もつと苦しがれ」
「死にます、あ、あ、息が絶えてしまひます死んでしまひます」
「締め殺して呉れようか」
「あ、苦しい、苦しい」
「その苦しみを、お前の心中立する男に見せてやりたいわい」
「もう、お助け下さい、もうお手向ひしませんから、どうぞ命をお助け下さい、この上、あなたは、本當に、わたくしを殺しておしまひなさるんですか、あ、刀を、刀をお抜きになつて、それでわたしを殺しておしまひなさるのですか、あゝ、可けません、わたくしは、まだ本當に殺されたくはございません、生きて、生きてゐたいのでございます、生きて一目あの人に……生きてゐなければならないのでございます、もうお手向ひ致しませんから、その代り、わたくしの命だけはお助け下さいまし、どうなつても宜うございますから命だけはお助け下さいまし、あ、あ、あはお助け下さいまし、あ、あ、あ、と引くれ——人殺し——女は遂に悲鳴を揚げました。その悲鳴は忽ち弱り果てゝ、息が波のやうに闇の中に、のたうち廻つてゐるのがまざ〳〵と眼に見えるやうです。
石のやうに立ち盡してゐた辨信が、その恐怖から醒めたのは其れから暫く後でありました。
「辨信さん」

お蝶もこの時に漸く口を開けるやうになつて、
「辨信さん、お前何を見てゐたの」
「わたしや、何も見やしません、たゞ、無言つて聞いてゐました」
「何を聞いてゐました」
「彼處で人が殺されたのを聞いて居りました、女の人がなぶり殺しに殺されるのを無言つて聞いて居りました」
「何ですつて、女の人が殺された、冗談じやありません、嚇かしちや可けませんよ」
「嚇かしじやありません、可哀想にぐつと抱き締められて其の上に刀で幾度も抉られました」
「ほんとに、そんな氣味の惡いことを云ふのは廢して下さい、さうでなくつてさへ、わたしはお前さんに留められてから、何だか凄くなつて怖はくなつて堪まらないのですもの」
「どうして、また、私は、あの人を助けて上げられなかつたのでせう」
「あの人だなんて、誰の事なんですよ、誰もゐやしないじやありませんか」
「あ、さうでしたか、お蝶さんお前さんにはあの聲が聞えませんでしたね」
「わたしにや何にも聞えやしませんよ」
「何故、私はあの時に大きな聲をして呼んで上げなかつたんだらう、あの人が、あんなに虐まれて殺されてゐる間、それをこゝに凝と立つて、無言つて聞いてゐた私の心持が自分でわかりませ

「ほんとに何を云つてるんでせうね、辨信さん、お前さんの云ふ事が、また、わたしにはサツパリわからない」
「私も、私で、いよ〳〵自分の心持がわからなくなつてしまひました、たゞ、あゝして虐まれて若い女の人が、なぶり殺に遭つてゐるのを、遠くに離れて聞きながら、私は其れを助けて上げようとしないで、何かの力ですくめられて、その音を聞いてゐる間私も却て、いゝ心持のやうになつて、終ひまで無言つて、それを聞いてゐた自分の心持が自分でわかりません」
「何だか、私はぞく〳〵と凄くなつて來ましたよ、辨信さん、お前さんの其の面が凄くなつて來ました、どうしたら宜いでせうね」
「あゝ、わたしも如何していゝか、わからない、今まで、わたしは此んな心持になつた事はありませんから」
「早く歸りませうよ、早く本所へ歸つてしまひませうよ」
この時に行手の方で騒々しい人の足音と、聲とが起りました。
「今、人殺と云つたなあ、たしかに此處いらだぜ、おいらの僻耳じやねえんだ」
斯う云つて駈け來る人は一人だが、その後に附添つて眞黑い大きな犬が一頭、
「ムク、こゝいらだぜ」

その聲こそは紛うべくもなき宇治山田の米友の聲であります。

「人殺しと云つたのは、こゝいらなんだ、だからヲカしいと思つたんだ」

彼は今、何處にゐるのか知らん、先日も兩國橋の上へ姿を現はした處を以て見れば、やはりあの界隈にゐるものと見なければなりません、彌勒寺橋の長屋にゐるものとすれば、また机龍之助の世話をしてゐるのでせう。龍之助の世話をしてゐるといへば、あの男の擧動が殊にあの身體で夜な〳〵の出歩きが、米友の單純な頭を以て、どうしても了解が出來ないで、眼を睜つてゐることも、米友としては無理のない事です。

「あゝ、居た、居た」

米友は闇の中に躍り上つて地團駄を踏み立てゝゐるものらしい。程なく二人の辻番と宇治山田の米友と、盲法師の辨信とお蝶との五人が、路上に横たはつた一つの屍骸を取卷いて、辨信を除いての四人の眼は、いづれも火のやうになつて、提灯を其の屍骸につきつけてゐるのであります。

「女だ！」

米友が叫びました。

「若い女だ、あたつぽい女だ」

提灯を突つけてゐる辻番が驚く、

「まあ可哀相に」

お蝶は、さすがに眼をそむけてしまひます。

「斬疵ではない、突いて抉つたものぢや、みづおちのあたりにたゞ一箇所」

「左樣、外には疵らしいものはないやうだ、確かに突いて抉つたものだが、刄物は槍か刀か」

「無論、槍傷ではない刀傷だ、して見るど試し斬ではなく、遺恨だらう」

「左樣、戀の恨みで斯うなつたものらしい」

「して、女の素性は一體何者だ」

「左樣、然るべき町家の娘だな、おい姉さん、お前さん、ちよつと此の着物を見て吳れないか」

辻番は提灯を振り向けて、眼をそむけて戰いてゐるお蝶を呼びました。

「ちよつと見て吳れ、着物の縞柄を、ちよつと見てもらひたいものだ」

「如何したらいゝでせう、わたしは怖くつて……」

お蝶は慄へながら、それでも再び屍骸の傍へ寄つて來て、

「京お召でございます、藍に茶の大名の袷、更紗染に縮緬の下着と二枚重ね……」

お蝶は漸く着物の縞目だけを見て斯う云ひました。

「成程」

辻番の一人は矢立と紙を出してお蝶の口書を取らうとするものらしい。

「帶は茶の献上博多でございませうね」

「それから」
「羽織は黒羽二重の加賀絞……」
「成程さうして髪は島田、鼈甲の中差、まあ詳しいことは御檢視が來てからの事だ、處でお前方」
二人の辻番は、改めて米友、辨信、お蝶三人の者を篤と見廻して
「三人の中で、誰が一番先に此の死骸を見つけなすつた、いやまあ、後先はドチラでも宜いが、拘はり合だから三人共、御檢視の來るまで控へてゐてもらひたい、御迷惑たらうが如何も已むを得ん」
そこへ、また一人の辻番が菰をかゝえてやつて來て、
「エライ事が出來たなあ」
菰を女の屍骸へ打ちかけて、
「好い女だなあ、戀の恨みだらうか、一體、此處でやつゝけたのか、殺して此處へ持つて來たのか」
菰をかぶせてしまふのを惜しさうに、其の屍骸を見比べてゐると、
「エヽ、それは殺して此處へ運んで參つたのではございません、あの土手の上で、なぶり殺しにして置いて逃げました、殺した人は男には違ひありませんけれども、決して戀の恨みではございません、殺したくつて殺したくつて堪らない人なんでございます、餘程、腕の利いた人で、無暗

に人が殺したいのです、手にかけて置いて、矢の倉の方へ逃げました」
突然に斯う云ひ出したのは、人數の後ろに超然として見えない眼を見はつてゐた辨信であります。
「エ、お前は其れを見てゐたのかい」
辻番も其の他の者も驚きました、辨信の云ひ分があまりに突然であつたから辻番等は呆氣に取られてゐる處へ檢視の役人が來ました。それで型の如く、年頃、恰好、着類、所持の品、手疵の等子を調べた上に、改めて宇治山田の米友に向ひました。
「其方の處と姓名は」
「鐘撞堂新道相模屋方、友造」
米友は斯う云つて名乘りました。
「お前は此の夜更に何用があつて、こんな處へ通りかゝつた」
「エ、、それは人を迎へに來て……」
米友が少々口籠るのを見て、お蝶が横合から口を出しました。
「わたしの歸りが遲いから、それで此の人が迎へに來て呉れたのでございます」
そこで檢視の役人はお蝶と辨信を後目にかけ、
「お前達はまた何しに、こんな夜更けに此處へ通りかゝつたのだ」
「エ、、それは……」

お蝶も、その返事に少し口籠つたが、そこは米友よりも上手に、
「この人のお歸りを送つて參りましたものでございます、御覽の通りこの人は眼が不自由なものでございますから」
「お前は何處のものだ」
檢視は改めて盲法師の辨信に問ひかけます。辨信は例の通り泣きさうな面をして、
「私は本所の法恩寺の長屋に居りまする辨信と申して、斯うして毎夜々々琵琶を彈いて市中を歩いてゐる者でございます、生れは房州の者でございまして、つい此の頃江戸へ出て參つたんでございますから地理も不案内でございまして……」
「宜しい」
なほ辨信が何事か云はうとするのを、役人は打ち切つて米友の方に向ひ、
「友造さやら、もう一度、お前が此の死人を見つけ出した顚末を述べて臭れ」
「それは、前に申上げた通りなんだ、人殺し――といふ聲が聞えたから、それで飛んで來て見ると、この通りなんだ、その外には何も一向知らねえ」
「それで、その人殺しといふ聲のした時に、怪しい者の逃げて行く影を見とめたといふ事もないのか」
「眞闇で人の影なんぞは些とも見えなかつた」

米友が頭を左右に振つて、背ぜる形をした時に、又しても盲法師の辨信が後から拔からぬ面で口を出しました。
「その人は、確かに向うへ逃げました、この人をなぶり殺しにして置いて、そつと忍び足で兩國の方へ――矢の倉といふんでございますね、あちらの方へ逃げてしまひました」
「ナニ、矢の倉の方へ逃げた、それをお前は見たのか、お前は盲人ではないか」
檢視の役人は、容易ならぬ眼つきで辨信をながめました、附添の者は、やはり險しい面で提灯を辨信に突きつけたが、辨信は一向それを怖れずに、
「はい、御覽の通り盲人でございますから勘が宜しうございますから、それが判りましたのでございます、斯うして抱き締めて苦しがつてゐる處を刀を拔いて、一突に突いて、なぶり殺しにしてゐた處が、私には、はつきりと判りました」
「ナニ、お前は、いよ〳〵不思議なことを云ふ盲人だ」
檢視の役人は米友の訊問を打ち捨てゝ辨信の糺問に取りかゝらうとします。お蝶は傍でハラ〳〵するけれども、盲目の悲しさに、辨信は一向役人の櫻幕を見て取ることが出來ずに、
「私にも、あの時の心持が自分ながら不思議でなりませぬ、ナゼ、それと知つてあの時に大きな聲をして、あの人を驚かしてやらなかつたのか、その心持がどうしても判りませんのでございます」

「いよ〳〵以て、お前は不思議なことをいふ盲人だ、お前のその勘で見たことを逐一云つて見るが宜い」

「ヘエ、申上げませう、お笑ひになつては可けません、私の勘のいゝ事は、初めての人樣は皆んな本當になさらない事が多いんですから、何卒笑はないでお聞き下さいまし、それは此んなわけでございます、殺されたその女の方は、この近處の稲荷樣へ願がけに參つたものらしうございますね、その歸りをあの惡者が待ち受けてゐたものでございます、さうして通りかゝつた處を柳の蔭から出て、ぐつと斯うして羽掻締にしてしまつたから、女の方は何も云ふ事が出來なかつたんだらうと思はれます、それとも、あんまり怖いから、つい口が利けなくなつてしまつたのかも知れません、それから暫らくして、お前は幾つだと惡者が聞きました時に、女の人が十九だと申しました、それからの事は申上げられません、私がぼんやりしてしまつたのでございます、何が何だかエレキにかけられたやうに私は、それを聞きながら、咽喉がつまつて一言も出ないで立ち悚んでしまつたんでございます、處が、判らないにも判らない事は、その惡者が病人なんでございますよ、それが全く不思議でございます、歩くにさへ、やつと息を切つて歩く病人でございます、その病人が、あなた、やつぱり、あゝして辻斬に出て歩きたがるんですから、隨分腕は利いてゐるんでございませう、それにあなた、あれは、たゞ人を斬つて見たいといふ辻斬とは全く違ひます、たゞ斬つたゞけでは足りないんでございます、あゝして嬲り殺しにしなければ納まらないのでございます、苦しがらせて殺さなければ蟲が納まらないといふものでございませう、全く怖ろしいものです、それを私が、こちらに立つて、ちやあんと手に取るやうに聞き込みながら、それで一言半句も物が云へなかつたのは、今考へると私が怖かつたからでございます、若しあの時に、私が何か云はうものならば、きつと私が殺されてしまひます、私が殺されなければ、此のお蝶さんが殺されてしまひます、隨分離れてはゐましたけれども、トテモ逃げる隙なんぞは有りやしません、それで私はスクんでしまひました、動けなくなつたのは自分の身が危ないからでございますね、お蝶さんが可哀相だからでございますね、そのうち、あの女の人が、なぶり殺に逢つてしまつて、惡者は右手の方へと逃げて行きました、間もなくさん〳〵と人の足音でございました、それが、友造さんと仰しやるそのお方で、その時になつて初めて、私の身體からエレキが取れて自由になりました、惡者をお探しになるならば、それは病人のお武家で——あゝ、もう一つ肝腎な事を申し忘れました、その病人の惡者は、私と同樣の盲目でございますよ、病人で盲目で、さうして辻斬をして歩きたがるのですから、全く、今まで私共は聞いた事も無論見た事もない惡者なんでございます」

弊信が順を逐うてスラ〳〵と述べ立てるのを、役人も辻番もお蝶も醉はされたやうに聞いてゐたが、中にも米友が、

「あつゝ、ムクが居ねえ、ムクが何處かへ行つてしまつた」

今更に氣がついて再び地圖鼠を踏みました。

十九

その翌朝になつて、辨信、お蝶、米友の三人共に、役所から許されて歸ることになりました。

一旦、鐘撞堂新道のお蝶の主人の家へ引取つた米友は、それから出直して何處へ行くともなしに歩きながら、

「どうも、判らねえ」

その面に一抹の暗雲がかゝつて頻りに首を傾けながら歩くのです。遂には棒を小脇にかゝへたまま兩腕を組んで、

「判らねえ、判らねえ」

やがて辿りついたのは例の彌勒寺の門前であります。門へ入らうとする途端に、

「やあ、ムク、此處にゐたのか」

出會頭にバッタリと逢つたのは昨夜、柳原の土手で別れたムク犬であります。

「ムク、昨夜、手前何たつておいらを置いてけぼりにして、何處かへ行つちまつたんだ、先廻りをして此んな處へ來てゐるとは人が惡りいな、人じやなかつた、犬が惡りいんだ——たが、お前は良い犬だ」

米友はムク犬の頭を撫でゝやりました。ムク犬は米友に從つて藥師堂の裏手へ廻ると、そこで米友がピタリと足を留め、

「成程、この百日紅の木がいゝ足場になるんだ、この枝を傳はつてあゝ行くと、塀を躍り越すなんぞは盲目にも出來らあな、よし、今日は一つあの枝をぶち落しといてやれ、どうなるか」

板塀の上から枝を出した百日紅の樹を頻りに睨んでゐました。

「たが、やつはり判らねえ事は判らねえ」

米友は、百日紅の枝を仰ぎながら、此處まで來ても、やつはり思案に暮れて、いよ〳〵其の面を曇らしてゐます。

實際、この頃中は米友の頭では解釋しきれない事が起つてゐるに相違ないのです。それで米友は此の頃中、毎晩のやうに、夜中になると例ね起きて例の手槍を肩にして外へ飛び出します。飛び出す時の米友の面は

「ちえッ、また出し抜かれたな」

といふ表情で、或時は町家の軒下をくゞり、或時は屋根の上を躍り越えたりして深夜の市中を走ります。たしかに、何者かを追蒐けて出たのだが、その歸り來つた時には、いつも呆然自失です。何物をも認めることなくして出かけ何物をも得る處なくして歸るのです。歸り來ると、がつかりして、闕伽裏の傍に座を構へながら枕屏風を横目に睨んで、

「ちえッ」

舌を鳴らして額の皺を深くしながら、火を焚きつける事が例になつてゐるのであります。

昨夜――寧ろ今曉の事は例外でありました。今まで、さうして深夜に物を追蒐けて出ても、その當の目的とするものを何もつかまへては歸らなかつたやうに、自分も夜番にも辻番にも尻鬼を摺へられるやうな事はなしに此處まで來たが、昨夜は遂に辻番と檢使の前に立たねばならなくなりました。

併し、それは、鐘撞堂新道の相模屋の雇人であるといふことで、お蝶の巧妙な證明も役に立つて無事に釋放されて今になつて歸つては來たものゝ、昨夜家を飛び出した時の要領は依然として其の要領を得ないで歸つては、空しく百日紅の枝に向つて其の餘憤を漏らすといふやうな譯でありました。

その時に、板塀の中で釣瓶の音がします。誰か水を汲んでゐるに違ひない。そこで米友は板塀の節穴から中を覗きます。

長屋の裏庭の井戸はたで、水を汲んで面を洗つてゐるのは机龍之助でありました。

「ふーん」

それを節穴から覗いた米友は、やつぱり呆れ返つた面をして嘲笑をさへ浮べました。

手拭で面を拭いてしまつた龍之助は、その手拭を腰にハサンで盥の水を流しへザブリとあけし、

それからまた手探りで釣瓶を探つて重さうに水を釣り上げると、それを盥にあけて置いて、椽側の方へ歩いて行く。

「ふーン、馬鹿にしてやがる」

米友がその後姿に冷笑を浴びせてゐる間に、龍之助は椽側まで行くと、そこへ絡げて置いた兩刀を携へて井戸端へ歸つて來るのであります。さうして、刀の柄だけをザブリと盥の中へ入れて、それを頻りに洗つてゐるものゝやうです。柄だけを洗つてゐるのか、或は中身の血ののりでも落してゐるのか、そこは井戸側の蔭になつて、よく見ることが出來ませんけれども、やがて、すつくと立上がつて、兩刀を小脇にして、憂鬱極まる面をうなだれて、悄々と椽側の方に歩んで行く姿を見ると、押せば倒れさうで、いかにも病み上りのやうな痛々しさで、さすがの米友が見てさへ哀を催すやうな姿なのであります。

「あいつは幽靈ぢやねえのか知ら、どうも判らねえ」

そんな、やつくしい姿で椽側の處まで辿りついた龍之助は、そこへ兩刀をそつとさし置いて、日當りのよい處の椽側へ腰をかけました。だから、丁度、米友の覗いてゐる節穴からは正直にその姿を見ることが出來ます。その蒼白い面を、うつむき加減に、見えない目で大地の何處やらを注視しながら、ホツと吐息をついてゐる、その呼吸までが見るに堪へないほどの哀れさであるけれども、日の光りは、うらゝかといつていゝ位のかゞやいた色で、この人のすべてを照して居り

ました。

「おや」

この時に、また米友を驚かせたものがあります。それは、今まで自分の身の邊にゐたムク犬が、いつの間に何處をくゞつてか、もう庭の中へ入り込んでゐて、而も、極めて物慕はしげに龍之助の傍へ寄つて行くことであります。

ムクが近寄ると、龍之助がその手を伸べて頭のあたりを探つて撫でゝやると、ムクは、ちやんと兩足を揃へて龍之助の傍へ跪きました。

龍之助は何か云つて犬の頭へ手を置いて、犬と一緒に仲よく日向ぼつこをしてゐる體です。

これは米友に取つては、非常なる驚異でありました。ムクは、さう安々と一面識の人に懷くやうな犬ではない。彼は善人を敵視しない代りに、惡意を持つた者に對しては、ほとんど神祕的の直覺力を持つた犬であります。まあ、伊勢から初まつて、この江戸へ來ての今日、ムクが本當に懷いてゐる人は、お君と、おいらと、それからお松さん——その三人位のものだと思つてゐる。然るに、今自分の傍を離れて、却て、見も知りもせぬ、あの奇怪極まる盲者の傍へ祖妙に侍つてゐるムクの心が知れない。

米友は何か知らん、胸騒ぎがしました。じつとして居られない程に惑はしくなりました。聲を立てゝムクを呼び立てゝ見ようとして、身を屈めて、手頃の小石を拾ひ取るや、右の手をブン廻す

と、小石は風を切つて庭の中に飛んで行きました。

「誰だ、いたづらをするのは」

「おいらだ〳〵」

米友は百日紅の枝を傳つて塀を乘越してやつて來ました。米友の投げた小石を反らした龍之助は、刀を抱えて障子を開けて家の中へ入つてしまひました。

「ムク」

そのあとで、徒らに眼をパチ〳〵させた米友は、もつてゐた杖の先でムクの首の邊を突いて、

「お前は家へ歸れ」

さう云つてから、今、龍之助が明けて入つた障子を細目に開けて、

「おい先生、如何してるんだ、寢てしまつたのかい」

それでも返事が無いからズカズカと上つて行きました。それで枕屏風の上から中を覗き込んで、

「おい先生、お前、昨夜は何處へ行つた」

その言葉は米友としても突慳貪であります。

「何處へも行かない」

「冗戯云つちや可かない、今度といふ今度こそは、すつかり手證を見たんだ、お前は、昨夜辻斬をしたな」

「そんな事があるものか」
「無えとは云はせねえ、驚いちやつたよ、その身體でお前が毎晩、辻斬に出るといふんだから、初めは、どうも本氣になれなかつたんだか、昨夜といふ昨晩は驚かされちまつた」
「誰がそんな事を云つた」
「誰が——呆れ返つちまうな、あんまり白々しいんで呆れ返つちまうよ、現在、おいらが實地を見屆けてるんだ、お前は一體どういふ了見で、あんな事をやつたんだ、さあ、返事を聞かせて呉れ、返答によつちやあ此方にも了見があるぜ」
「友造、お前の了見と云ふのは其りや如何いふ了見なのだ」
「如何いふ了見だつてお前、無暗に人殺しをする奴は、その儘には置けねえじやねえか」
「そのまゝに置けなければ如何するのだ」
「ちえッ」
米友は舌打ちをして足を二つ三つ踏み鳴らしてから、
「俺等も槍が出來るんだぜ、槍が」
この時も、その持つてゐた手槍で焦れつたさうに壘を突き立てました。
「友造、友造どん」
「何だ」

「お前は先年甲府にゐた事があるだらうな」
「何を云つてるんだ、甲州へ行つてゐた事はあるよ」
「その時な」
「うん」
「ある晩の事だ」
「成程」
「正月の事だつたらうな、寒い晩だ、それに怖ろしく霧の深かつた晩なのだ、その晩に甲府の城下に破牢のあつたのを知つてるだらうな、牢破りの」
「知つてる〳〵、それが如何したんだ」
「その晩に、お前は甲府の町をその手槍を擔いで一文字に飛び歩いて居たらう」
「それに違えねえ」
「その時だ——その時に、お前は命拾ひをしてゐるのを忘れやすまいな」
「命拾ひ、命拾ひ」
米友は、さう云はれて仔細らしく小首を傾けたが、ハタと自分の頬べたを打つて、
「うむ、あれか」
「友造どん、あの時から、わしはお前を知つてゐる」

斯う云はれた時に、米友が再び躍り上つて、

「この野郎！」

と一喝しました。こゝで此の野郎と云つた意味は何だかよくわかりませんが、今まで氣のつかなかつた疑問が一時に解け出したやうな狼狽の仕方で米友が、

「やい、起きて呉れ、起きて呉れ、もゝんぢいを煮て酒を飲ませるから起きて呉れ」

机龍之助は蒲團をかぶつて、あちらを向いて寢ました。

もゝんぢいと酒とで、米友が誘惑を試みようとしても起きる氣色はありません。

「友造どん、甲府でやつた辻斬も、この頃出歩いてやる辻斬も皆んな拙者の仕業だ、あの時以來、斬らうとして斬り損ねたのは、お前ぐらゐのものだ、此の頃もどうかすると、お前を斬つて見たいとも思うが、お前がゐないと世話をして呉れるものが無いからな」

「冗戯じやない」米友は眼を圓くして、

「恩に被せなくつてもいゝやな、斬れるものなら斬つてもらはうじやねえか」

と云ひながら、米友は枕屏風の上から、そろ〳〵と龍之助の枕許へ這ひ寄つて來ました。

「おつと、危ない」

龍之助は寢てゐながら、その片手を伸べて枕許の刀を押へました。

「おい、先生」

「何だ」

「起きて呉れ」

米友は蒲團の上から寢てゐる龍之助をゆすぶりました。

「聞きてえ事があるんだから起きて呉れ、野暮を云ふ處ぢやねえ、お前ほどの腕の者が、人を斬つたからつて、それを今此處で彼是云ふやうな俺等ぢやねえんだ、斬つていゝ奴もあるし、斬られちや惡い奴もあるんだ、斬られて浮べねえ奴もあるし、斬られて冥加になる奴もあるんだ、憚りながら宇治山田の米友も、槍にかけては腕に覺えがあるんだぜ、覺えがあるから、斯う云つちや惡からう譯は無えんだ、筋が立つ處なら、百人でも千人でも斬りねえな、米友も斬りたくなつたら隨分斬られて上げませうさ、若し、筋が立たなけりや、おいらは、もうお前と一緒にゐるのは御免だ、事によつたら、おいらがお前の命を取るぜ、あつたら、お前を一人で、此んな處へ抛りはなしにして置いて、のたれ死をさせるのも業腹だからなあ」

米友は斯う云つて龍之助の枕許で腕組をしました。

「濟まない、友造どん、お前には何とも濟まない事だが、筋が立つの立たぬのと、いふたちの仕事ではないのだ、拙者といふものは、もう疾うの昔に死んでゐるのだ、今、斯うやつてゐる拙者は、ぬけ殼だ、幽靈だ、影法師だ、幽靈の食物は、世間並のものでは可けない、人間の生命を食はなけりやな生きて行けないのだ、だから、無暗に人が斬つて見たい、人を殺して見たいのだ、

さうして、人の魂が苦しがつて脱け出すのを見るこそれで、ホツと生き返つた心持になる、まあ、筋を云へば、そんなやうなものだが、この頃はそれさへ、根つから面白くなくなつたわい、人を斬るのも壁を斬るのと同じやうに飽氣ないものぢや、辻斬が嫌になつたら、その時こそ此の幽靈も消えて亡くなるだらう、まあ、それまでは辛棒してゐて呉れ」

龍之助は寢返りも打たないで、洒然として斯う云つてのけました。

「うーむ」

枕許に腕を組んでゐた宇治山田の米友が、それを聞いて深い息をして唸り出したが頓着せず。

「友造どん、お前の槍の手筋は何處で習つたか知らないが、丸で格外れで、それで、ちやんと格に合つてゐる處が妙だわい、拙者の如きは、これでも幼少より正式に劍を學んだのじや、先祖以來の劍道の家に生れて、父といひ、師といひ、由緒の正しいものだ、拙者だけは破格だ、師に就いたけれども師がない、型を出でたけれども型が無い、一生を劍に呪はれたものかも知れぬ、生涯、眞の極意といふものを知らずに死ぬのだ、若し、神妙といふ處があるなら、それを知つて死にたいものだがな」

龍之助は平然として此んな事を云ひ出したが、今日は其の述懷に多少の感慨があるやうです。

安房の國の卷了

一九　小名路の卷

一

その晩の事、宇治山田の米友が夢を見ました。

米友が夢を見るといふことは極めて珍らしいことであります。米友は聖人とも云ひにくいけれども、未だ曾て夢らしい夢を見たことの無い男です。彼は何かに激して憤ることは憤るけれどもそれを夢にまで持ち越す執念の無い男でした。また物に感ずることも無いとは云はないけれどそれを夢にまで持ち込んであこがれるほどの優しみのある男ではありません。然るに其の米友が珍らしくも夢を見ました。

「あ、夢だ、夢だ、夢を見ちまつた」

米友は身體へ火が附いたほどに驚いて蒲團から刎起きました。實際我々は、夢を見つけてゐるから、そんなに驚かないけれども、物心を覺えて、はじめて夢を見た人に取つては、夢といふものがドノ位不思議なものだか想像も及ばないことです。

米友とても、この歳になつて、初めて夢を見たわけでもあるまいが、この時の狼狽方は、當に初

めて夢といふものを見た人のやうでありました。
さうして例ね起きて手さぐりで燧を取つて行燈をつけ、例の枕屏風の中をのぞいて見ると、其處に人が居りません。
「ちえッ、よく〳〵だなあ、まさかと思つた今夜もまた出抜かれちまつた」
米友はワッと泣き出しました。米友が夢を見ることも極めて珍らしいが、泣き出すことは尙ほ更ら珍らしいことであります。米友は憤るけれども泣かない男です。けれども此の時は、手放しで聲を立てゝ泣きました。
晝のうちに、あれほど打ち解けて話して居つた其の人が、まさか今晩は無事に寢てゐるだらうと思つたのに、もう出かけてしまつた。昨夜の疲れと、その安心とで、ぐつすりと寢込んでしまつた、おれは何といふ不覺だらう、それに、今まで滅多には見たこともない夢なんぞを、何だつて、こんな時に夢なんぞが出て來たんだらう、あんな夢を見てゐる間に出し抜かれてしまつたのだ。
あまりの事に米友も、一時は聲を揚げて泣いたけれども、いつまでも泣いてゐる男ではない、雄々しくも帶を締直して、枕許に置いた例の手槍を手に取つて見たが、どうしたものか、急にまた氣が折れて手槍を疊の上へ叩きつけると、自分は、どつかと行燈の下へ坐り込んでしまひました。
「忌だなあ」
米友は苦りきつて、行燈の火影に薄ぼんやりした室内を見廻した揚句に、ギックリと眼を留めた、

それは床の間の掛軸です。
「此奴だ、此奴だ、こいつが夢に出て來やがつたんだ」
米友が此奴だと云つたのは勿體なくも大聖不動尊の掛軸でありました。可なり大きな軸であるが、隨分煤け方がひどいものであります。併し乍ら、右手に鋭劍を操り、左手に羂索を執り、寶盤山の上に安座して、叱咤暗鳴を現じて怖三界の相を作すといふ威相は、その煤けた古色の間から燦然と現れてゐる處を見れば、また可なりの名畫と見なければなりません。
日頃、こゝに掛けられてあつたのを、龍之助はもとより見ず、米友だけが毎日見てゐるけれども、この男は別段に不動尊の信者ではありません。
「忌に怖かない面をしてゐる奴だな」
米友は、時々、こんな事を考へて畫像を見る位のものでありましたが、今は室内を見廻した眼が、ギックリと其處に留まると米友が戰慄しました。米友をグッと睨みつけてゐる現青黑形大定德不動明王の姿は正しく、たつた今、夢に現はれた其の者の姿に紛れもないことです。米友は不動尊の畫像を睨めて我と慄え上りました。
米友が不動尊の像を睨んでゐる時に、裏の雨戸をホト〳〵叩く音がしました。
「モシ」
微かながらも人の聲がしました。

「はてな」
米友が思案に暮れたのは、若しや龍之助が歸つたのではあるまいかと思つた、それが正しく女の聲であつたからであります。
「もし」
そこで立ち上つて、雨戸の傍へ行つて、
「誰だエ」
「もし、少々、こゝをお明け下さいまし」
「お門違ひじやございませんか」
米友も小聲で云ひました。併し門違ひにも門違ひでないにも、彌勒寺の門を入つて人を尋ねるとすれは、こゝは其の一軒だけです、この深夜に、わざ〳〵こゝまで途惑ひをして入り込む人のあらうとも思はれません。
「いゝえ」
外の女は斯う云ひました。それで餘計に米友の疑問を增したものと云はなければなりません。旨目の劍客と二人して隱れてゐる此の彌勒寺長屋、長屋とは云うけれども近所隣が無い。況して女の近寄るべき筈の處ではありません。併しながら、音なう聲は正しく女でありますから、
「誰だい、何の用があつて、誰を訪ねて來たんだ」

「はい、友造さんといふ方がおゐでになりますか」
「友造は……」
おいらだが、と云はうとしたが米友は思案しました。おれを訪ねて此の夜更に來る女といふのは、全く心當りがない事はない。彼の間の山のお君も、老女の家のお松も、こゝに近い處にゐる筈だ、昨日、不意にムク犬が此處へ姿を見せたことを思うと、或はそれ等の女性のうちの一人が忍んで來たものと思へは思はれないことはない。それで、米友は最前から、戸の棧へ手をかけながらも、外なる女の聲を、じつと耳に留めてゐたのだが、それは、お君の聲でもなければ、お松の聲でもありません。さりとて鐘撞堂新道にゐるお蝶の聲とも思はれないし、無論、兩國にゐる女輕業の親方のお角の聲とは聞き取れないから、米友は迷つてゐるのです。
「あの、お君の處から聞いて參りました、さうしてムクに其處まで案内してもらひました」
「エ、お君の處で聞いたつて」
お君と云ひ、ムク犬と云ふことは米友の信用を高めるのに充分でありましたけれど、而もお君と呼び棄てにする此の女の正體は更にわからないものであります。併し、こゝまで來た以上は開けてやらないのも卑怯であると米友は思ひました。どうかすると其の筋の目付が女を使用して、人の罪跡を探らせることがある。若しさうだとすれは、自分は本來、さまで暗い處はないのだが、一緒にゐる先生は、決して明るい世界の人とは云へない。だから、戸を開く途端に「御用」とい

ふ聲が險呑ではある、明けて宜いものか、惡いものか、それでもまだ米友は暫し途方に暮れてゐると、

「あなたが其の友造さんじやありませんか、本當の名は米友さんと仰有るのでせう、内密のお話があるのですから明けて下さい」

外では存外、落着いた聲で斯う云ひました。よし、此處まで來れば仕方がない。罷り間違つたら二三人は叩き倒して逃げてやらうと米友は足場と逃げ路を見つくろつて置いて例の手槍を拾ひ上げ、片手でガラリと雨戸を押し開きました。

「誰だい」

「わたくしでございます」

「お前さん一人か」

「エ、、一人でございます、御免下さいまし」

その女は男のやうな風をしてお高祖頭巾をすつぽりと被つて居りました。

一體、何にしても人の家へ上るのに頭巾を取らないで上るといふ筈はありません。

女は、このまゝ失禮と斷つたものゝ、座敷へ通つても、やはり頭巾を取らうとはしないで、

「お前さんが、米友さん」

斯う云つて、可なり鷹揚な態度でありました。

「左樣だよ」

米友は極めて無愛想に返事をしました。

「お前さんの噂は、お君から聞いて居りました」

お君、お君、と自分の家來でも呼び棄てるやうに云ふのが心外でした。それよりもお君の友達だから、矢張り自分も家來筋か何かのやうに話しかけるのが米友には心外でした。

「ふん、それが如何したんだ」

「お前さんは怒りつぽい人だといふ事を聞きました、それでも大變正直な人だといふことを聞きました」

「大きにお世話だ」

米友はムツとして口を尖らしたけれど、女はそれを取合はずに、

「ですから、わたしは、お前さんに尋ねたら判るだらうと思つて來ました、お前さんが知らない筈は無いと思つて、わざ〳〵斯うして尋ねて來ました、是非、わたしに敎へて下さい、わたしに隱しては可けません、お前さんが此處にゐることを突き留めるまで隨分骨を折りました、本當の事を云つて下さいな」

斯う云つて、ヂリ〳〵と米友に迫るものゝやうであります。米友は呆れて、凝と其の女の面を見ようとしました。けれども、今云ふ通り面は頭巾で隱してあるのに、わざと、その顏を行燈の火

影から反けようとするのが、どうも面を見知られたくないといふ人のやうであります。さうして突然とは云ひながら、斯うして夜更に一人で、こゝへ押しかけて來たここには、餘程の突き詰めたものが無ければならないやうな權幕も見られます、落着いてはゐるけれども呼吸がせはしくて、その用向は、たしかに物好きや冗戯ではなく、眞劍の有樣が眼に見えるのであります。それですから米友も一概に、それを憤り散らすわけには行かないで、

「一體、お前は何しに來たんだ、おいらに何を尋ねようと思つて來たんだ」

「さあ、お前さんに尋ねたいのは、あの目の見えない人の事、あの人を、お前さんは何處へ連れて行きました、それを教へて下さい、お前さんは、きつと其れを知つてゐるに違ひない」

「ナニ、目の見えない人」

米友は眼を圓くしました。

「さう、吉原からお醫者さんの駕籠に乘せて、お前さんが其の駕籠に附添つて何處へか行つてしまつたといふことを、わたしはちやんと突き止めました」

「ふーん」

米友は、さう云つて、女の面を見ようとしたが、女はやつぱり面を見せません。

「さあ、云つて下さい、お前さんが、若しお金が欲しいなら、わたしの實家へ云つて、幾らでもお金を上げるから、あの人の居所を教へて下さい」

女は、始終ヂリ〳〵と米友に詰め寄るかのやうな勢でありました。

「うむ——おいらの知つてゐる事で、教へて上げても宜い事なら、錢を貰はなくつたつて教へて上げらあな、若し、教へて惡い事だつたら、錢を山ほど積んだつて教へちや遣れねえな、知らなくつても手傳ひをして探してやりてえ事もあるし、知つてゐても知らねえと云つて隱さなけりやならねえ事もあるだらう……、だから、お前は一體誰だ、どういふ因緣で、おいらに其んな事を尋ねるのだか、一通り其れを話して呉んな、それもさうだが、さつきから、おいらの癪にさはるのはお前さんが頭巾を被りながら挨拶をしてゐる事だ、家の中で人と話をするには頭巾だけは取つたら宜かりさうなものだ」

斯う云つて米友は手近な行燈を引き寄せて、意地惡く其の女の面へパッと差しつけて、あつと自分が驚きました。

今夜は怖い晩である。夢に現はれた不動尊は今だに米友には其の心が讀めない、今こゝに現はれた現實の人は、言葉こそ優しい女人であれ、その面貌は云はん方無き奇怪なものである。行燈を引き寄せた米友は再びワナ〳〵と慄へました。寧ろ米友自身の形相が凄じいものになりました。

「おいらは忌やだ、お前と云ふ人は、やつぱり夢じやあ無えのか、女の癖に、たつた一人で此の夜中に、どういふ由があつて、あの人を尋ねて來たんだ、晝間は訪ねて來られねえのか、さうして話をするに、どうして其の頭巾が取れねのえだ」

斯う云つて怒鳴りました。

「米友さん

女は存外、優しい聲でありますけれども、米友の耳には、頭巾の外れから、チラと見た夜叉のやうな面が眼について、その優しい聲が優しく響きません。

「米友さん……お前はお君の事を知つてゐるたらう、わたしの身の上が知りたければ後で、あの子によく聞いて御覽、わたしが斯うして頭巾を被つてゐるわけも、あの子がよく知つてゐますから聞いて御覽、お君は美しい子だけれども、わたしは美しい人ではありませんから……」

「そんな事は、おいらの知つた事じやねえ、美しからうと美しくあるめえと、頭巾を被つて人に挨拶するのは禮儀じやねえ」

「あゝ、わたしは此處へ禮儀を習ひに來たのじやありません、米友さん、わたしは、お前さんに禮儀作法を敎へていたゞく爲に此處へ來たのぢやありません、是非聞かしてもらはねばならぬ事は外にあります、お前でなければ知つた人が無いから、それで、わざ〳〵忍んで此の夜更に訪ねて來ました、きつとお禮はしますから、御恩に着ますから後生ですから敎へて下さい、お前の知つてゐるお君は美しい子だから、誰にでも可愛がられます、わたしは、さうは行きません、わたしを可愛がつて呉れたのは、あの幸内とそれから目の見えない人が、わたしは好きなのです、目の見える人は、わたしは嫌ひです、目の見えない人がわたしは好きで好きで堪りません、米友さん、後生だから其の人の處を敎へて下さい」

女は物狂はしいやうになつて泣き出してしまひました。本もうらも知ることの出來ない米友は呆氣に取られて、得意の啖呵を切つて突放すことも出來ません。それのみならず、此の突然な、無躾な、來客の、人に迫るやうな云ひぶりのうちに、何だか、哀れな、いぢらしいものがあるやうな心持に打たれて、米友は憤つていゝのだか、同情していゝのだが、自分ながらわからない心持で眼を圓くしてゐる外はないのであります。

「おいらには判らねえ」

米友は無意味に斯う云つて首を左右に振りながら眼をつぶりました。

「判らないことは有りません、お前は、きつと知つてゐる筈なのに、これほどに云つても、お前は、わたしに敎へて呉れない、どうしても敎へて呉れなければわたしも了見があるから……わたしは世間から嫌はれてゐます、世間の人からいゝ笑ひ物にされてゐます、それは、わたしが生れつきから、そんなであつたんぢやありません、繼母さんが惡いんです、繼母さんが、わたしを惡んでこんなにしてしまつたのです、その前のわたしは、綺麗な子でした、誰も、わたしを賞めない人はありませんでした、それだのに、繼母さんの爲に此んなにされてしまひました、わたしを見る人は皆んなわたしを嫌ひます、い、笑ひ物にします、それは無理はありません、ですから、わたしは人に見られるのは嫌ひです、ですから、わたしが、本當に好きな人は眼の見えない人た

けなのです、ね、米友さん、わたしの心持が判つたでせう、判つたら、敎へて下さいな、後生だから、あの人のゐる處を敎へて下さいな、賴みます」

女は平伏して米友の前へ手を合せぬばかりです、併し乍らこれは、いよ〳〵米友を煙に卷くやうなものとなりました。

「おいらには、何が何だかよく判らねえが、お前の尋ねるその盲目の先生はな……本當の事を云へば此の家にゐるんだ」

「エ、この家に」

「さうさ、この家においらと二人で隱れてゐるんだが、今は居ねえ」

「何處へ行きました」

「何處へ行つたか、おいらにも譯らねえんだが、夜になると、おいらに默つて、そつと出し拔いて出かけてしまふのだ」

「まあ、何處へ行くのでせう、さうして、何時頃出かけて何時頃歸ります」

「何時頃歸るんだらうなあ、朝になつて見ると、ちやんと歸つてるからなあ」

「あ、それでは判つた、きつと吉原へ行くのでせう」

「吉原へ」

「お前に知れないやうに、吉原へ行つて、またお前に知れないやうに此處へ戻つてゐるんでせう」

「左樣じやねえ」

「其れでは何處へ何しに行きます」

「うむ、そいつは、些と云ひ惡いなあ」

米友は頭を抱へて疊の上を見つめますと、女は一層強く、

「云つて御覽、何を云つても、わたしは怒らないから」

「うむ、お前は一體、あの盲目の先生を、いゝ人と思つてゐるのか、それとも惡人だと思つてゐるのか」

「わたしは何だかわからない、善い人だか、惡い人だかわからないけれど、わたしは離れられない」

「あいつは惡人だぜ」

米友は抱へてゐた頭を擡げて斯う云ひましたけれども、女はさのみ驚きません。

「如何して、あの人が惡いの」

「ありや、女が好きだよ」

「エ」

「さうして腕が利いてるよ」

「それは知つてゐますよ」

「女が好きで、好きな女を皆んな殺しちまうんだ――腕が利いてるから堪らねえ」
「米友さん、お前は其の事を本氣で云つてゐるの、それを知つて、さうだといつてゐるの、エ、それを、わたしが知らないと思つてるの」
「うむ――」
米友は何か知らず力を入れて唸りました。女は、米友の近くへ摺寄つて、
「さあ、云つて下さい、わたしは少しも驚きません、あの人が、女を殺したといふことをお前が知つてゐるなら云つて下さい、わたしも知つてゐることを云つて見せます」
「うーむ」
米友が再び唸つて額に皺を寄せて深い沈默に落ちようとする時に、女は躍起となつて眞向に燈火へ面を向けて、さも心地よささうに、
「だから、わたしは、あの人が好きなのです、あの人は、平氣で人を殺すから、それで、わたしは、あの人が好きです、あの人は、若い女の血を飲みたがつてゐるのでせう、わたしが傍にゐれは、人は殺さないのです、女は殺さない筈です、わたしが傍にゐないから、それで他の女を殺してしまひます、わたしと離れてゐるから、それで咽喉が乾いて我慢がしきれないで、女を殺すんです、無理もありません、さうでせう、毎晩、出かけるのは、吉原へ行くんじやありません、こから吉原へ行くんじやありません、こゝから吉原まで、あの人に往來が出來るわけがありません、そんな事をしたがる人じやありません、あれは辻斬に出るのです、人を斬りに出るのです、それは今に始まつた事じやありません、甲府にゐる時もさうでした、あの人は平氣で何人でも殺してしまひます、え、、わたしだけはよく知つてゐます、何處で、どんな人を幾人斬つたといふことまで、ちやんと帳面に記してあるんですから、それで今晩も出かけたのでせう、何方へ行きました、どの方角へ行きました、米友さん、これから、わたしを其の方角へ連れて行つて下さい」

二

丁度、その晩の事でありました。柳橋の、とある船宿の二階で手紙を讀んでゐるのは駒井甚三郎であります。
「殿樣、あのお客樣が參りました」
取次いたのは宿のおかみさんらしくあります。
「あ、待兼ねてゐた、此處へ通して貰ひたい」
駒井は讀んでゐた手紙を卷きながら待つてゐると、
「御免下さりませ」
おかみさんに案内されて其處へ面を現はしたのは、年の頃五十恰好で、然るべき大工の棟梁といつたやうな人柄の男でありましたが、甚三郎を見ると急に改まつて、

「これは〳〵駒井の殿様でござりましたか、これはお珍らしい處で思ひがけなくお目にかゝりまする」

恭しく其處へ兩手を突いたが、驚きのうちにも相當の親しみがあるらしい。

「寅吉、ほんとに暫らくであつたな」

「いや、もう、隨分思ひがけないことでございました、お手紙が屆いてから、誰方様かと頻りに思案を致しては參りましたが、駒井の殿様とは夢にも存じませんことでございました」

「まあ、兎も角、こちらへ入るが宜い」

「それでは御免を蒙りまして」

寅吉と呼ばれた棟梁らしい男は駒井の傍近く膝行寄つて頭を下げました。

「相變らず壯健で結構だな」

「はい、お陰様で風邪一つ引きも致しませんが、一體殿様は、その後、何方にお出で遊ばしました、江川様にお目にかゝつた時お聞き申して見ましたが、江川様も御存知がないさうでございました、多分、西洋の方へお出でになつたんじや無からうかと、仰有つてゞございましたが、こゝで、殿様にお目にかゝらうとは、ほんとに夢のやうでございます」

「まあ、それを話すと長いことになるがな、拙者は今房州に行つてゐる」

「へえ、房州にお出でゞございますか、房州は何方でゐらつしやいます」

「房州は洲の崎じや、もと砲臺のあつた遠見の番所に隱れてゐたのが、仔細あつて此の頃江戸へやつて來た、噂を聞くと、近頃其方は芝の江川の處に來てゐるさうだから、是非共、會つて見たい心持になつて、あの手紙を遣はしたのじや、早速、出向いて來て呉れて忝けない」

「如何致しまして、さう仰有つて下されば、伊豆が長崎に居りませうとも、いつでも出向いて參ります、私はまた小野様か、肥田様かさうでなければ春山様……と色々にお案じ申上げて參りました」

「就ては寅吉、呼び立てたのはだゞ久しぶりでそちに會つて見たくなつたのみならず、相談したいこともあつての事じや、それより以前に一つそれに對して申譯のない事がある、と云ふのは、あの清吉じや、あれは房州まで拙者と一緒に行つて呉れたが、此處へ來る前の時に、行方知れずになつてしまつたわい」

「エ、、清の野郎が行方知れずになりましたか、あいつは人間が少し愚圖ですからな」

「人間は朴直であつて、腕は、お前の秘藏弟子だけに見所のある男であつたが、不意に行方知れずになつた、手を盡して搜索したが、どうも譯らぬ、あの邊の海は危險な海であるから、事によると、波に捲き込まれたのかも知れぬ、いづれ歸つた上で、また篤と搜索をせにやならぬが、それに就て、そちに頼みたいのは、そちの弟子のうちで、もう一人あれに似たやうなものを世話して呉れまいか、いや一人より二人が宜しい、そちの見立で然るべきものを二人程連れて房州へ歸

りたいものぢや」
「宜しうございます、たしかにお引請申しました」
寅吉は甚三郎の頼みを快く承知する。
「では、定まり次第に、その者を此の家まで向けて貰ひたい、この家の主人はもと拙者の家來筋の者じや、不在でも判るやうにして置く」
「畏まりました、二三日中には必ず連れて參りまする、それはさうと、殿様には房州で何かおはじめなさるんでございますか」
「あの海岸で一つスクーネルをこしらへて見たいのじや」
「成程、それは結構でございます、殿様の御設計ならば、私共が申上げることはございませんが、材料と手間がいかゞでございます、寧そ、石川島でおやりになつたら如何でございますな」
「萬事は彼地で相當に間に合はすつもりじや、土地の若い者を集めて相當に教へ込んでも使へるだらうから、で、二三の友人に相談もして、その助力も受けることになつてゐるから、秘密といふ譯にも參るまいが、成るべく表立たぬやうに、自分共の手一つで仕上げてそして自由に乘り廻せるやうにして見たいと思ふてゐる、それには石川島では都合が惡い、戸田へ行かうかとも思つたが少々遠くもあり差支へもあつて、遂に房州洲の崎の地を選んだ譯じや」
「それは〳〵、さういふ譯でございましたら、取り敢ず間に合ひさうな人を差上げて置きまして、

追付け私共も隙を見てお邪魔に上り、殿様のお差圖で働かせていたゞくと私共も、この位修業になるか知れません」
「お前が來て見て呉れゝは何よりだ、遊びに來てもらひたい」
「必ずお邪魔に上ります、それから何でございますか、そのお船はドの位の大きさになさる御設計でございます」
「拙者は、今、二つの設計を持つてゐるのじや、安政二年に、お前達がこしらへたシコナと同じものにしようか、それとも、千代田形に法つて、それに自分の意匠を加へて見ようかとも思つてゐる、どの道法式は西洋型のものじや」
「成程、さうしますと無論軍艦でございますな」
「いゝや、軍艦ではない、用心の爲に大砲を一門だけは乘せて見たいが、軍艦にしたくないのじや」
人も、さほど多く乘せる必要はないが、さりとて大海を乘り切つて外國に行くに堪へるだけの人と荷物とを容れ得るものでなければならん、長さは十七間餘、巾は二間半、馬力は六十、小さくとも、その邊で無ければなるまいと思ふてゐる」
「成程」
「まあ、これを一つ見て呉れ」

甚三郎は座右の書類の中から、一枚の折り疊んだ繪圖面を取り出しました。

「はゝあ、お見事なものでございますな」

その繪圖面は駒井甚三郎が自ら引いた西洋型の船の繪圖面であります。今云つた通り、スクーネル型の三本柱の船と、それから千代田形の細長い船とが上下に二つ描かれてあるのであります。

船大工の寅吉、これは豆州戸田の人で、姓を上田と云ひ、その頃、日本で唯一人と云つても宜しい西洋型船大工の名棟梁でありました。

寅吉は机の上に展げた船の繪圖面を熟心にながめてゐるし、甚三郎も亦、額を突き合はせるやうにして、その繪圖面をながめて、あれよこれよと、說明し質問し、質問がまた說明に代つたりしてゐるうちに――もう可なりの夜更けであります。遽に人の叫ぶ聲があつてたしか第六天の前、それとも柳橋の袂あたりの空氣がヒヤリと振動したのが、こゝまで打つて響きます。

それで寅吉は我知らず後ろを振り向きました。甚三郎は、なほ繪圖面の上を見てゐるが、それでも、耳を澄まして何事かを聞かんとしてゐるものゝやうです。

ワツと崩れた人の聲が此の時、また、ひつそりと靜まり返つてしまひました。餘りに靜まり返つた爲に、何となく、あたり一はいに漂ふ一道の凄氣が、こゝの一間の行燈の火影にまで迫つて來るやうでありました。程なく、

「ヤア」

と云ふ氣合の聲と共に、チヤリンと合せたのは、たしかに霜に冴ゆる刀の響きでした。駒井甚三郎は、繪圖を手に取つて首を起して、その物音の方をながめます。ながめた處で其處は壁です。甚三郎はその壁の一方を見つめてゐると、寅吉は、やはり同じ方面を見つめて、押し默つてしまひました。

「ヤア」

二度目に、氣合の聲があつたのは、それからやゝ暫らく後の事でした。

「斬合！」

寅吉が少の毛をよだてると、甚三郎は幾分か興味あるものゝ如く其の物音に耳を澄ましてゐましたが、やがて、

「面白い、ドチラも辻斬ぢや、辻斬同志が柳橋を中にして斬り合つてゐるのじや、命知らずと命知らずが、ぶつかつて、あそこで火花を散らしてゐる」

と云ひながら微笑しました。

この時代に於ては、辻斬といふことは、そんなに驚くべきほどの事ではありません。深夜に一旦外へ踏み出せば、自分が斬られるか、或は斬られて倒れてゐるものを發見することは、さして難いことではありません。

けれども、船宿の二階に離れてゐて、霜に冴ゆる白刃の響を遠音に聞いてゐるといふやうな風流

は、ちよつと無い事です。本來、船宿の二階といふものは、眞劍勝負の白刃の響きを聞いてゐるべき處ではありません。江戸時代の船宿の二階といふものは、もう少し違つた風流の壇場でありました。

湖來出島の十二の橋を
行きつ戻りつ思案橋

昔の船宿の船頭には潮來節を上手にうたふものがありました。辰巳に遊ぶ通客は、潮來節の上手な船頭を擇んで贔屓にし、引付の船宿を持たなければ通を誇ることが出來ませんでした。

偶然とは云ひながら、駒井甚三郎は、こゝで軍艦製造の相談をしなければならないのは、駒井その人が無風流なる故ではありません。文化文政の岡場所が衰へても、この時代の柳橋は、それほど江戸つ兒の風流を無茶にするものではありませんでした。川開きの晩に根岸鶯春亭あたりへ逃げて行くほどの、風流は持つてゐた筈であります。不幸にして、今宵は元の駒井能登守が、見慣れない繪圖面を擴げて、スクーネルの、君澤型の、千代田形のと云つてゐる時に聞えたのが生憎、常磐津でもなく、清元でもなく、況んや二上り新内といつたやうなものでもなく、霜に冴ゆる白刃の響きであつた事が風流の間違ひでした。

「はゝあ、殺られたな、相手は一人ぢやないわい、どの道、辻斬りをして歩くほどの亂暴者だから、お互に倒れるまで未練な助けを呼ぶやうな事がない、ましてや此の際、仲裁に出るものがあらうとも思はれない、夜番や巡邏が通りかゝつても見て見ぬふりして通り過ぎるだらう、こりや幾人ゐるが知れんが、この斬合は長さうじや、出て見たら可なりの見物であらうわい」

駒井甚三郎は、何か自分ももどかしさうに、寧ろ其の斬合の音に興味を持つて耳を傾けてゐるが寅吉は、さすがに面を眞蒼にして拳を固めてゐます……斯くて暫らくする時、この船宿の表の戸に突き當る音、續いてバツタリと人の倒れるやうな音がしました。

三

丁度、この晩のこの時刻に、長者町の道庵先生が茅町の方面から、フラ〳〵として第六天の方へ向いて歩いて來ました。

一體、この先生は、こんな處へ出て來なくつてもいゝ先生であります。成るべくは、眞劍の場所へは出したく無いのですが、斯ういふ先生に限つて出るなと云へば出て見たがり、出てもらひたい時には沈没したりして世話を燒かせる先生であります。

いかに先生だとは云へ、身に金鐵の裝ひがあるわけではなく、腕に武術の覺えがあるわけではなく、時は、この物騒な江戸の町の深夜を我物顔に、たつた一人で歩くといふことの非常な冒險であることを知らない譯はありますまい、知つてさうして其の危險を冒すのは、つまり酒がさせる業であつて先生自身の罪ではありますまい。たゞ併し、一杯機嫌で、この眞夜中にフラ〳〵と歩

き出して前後の危險をも忘れてしまひ、たゞ無性にいゝ心持になつてゐるほどに、先生の飲みッぶりは初心なものではない筈だから、何か特別に嬉しいことがあつての上でなければなりません。先生が唯一の好敵手であつた鰯八大盡は、あの勢で洋行してしまつたし、それが爲に、隣の鰯八御殿は、急にひつそりして道庵の貧乏屋敷に一陽來復の春が來たのはおめでたいが、單にそれだけの嬉し紛れに、ほうつき歩くものとも思はれません。

さりとて、また今時分になつて柳橋あたりへ飲み直しに行かうとするものとも思はれない。第六天の神主の鍋木甲斐といふ人が、可なり飲げる方で道庵とも話が合うのだから、これから輿に乘じて、その人を喊のかさうといふ企みのやうに解釋するのも餘りに穿ち過ぎてゐるやうです。

これは先生の爲に、極めて眞面目に解釋して、先生が深夜、急病人からの迎へを受けて、切棒の駕籠にも乘らず、お供の國公をも召し連れず、藥箱も取り敢ずに駈つけて、下地のある處へ病家先の好意で、注ぎ足しをし、その勢に乘じて、長者町へ歸るべきものを、どう間違つたか柳橋方面へ、うろつき出したと見るのが、親切でさうして至當な觀方でありませう。

いつぞやも云ふ通り、平常はぐでん〳〵の骨無し見たやうな先生だが、一たび職務の事になると打つて變つた忠實精勵無類の先生の事だから天下が亂れようとも、行手に危險が蟠まらうとも、深夜であらうとも、辻斬が流行らうとも、一たび病家の迎へを受けた以上は、事を左右に托して其れを謝絶るやうな先生ではありません。——武士が戰場へ臨む心で、斯うしてほうつき歩くの

であります。

好い心持で、獨り言を云ひながら、第六天の前まで先生が來た時に、

「えーッ、危ないよ」

路次の處から警告を與へる聲がありました。

「誰だい、危ねえと云つたのは誰だい、拙者は[illegible]の道庵だよ、十八文だよ」

「先生、危ねえ、今、柳橋で斬合が初まつてるんだ、其方へお出でなすつちや可けません」

「ナ、、ナンダ」

道庵は醉眼を見張つて、路次口の暗い處を見込むと、樅臺の下に隱れて、そこから先生に警告を與へたのは、やはり、先生の名前を知つてゐる地廻りの若い者と思はれます。

それを聞くとどうしたものか、先生の氣が忽ち大きくなりました。

「ナ、ナニ、斬合だ、斬合がどうしたんだ、馬鹿にしてやがら、斬合なんぞに、おゝつかする道庵とは道庵が違うんだ」

「先生、可けませんよ、そんな事を云つたつて駄目ですよ、さむれへが三人で斬り合つてるんだ、早く、此方へ來て、路次へ隱れておゐでなさい、駄目だよ、駄目だよ、そつちへお出でなすつちや駄目だといふのに」

憚りながら、何處へ出たつて押しも押されもしねえ道庵だ、腕くらべなら持つて來て見な、さう